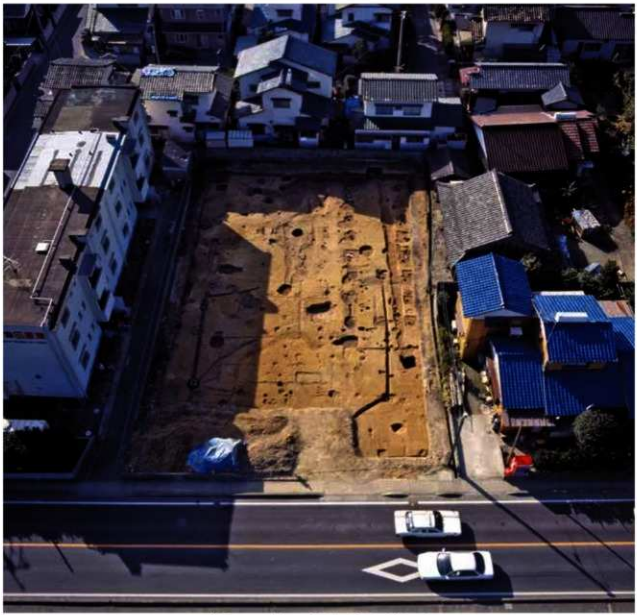
大宰府政庁周辺官衙跡Ⅹ

― 広丸地区　遺構編 ―

2017

九州歴史資料館



巻頭PL.1　第137次調査区全景（北から）

巻頭 PL.2　第96次南調査区全景（東から）

序

当館では，平成 14 年３月に大宰府政庁跡の正式報告書を刊行して以来，大宰府史跡の発掘調査の正式報告書を刊行してきています。昨年度は『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅷ』（大楠地区遺物編）・『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅸ』（大楠地区総括・遺物図版編）を発刊し，これにより，平成 21 年より刊行を続けてきた政庁前面官衙地区の報告書は広丸地区を残すのみとなっていました。

今年度より，広丸地区の報告書を刊行することとなりました。広丸地区は，政庁周辺官衙跡のなかでももっとも西側に位置し，発掘調査の結果，奈良時代から平安時代に至る建物群や区画施設などが見つかっています。その機能や性格については他の政庁周辺官衙跡の調査成果も併せて検討する必要がありますが，大宰府に関わる官衙域の範囲や時期変遷を考察する上で，重要な所見を得ることができました。本書の発刊により，当該地区の歴史的重要性が，地域住民や研究者などに，さらに広く知っていただくこととなれば，望外の喜びでございます。

最後になりましたが，大宰府政庁周辺官衙跡の発掘調査に際しましては，日頃より大宰府史跡調査研究指導委員会をはじめ，文化庁・太宰府市教育委員会や地元の関係者各位から，多大な御指導と御協力をいただいております。ここに記して，深く感謝申し上げます。

さらに今後とも，大宰府史跡の保存・整備・活用に際しまして，関係者の皆さまと連携を密に計りながら，万全を期したいと存じております。

平成２９年３月３１日

九州歴史資料館
館長　杉光　誠

例　言

1　本書は，昭和 48 年度（1973）から福岡県が国庫補助を受け，福岡県教育委員会及び九州歴史資料館が発掘調査を実施した，大宰府政庁周辺官衙跡・広丸地区の正式報告書であり，大宰府政庁周辺官衙跡発掘調査報告書の第 10 集にあたる。

2　本書には，大宰府政庁周辺官衙跡の解明及び整備にかかる資料を得ることを目的として発掘調査を実施した，大宰府史跡第 29 次・95 次・96 次・96 次補足・132 次・133 次・137 次・142 次・148 次・157 次・165 次・166 次・167 次・175 次・186 次・193 次・202 次・202-2 次・211 次・214 次・223 次・224 次調査の成果を掲載した。

3　発掘調査は，大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに実施した。検出遺構及び出土遺物については，各指導委員の御指導と御教示を得た。

4　本書掲載の写真は，鏡山猛氏寄贈のほか当館元参事石丸洋及び同整理指導員北岡伸一，各次調査担当者が撮影したものである。

5　出土遺物の整理・復元，図化・浄書は，調査概要報告時の調査員及び補助員，並びに平成 28 年度報告書作成関係者で行った。

6　出土遺物及び図面・写真等の記録類は，九州歴史資料館において保管する。

7　目次と要旨の英訳は，小澤が行った。

8　本書の執筆は主に小田・小澤が行い，大庭・下原の助力を得た。編集は，大庭・下原の助力を得て，小澤が行った。

目　次

頁

第Ⅰ章　緒　　言…… 1
（1）特別史跡大宰府跡 …… 1
（2）調査の経過 …… 2
（3）調査の組織 …… 3

第Ⅱ章　調査の概要…… 10
（1）調査の概要 …… 10
（2）基本層序 …… 21

第Ⅲ章　検出遺構…… 27
（1）はじめに …… 27
（2）堀立柱建物 …… 27
（3）柵 …… 45
（4）竪穴住居 …… 52
（5）溝 …… 52
（6）土坑 …… 68
（7）土壙墓 …… 85
（8）その他の遺構 …… 92

第Ⅳ章　総括…… 104
（1）はじめに …… 104
（2）広丸地区官衙の範囲 …… 104
（3）検出遺構 …… 104
（4）おわりに …… 105

英文目次…… 109
英文要旨…… 110

Tab. 目次

頁

Tab.1　広丸地区調査次数一覧 …… 3
Tab.2　大宰府史跡調査研究指導委員会委員一覧 …… 4
Tab.3　広丸地区遺構一覧 …… 106

Fig. 目次

頁

Fig.1　大宰府政庁周辺官衙跡調査地一覧図（1/6,000）…… 2
Fig.2　大宰府政庁及び周辺官衙跡検出主要遺構配置図（1/3,000）…… 7
Fig.3　大宰府史跡地域小字図（1/7,500）…… 9
Fig.4　大宰府政庁跡及び周辺官衙跡調査地区割図（1/7,500）…… 10
Fig.5　広丸地区主要調査区配置図（1/1,000）…… 11
Fig.6　29・133 次調査区（1 /600）…… 12
Fig.7　95 次・96 次調査区（1 /600）…… 13
Fig.8　96 次補足・142 次調査区（1 /600）…… 15
Fig.9　137・167・186 次補足（1 /600）…… 15
Fig.10　132・157・165 次調査区（1 /600）…… 16
Fig.11　166・175 次調査区（1 /600）…… 17
Fig.12　193 次調査区（1 /600）…… 18
Fig.13　202・202-2 次調査区（1 /600）…… 19
Fig.14　211 次調査区（1 /600）…… 19
Fig.15　214 次調査区（1 /600）…… 20
Fig.16　223 次調査区（1 /600）…… 20
Fig.17　224 次調査区（1 /600）…… 20
Fig.18　広丸地区基本土層図作成箇所（1/1,000）…… 22
Fig.19　広丸地区基本土層図①（1/60）…… 23
Fig.20　広丸地区基本土層図②（1/60）…… 24
Fig.21　広丸地区建物跡・柵跡・竪穴住居跡配置図（1/1,000）…… 26
Fig.22　掘立柱建物 SB2820 実測図（1/60）…… 27
Fig.23　掘立柱建物 SB2825 実測図（1/120）…… 28
Fig.24　掘立柱建物 SB2830，柵 SA2829 実測図（1/80）…… 29
Fig.25　掘立柱建物 SB2835 実測図（1/80）…… 30
Fig.26　掘立柱建物 SB2842，柵 SA2856・2869 実測図（1/80）…… 31
Fig.27　掘立柱建物 SB3905・3925，柵 SA3912 実測図（1/60）…… 32
Fig.28　掘立柱建物 SB3940・3945・3950，足場 SX3959 実測図（1/120）…… 33
Fig.29　掘立柱建物 SB3958・3998・3999・4130 実測図（1/80）…… 35
Fig.30　掘立柱建物 SB3995 ～ 3997 実測図（1/80）…… 36
Fig.31　掘立柱建物 SB4000・4200 実測図（1/80）…… 38
Fig.32　掘立柱建物 SB4225，竪穴住居 SI4220 実測図（1/60）…… 39
Fig.33　掘立柱建物 SB4340 実測図（1/120）…… 40
Fig.34　掘立柱建物 SB4550（A・B）・4551・4552 実測図（1/80）…… 41
Fig.35　掘立柱建物 SB4553・4554，柵 SA4596 実測図（1/80）…… 43
Fig.36　掘立柱建物 SB4555，柵 SA4557・4558 実測図（1/80）…… 44

Fig.37　掘立柱建物 SB4556・4598 実測図（1/80）…… 45
Fig.38　柵 SA2792・2793 実測図（1/80）…… 46
Fig.39　柵 SA2822・2831 実測図（1/80）…… 47
Fig.40　柵 SA3914・3946・3947・4116・4127・4128・4211 実測図（1/80）…… 49
Fig.41　柵 SA4593 ～ 4595・4597 実測図（1/80）…… 51
Fig.42　広丸地区出土溝・流路配置図（1/1,000）…… 53
Fig.43　溝 SD540 土層図（1/40）…… 54
Fig.44　溝 SD2833・2840 南端部実測図（1/40）…… 55
Fig.45　溝 SD4123 中の暗渠施設 SX4122 実測図（1/40）…… 56
Fig.46　溝 SD4345 土層図（1/40）…… 63
Fig.47　流路 SD2760 中の堰 SX2815・2816・2844 位置図（1/120）…… 65
Fig.48　流路 SD2760 中の堰 SX2815・2816・2844 実測図（1/60）…… 66
Fig.49　流路 SD4542 土層図（1/40）…… 68
Fig.50　広丸地区土坑配置図（1/1,000）…… 69
Fig.51　広丸地区出土土坑実測図①（1/60）…… 71
Fig.52　広丸地区出土土坑実測図②（1/60）…… 73
Fig.53　広丸地区出土土坑実測図③（1/60）…… 75
Fig.54　広丸地区出土土坑実測図④（1/60）…… 77
Fig.55　広丸地区出土土坑実測図⑤（1/60）…… 81
Fig.56　広丸地区出土土坑実測図⑥（1/60）…… 83
Fig.57　広丸地区出土土壙墓配置図（1/1,000）…… 86
Fig.58　広丸地区出土土壙墓実測図①（1/40）…… 88
Fig.59　広丸地区出土土壙墓実測図②（1/40）…… 90
Fig.60　広丸地区出土土壙墓実測図③（1/40）…… 91
Fig.61　広丸地区出土のその他の遺構配置図（1/1,000）…… 93
Fig.62　広丸地区出土井戸実測図（1/60）…… 94
Fig.63　広丸地区出土採土遺構実測図①（1/60）…… 96
Fig.64　広丸地区出土採土遺構実測図②（1/60）…… 97
Fig.65　広丸地区出土落ち込み状遺構実測図①（1/60・1/90）…… 100
Fig.66　広丸地区出土落ち込み状遺構実測図②（1/90・1/60）…… 101
Fig.67　広丸地区出土落ち込み状遺構 SX5010 土層略測図（1/40）…… 102
Fig.68　広丸地区出土鋳造関連遺構実測図（1/20）…… 103
Fig.69　SP2526 実測図（1/20）…… 103

付図目次

付　図　広丸地区遺構配置図（1/400）

PL. 目次

巻頭 PL. 1　第 137 次調査区全景（北から）
巻頭 PL. 2　第 96 次南調査区全景（東から）
PL.1　大宰府政庁地区と広丸地区（上が北）
PL.2　政庁周辺官衙跡遠景（西から）
PL.3　大楠・広丸地区から南を望む
PL.4　(1) 第 29 次調査区 A トレンチ全景（北から）
(2) 第 29 次調査区 A トレンチ SD531（北から）
(3) 第 29 次調査区 A トレンチ SX528（南から）
PL.5　(1) 第 29 次調査区 B トレンチ全景（東から）
(2) 第 29 次調査区 B トレンチ全景（西から）
(3) 第 29 次調査区 B トレンチ SD540 西端部（西から）
PL.6　(1) 第 29 次調査区 C トレンチ全景（南から）
(2) 第 29 次調査区 C トレンチ全景（北から）
(3) 第 29 次調査区 C トレンチ SK533（南から）
PL.7　(1) 第 95 次調査区全景（南から）
(2) 第 95 次調査区西半部遺構群（上が北）
PL.8　(1) 第 95 次調査区 SD2760（西から）
(2) 第 95 次調査区土壙墓群（南から）
(3) 第 95 次調査区南東部の土壙墓群（西から）
PL.9　(1) 第 95 次調査区 SX2764（西から）
(2) 第 95 次調査区 SX2773（右が北）
(3) 第 95 次調査区 SX2774（右が北）
PL.10　(1) 第 95 次調査区 SX2775（東から）
(2) 第 95 次調査区 SX2776（東から）
(3) 第 95 次調査区 SX2794（南から）
Pl.11　(1) 第 96 次調査北区全景（上が北）
(2) 第 96 次調査北区全景（南から）
PL.12　(1) 第 96 次調査北区 SB2825・2830（上が北）
(2) 第 96 次調査北区 SB2825・SD2760（上が北）
PL.13　(1) 第 96 次調査北区 SB2830（上が北）
(2) 第 96 次調査北区 SB2835（上が北）
PL.14　(1) 第 96 次調査北区全景（南から）
(2) 第 96 次調査北区 SB2825（西から）
(3) 第 96 次調査北区 SB2825（北から）
PL.15　(1) 第 96 次調査北区 SB2830（南から）
(2) 第 96 次調査北区 SD2833・2840 南端部（南から）

(3) 第 96 次調査南区全景（南から）
PL.16 (1) 第 96 次調査南区 SD2760（東から）
(2) 第 96 次調査南区 SX2815 全景（東から）
(3) 第 96 次調査南区 SX2815（北から）
PL.17 (1) 第 96 次調査南区 SX2816（南から）
(2) 第 96 次調査北区 SE2845（北から）
(3) 第 96 次調査北区 SE2845 井戸枠（北から）
PL.18 第 96 次調査 SB2825・2830 柱穴半裁状況
PL.19 (1) 第 96 次補足調査区全景（南から）
(2) 第 96 次補足調査区全景（南から）
PL.20 (1) 第 96 次補足調査区 SB2825 東半部（西から）
(2) 第 96 次補足調査区 SA2822（北から）
(3) 第 96 次補足調査区 SK2841（西から）
PL.21 第 96 次補足調査区 SB2825・SA2833 柱穴半裁状況
PL.22 (1) 第 133 次調査区全景（南から）
(2) 第 133 次調査区 SE3910 検出状況（南から）
(3) 第 133 次調査区 SE3910 完掘状況（西から）
PL.23 (1) 第 137 次調査区全景（上が北）
(2) 第 137 次調査区 SB3940・3945・3950（上が西）
PL.24 (1) 第 137 次調査区全景（北から）
(2) 第 137 次調査区全景（北東から）
(3) 第 137 次調査区掘立柱建物群（東から）
PL.25 (1) 第 137 次調査区 SB3940・3945・3950（北から）
(2) 第 137 次調査区 SB3945・3950（北から）
(3) 第 137 次調査区 SE3955（北から）
PL.26 第 137 次調査区 SB3940・3945・3950 柱穴半裁状況
PL.27 第 137 次調査区 SB3940・3945・3950 柱穴半裁状況
PL.28 (1) 第 142 次調査区全景（上が北）
(2) 第 142 次調査区 SB3995 ～ 3997（上が北）
PL.29 (1) 第 142 次調査区南半（北から）
(2) 第 142 次調査区南半（東から）
(3) 第 137 次調査区 SB3995 ～ 3997（東から）
PL.30 (1) 第 142 次調査区 SB3996・3997（東から）
(2) 第 142 次調査区 SB3998・3999（南から）
(3) 第 142 次調査区 SB4000（南から）
PL.31 第 142 次調査区 SB4000 柱穴半裁状況（南から）
PL.32 (1) 第 157 次調査区全景（西から）
(2) 第 157 次調査区北半部全景（東から）

(3) 第 157 次調査区 SX4122 出土状況（南から）
PL.33 (1) 第 165 次調査区全景（左が西）
(2) 第 165 次調査区全景（左が東）
PL.34 (1) 第 166 次調査区全景（上が北）
(2) 第 166 次調査区全景（南から）
PL.35 (1) 第 166 次調査区全景（南から）
(2) 第 166 次調査区 SD4215（北から）
PL.36 (1) 第 166 次調査区 SD4209（東から）
(2) 第 166 次調査区 SD4209（西から）
PL.37 (1) 第 166 次調査区全景（北から）
(2) 第 166 次調査区 SB4200（西から）
(3) 第 166 次調査区 SB4200（南から）
PL.38 (1) 第 167 次調査区全景（東から）
(2) 第 167 次調査区 SI4220（西から）
(3) 第 167 次調査区 SI4220 カマド（西から）
PL.39 (1) 第 175 次調査区全景（上が北）
(2) 第 175 次調査区西半（上が北）
PL.40 (1) 第 175 次調査区東半（上が北）
(2) 第 175 次調査区 SB4340（上が北）
PL.41 (1) 第 175 次調査区 SK4336，SX4333･4334（上が北）
(2) 第 175 次調査区 SK4342･4343，SX4344･4347，SD4345（上が北）
PL.42 (1) 第 175 次調査区北半（西から）
(2) 第 175 次調査区 SB4340（南から）
(3) 第 175 次調査区南半（西から）
PL.43 (1) 第 175 次調査区 SX4334（東から）
(2) 第 175 次調査区 SK4338・4339（東から）
(3) 第 175 次調査区 SX4347（東から）
PL.44 第 175 次調査区 SB4340 柱穴半裁状況①
PL.45 第 175 次調査区 SB4340 柱穴半裁状況②
PL.46 第 175 次調査区 SB4340 柱穴半裁状況③
PL.47 (1) 第 186 次調査区北半全景（東から）
(2) 第 186 次調査区北半全景（南から）
(3) 第 186 次調査区 SB4550 ～ 4552 柱穴半裁（南から）
PL.48 (1) 第 186 次調査区 SB4550A・B 柱穴切合（南東から）
(2) 第 186 次調査区 SB4550B 柱根（北西から）
(3) 第 186 次調査区 SB4550B 柱根（西から）
PL.49 (1) 第 186 次調査区南半全景（北から）
(2) 第 186 次調査区 SK4545（南から）

(3) 第 186 次調査区 SK4546（東から）
PL.50 (1) 第 186 次調査区 SX4548（西から）
(2) 第 186 次調査区 SX4549（西から）
(3) 第 186 次調査区 SD4542 東端土層（西から）
PL.51 (1) 第 193 次調査区全景（西から）
(2) 第 193 次調査区 SK4615（南から）
(3) 第 193 次調査区 SK4616（南から）
PL.52 (1) 第 202 次調査区 A トレンチ（南から）
(2) 第 202 次調査区 B トレンチ（北から）
(3) 第 202 次調査区 D トレンチ（西から）
PL.53 (1) 第 202-2 次調査区 E トレンチ（南から）
(2) 第 202-2 次調査区 E トレンチ土層（東から）
(3) 第 202-2 次調査区 F トレンチ（西から）
PL.54 (1) 第 202-2 次調査区 F トレンチ土層（南から）
(2) 第 202-2 次調査区 G トレンチ（北から）
(3) 第 202-2 次調査区 H トレンチ（東から）
PL.55 (1) 第 211 次調査区トレンチ全景（南から）
(2) 第 211 次調査区トレンチ全景（北東から）
(3) 第 211 次調査区トレンチ土層（西から）
PL.56 (1) 第 214 次調査区 A トレンチ全景（北西から）
(2) 第 214 次調査区 A トレンチ土層（北から）
(3) 第 214 次調査区 B トレンチ土層（東から）
PL.57 (1) 第 223 次調査区トレンチ全景（南東から）
(2) 第 223 次調査区トレンチ全景（南から）
(3) 第 223 次調査区トレンチ土層（南西から）
PL.58 (1) 第 224 次調査区 2 トレンチ全景（東から）
(2) 第 224 次調査区 2 トレンチ土層（南東から）
(3) 第 224 次調査区 2 トレンチ土層（南から）

凡　例

1　本書に掲載の遺構配置図は，国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）をもとに基準点を設け作成している。

2　遺構番号の頭に付した記号は，以下の遺構を示す。
SA：柵，SB：建物，SD：溝，SE：井戸，SK：土坑，SX：その他の遺構

第Ⅰ章　緒　言

（1）特別史跡大宰府跡

大宰府とは

万葉集巻三には，万葉歌人柿本人麻呂により「大君の遠乃朝廷とあり通ふ　島門を見れば神代し思ほゆ」と詠まれた大宰府は，古代律令国家において西海道諸国島に対する内政総監の府として君臨し，さらに海辺防備及び中国大陸・朝鮮半島との外交・交易の拠点としても重要な役割を担った。また，『続日本紀』神護景雲三年（769）十月甲辰条には，「此府人物殷繁，天下之一都会也」と自称した如く碁盤目の街割りが施行され，平城京・平安京に次ぐ規模を誇る最大の地方官衙であった。しかし，大宰府には平城京・平安京にはない特質として，水城大堤・小水城・大野城・基肄城等の土塁及び古代山城からなる堅固な防御施設によって護られた城郭都市という性格をも持っていた。

その大宰府の中核となる遺跡が，太宰府市域の北側に位置し，都府楼跡とも称される大宰府政庁跡（以下，政庁跡）である。政庁正殿跡の基壇上には，三重の円形柱座を有する精美な礎石が整然と並んでおり，かつての栄華を今に伝えている。

大宰府跡の周辺環境

現在，政庁跡のすぐ南側を県道筑紫野太宰府線が東西方向に走るが，県道以北は国指定特別史跡大宰府跡として面積約 29.9ha もの土地が保存され，中心にある政庁跡は史跡公園として整備・活用されている。公園の周囲には梅・桜の木が植樹されており，開花の時期ともなると大勢の花見客が訪れ，桜の名所として賑わう。また政庁跡の背後には，天智天皇 4 年（665）に築城された朝鮮式山城の一つである大野城跡を擁する四王寺山が望め，四王寺山より派生した東側の月山及び西側の蔵司の丘陵があたかも政庁跡を抱くかのごとく南へと伸びる。このように，政庁跡周辺には樹木が生い茂り，緑豊かな風光明媚の様相を呈する。一方，県道以南に目を転じると，あたり一面には個人住宅，アパート等の住宅地が広がり，県道によって史跡指定地と住宅街とのエリアが画されている。

大宰府史跡の調査の推移

政庁跡の発掘調査は，昭和 43 年 10 月 19 日，政庁中門跡の調査を嚆矢とする。調査の結果，Ⅰ期（7 世紀後半）・Ⅱ期（8 世紀前半～ 10 世紀中頃）・Ⅲ期（10 世紀後半～ 11 世紀後半頃）にわたる遺構が確認され，Ⅲ期の建物は天慶四年（941），藤原純友の乱で焼失したⅡ期の建物を 10 世紀後半に再建したものであることなど，重要な事実が明らかとなった。

昭和 47 年に九州歴史資料館が発足して以降は，当館が大宰府史跡の発掘調査を担当し，出土品の展示・保管を行うとともに，九歴講座・九歴論集，現地説明会等により調査研究成果を公開し，当館が小郡市に移転した後も大宰府史跡に関する調査研究，情報発信を行っている。

また，政庁跡前面の県道以南から御笠川にかけての地区は，今でこそ大宰府に関連する官衙が広がることが判明しているが，土地区画整理事業が始まった昭和 54 年頃はそのようなことは誰も予想しなかった。大宰府史跡 17 次調査で礎石建物が発見されたのを初めとして，32 次調査では掘立柱建物 2 棟が発見され，その後も官衙と呼ぶに相応しい大規模な建物群や柵，境界溝などが続々と確認された。特に南北溝 SD2340 からは天平 6 年（734）・同 8 年（736）の紀年銘を有する木簡，紫草に関する木簡等が出土し，鏡山猛が想定した県道を南限とする方 2 町の府庁域が県道以南にも広がっていることが明らかとなった。現在では，政庁跡前面域の建物群は，東から日吉地区官衙，政庁前面広場を挟んで不丁地区官衙，大楠地区官衙，広丸地区官衙と小字の名称で区分しており，それに則って官衙域の正式報告書を刊行している。

（2）調査の経過

本冊の位置づけ

本報告書は，大宰府周辺官衙跡の正式報告書の 10 冊目にあたり，政庁跡の南西に位置する広丸地区で検出された遺構を報告するものである。本来であれば遺構とそこから出土した遺物を同一報告書内で報告するほうが遺構・遺物の理解の上からもよいのであるが，広丸地区は面積がかなり広域で遺構・遺物の量も多く，予算的・時間的制約もあって単年度の報告を断念せざるを得なかった。出土遺物の報告は次年度以降の刊行を予定している。

広丸地区の範囲

今回広丸地区官衙として報告する範囲は，南北が，県道筑紫野太宰府線から御笠川までの間の，長さ約 200mの範囲である。東西であるが，広丸地区に東接する大楠地区官衙の報告の際に，かつて小字の「大楠」と「広丸」の境界となっていた里道を，大楠地区の西限としたことから，政庁中軸線から西に約 330m の地点にあたるこの里道を東縁として，これより西側を今回報告の対象範囲とする。西縁は県道 113 号線（旧国道 3 号線）が御笠川を渡る付近で御笠川が大きく北に蛇行して広丸地区の西側を区切る形となっている。

報告する調査次

報告する調査次数は，大宰府史跡第 29 次，95 次，96 次，96 次補足，132 次，133 次，137 次，142 次，148 次，157 次，165 次，166 次，167 次，175 次，186 次，193 次，202 次，202 － 2 次，211 次，214 次，223 次，224 次調査である。各調査区の概要については後述する。

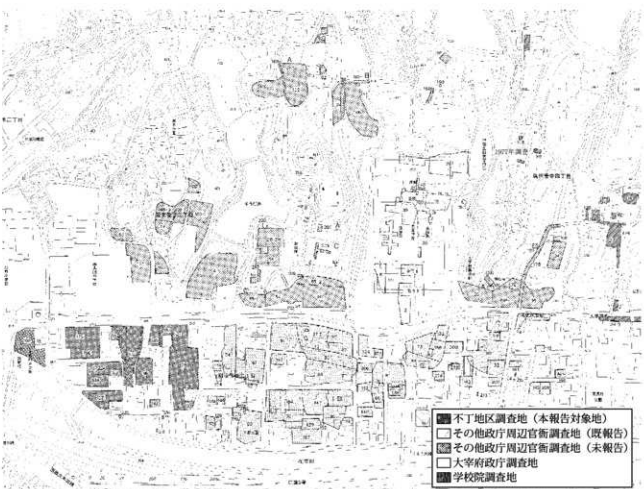


Fig.1　大宰府政庁周辺官衙跡調査地一覧図（1/6,000）

Tab.1　広丸地区調査次数一覧

No.	次数	地区略号	面積(㎡)	調査期間	地番	報告書
1	29	6AYM	150	730620～730731	筑紫郡太宰府町大字観世音寺字広丸	概S.48
2	95	6AYM-D	1,060	850401～850529	太宰府市大字観世音寺字広丸349-1	概S.60
3	96	6AYQ-A	2,015	850601～851023	太宰府市大字観世音寺字広丸352-1・3	概S.60
4	96補足	6AYQ-A-V	200	930625～930728	太宰府市大字観世音寺字広丸1180	概H.5
5	132	6AYQ-AMN	16	910619～910621	太宰府市大字観世音寺字広丸355-15	不掲載
6	133	6AYM-D-N	88	910711～910813	太宰府市大字観世音寺字広丸341-1	概H.3
7	137	6AYM-D-V	600	911008～911216	太宰府市大字観世音寺字広丸337-1他	概H.4
8	142	6AYQ-A-W	488	920615～920727	太宰府市大字観世音寺字広丸352-1	概H.4
9	148	6AYQ-A-Q	88	921222	太宰府市大字観世音寺字広丸353-4・6他	不掲載
10	157	6AYQ-A-Q	337	940113～940419	太宰府市大字観世音寺字堂廻字広丸355-10	概H.6
11	165	6AYQ-A	37	941031～941219	太宰府市観世音寺3534-6・9	概H.7
12	166	6AYQ-A	528	941031～950123	太宰府市観世音寺478	概H.7
13	167	6AYM-A	216	950118～950206	太宰府市大字観世音寺字広丸350-6	概H.7
14	175	6AYQ-A	580	960709～960831	太宰府市観世音寺355-5	概H.8
15	186	6AYM-D-Y	400	020205～020326	太宰府市観世音寺2-216・217	史跡Ⅱ
16	186補足	6AYM-D-Y	45	030310～030318	太宰府市観世音寺2-216・217	史跡Ⅲ
17	193	6AYM-D	67	050725～050809	太宰府市観世音寺2-207	史跡Ⅳ
18	202	6AYQ-B	25	081127	太宰府市観世音寺2-303・304	史跡Ⅵ
19	202-2	6AYQ-B	102	090615～16・100107	太宰府市観世音寺2-303・304	史跡Ⅵ
20	211	6AYM-D	7	110401	太宰府市観世音寺2-229,230-2	史跡Ⅶ
21	214	6AYQ-B	6	120124	太宰府市観世音寺2-14-28	史跡Ⅷ
22	223	6AYQ-A-K	4	131226	太宰府市観世音寺2-239	史跡Ⅷ
23	224	6AYQ-A-Q	14	140626	太宰府市観世音寺2-275	史跡Ⅸ

（3）調査組織

大宰府跡の調査組織

九州歴史資料館は，（政庁前面官衙域を含む）大宰府史跡の計画的調査・研究，開発に先立つ確認調査，歴史資料の収集・保管・調査研究，展示及び整備等を所管する機関として，昭和47年4月に太宰府市内に設置された施設である。設置以後，大宰府史跡の発掘調査については同館調査課が主にその任にあたってきた。

平成20年度の組織改編により，調査課のほか学芸一・二課が学芸調査室として統合され，その下に学芸班・調査班が置かれた。これより以後，大宰府史跡の発掘調査は学芸調査室調査班が担うこととなった。

平成22年7月には，それまで太宰府の地にあった九州歴史資料館が小郡市に移転し，同年11月21日に新施設が開館した。直後の平成23年度春の組織改編により，九州歴史資料館は総務室・学芸調査室・文化財調査室の3室構成となった。平成20年度より大宰府史跡の発掘調査を担当してきた学芸調査室調査班は，学芸調査室調査研究班として再編され，引き続き大宰府史跡の発掘調査を担うこととなった。

平成28年度春の組織改編では，九州歴史資料館が行う発掘調査業務の効率化をはかるため，大宰府史跡の発掘調査を担う調査研究班が県内の各種開発に先立つ緊急発掘調査を担当してきた文化財調査室に異動し，文化財調査室調査研究班として引き続き大宰府史跡の発掘調査を担うこととなり，現在に至っている。

調査の指導体制

大宰府史跡の発掘調査及び報告書刊行にあたっては，九州歴史資料館の発足時より，諮問機関として「大宰府史跡発掘調査指導委員会」を組織し，5カ年を一区切りとする調査計画，単

年度ごとの事業計画を策定して委員会に諮りつつ事業を進めてきた。昭和 59 年にはそれまで 10 名の委員で構成されてきた諮問委員会を 15 名体制とし，名称を「大宰府史跡調査研究指導委員会」と改称した。現在，国史学 5 名，考古学 4 名，建築史学 2 名，造園学 2 名，都市工学 1 名，土木工学 1 名の計 15 名の委員により組織された上記委員会による指導助言を受けて，大宰府史跡の発掘調査・報告書作成等の事業を行っているところである。

Tab.2　大宰府史跡調査研究指導委員一覧（在任年順，◎は委員長経験者を表す）

氏　名	分　野	職（就任時）	在任期間
◎竹内　理三	国　史	早稲田大学教授	S43 ～ S58
鍋山　猛	考　古	九州大学教授	S43 ～ S46
浅野　清	建　築	大阪市立大学教授	S43 ～ S62
井上　辰雄	国　史	熊本大学教授	S43 ～ S58
井上　光貞	国　史	東京大学教授	S43 ～ S56
大田　静六	建　築	九州大学教授	S43 ～ S58
◎岡崎　　敬	考　古	九州大学助教授	S43 ～ H 2
岸　俊男	国　史	京都大学教授	S43 ～ S61
坂本　太郎	国　史	國學院大学教授	S43 ～ S55
坪井　清足	考　古	奈良国立文化財研究所　平城宮跡発掘調査部長	S43 ～ H 7
◎小田富士雄	考　古	九州大学助手	S43 ～
◎平野　邦雄	国　史	東京女子大学教授	S59 ～ H7
狩野　　久	国　史	奈良国立文化財研究所　飛鳥藤原宮跡発掘調査部長	S59 ～ H7
◎笹山　晴生	国　史	東京大学助教授	S59 ～ 22
澤村　　仁	建　築	九州芸術工科大学教授	S59 ～ 24
杉本　正美	造　園	九州芸術工科大学教授	S59 ～
中村　　一	造　園	京都大学教授	S59 ～ 19
◎橋山　浩一	考　古	九州大学教授	S59 ～ 11
渡辺　定夫	都市工学	東京大学教授	S59 ～
八木　　充	国　史	山口大学教授	S63 ～
川添　昭二	国　史	九州大学教授	S63 ～ 17
鈴木　嘉吉	建　築	奈良国立研究所長	S63 ～
西谷　　正	考　古	九州大学教授	H 4 ～ H19
佐藤　　信	国　史	東京大学教授	H 6 ～
坂上　康俊	国　史	九州大学教授	H 8 ～
田中　　琢	考　古	奈良国立研究所長	H 8 ～ H10
町田　　章	考　古	奈良国立研究所長	H11 ～ H16
山中　　章	考　古	三重大学教授	H12 ～
田辺　征夫	考　古	独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所長	H17 ～ H22
林　　重徳	土木工学	佐賀大学教授	H18 ～
石松　好雄	考　古	元九州歴史資料館副館長	H20 ～ H23
尼崎　博正	造　園	京都造形芸術大学教授	H20 ～ H23
松村　恵司	考　古	独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所長	H23 ～
森　　公章	国　史	東洋大学教授	H23 ～
高橋　　章	考　古	求菩提歴史資料館長	H24 ～
箱崎　和久	建　築	独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所	H25 ～

大宰府史跡の発掘調査については，九州歴史資料館発足前の昭和 43 年に始まった第 1 次調査から平成 28 年度までの計 48 年間の間に計 235 次の調査を蓄積してきた。その間，発掘調査を担当した職員も多く，すでに退職し，あるいは鬼籍に入った職員もいる。

平成 11 年度まで，大宰府史跡の発掘調査成果については，地区ごとにある程度成果がまとまるまで正報告の刊行を延期し，かわりに年度ごとに調査成果を概要報告という形で公開してきた。しかし，上述のように調査が始まって長期間がたつと，調査を担当する職員の出入りが多くなり，過去に調査に携わった職員の多くは職務を外れ，現在では発掘調査に全く携わっていない職員が正式報告書の作成を行うという体制が常態化してきた。本冊もこのような環境の中で作成しているため，もちろん当時の記録をできる限り読み解いて遺漏のないように努めてはいるものの，報告内容については記録・記述の不備や不十分，あるいは成果に対する誤解なども存在する可能性があることを御了承いただきたい。

なお，こうした弊害をなくすため，平成 12 年度からは，原則として調査の行われた翌々年度までに，従来のような概要報告ではなく，調査の成果を逐次的に網羅した正報告を刊行することとしている。

大宰府政庁跡周辺官衙跡広丸地区調査関係者一覧

広丸地区官衙の発掘調査及び報告書関係者は以下のとおりである。なお，館長は昭和 47 年度から，副館長は関係年度のみ氏名を掲載した。

九州歴史資料館

館長	鏡山　猛（1972 ～ 1980）	副館長	岩下光弘（1973）
	田村圓澄（1981 ～ 1991）		前田栄一（1985・1991）
	吉久勝美（1992 ～ 1995）		石松好雄（1992･1994･1996）
	高橋良平（1996・1997）		柳田康雄（2002）
	光安常喜（1997 ～ 2001 ／兼務）		橋口達也（2003）
	森山良一（2002 ～ 2007 ／兼務）		濱田信也（2005）
	西谷　正（2008 ～ 2012）		平山浩一（2008）
	荒巻俊彦（2013）		南里正美（2009･2011）
	杉光　誠（2014 ～）		篠田隆行（2013）
			飛野博文（2016）

29 次（1973）	石松好雄・横田賢次郎・高橋章・児玉真一
95 次（1985）	石松好雄・倉住靖彦・高倉洋彰・横田賢次郎・森田勉・赤司善彦
96 次（1985）	石松好雄・倉住靖彦・高倉洋彰・横田賢次郎・森田勉・赤司善彦
96 次補足（2003）	高橋章・小田和利・吉村靖徳
132 次（1991）	栗原和彦・橋口達也・横田賢次郎・赤司善彦・吉村靖徳
133 次（1991）	栗原和彦・橋口達也・横田賢次郎・赤司善彦・吉村靖徳
137 次（1991）	栗原和彦・橋口達也・横田賢次郎・赤司善彦・吉村靖徳
142 次（1992）	栗原和彦・橋口達也・横田賢次郎・赤司善彦・吉村靖徳
148 次（1992）	栗原和彦・橋口達也・横田賢次郎・赤司善彦・吉村靖徳
157 次（1994）	栗原和彦・横田賢次郎・小田和利・吉村靖徳・小川泰樹

165 次（1994）　栗原和彦・横田賢次郎・小田和利・吉村靖徳・小川泰樹
166 次（1994）　栗原和彦・横田賢次郎・小田和利・吉村靖徳・小川泰樹
167 次（1994）　栗原和彦・横田賢次郎・小田和利・吉村靖徳・小川泰樹
175 次（1996）　栗原和彦・横田賢次郎・小田和利・小川泰樹・杉原敏之
186 次（2002）　高橋章・中間研志・小田和利
186 次補足（2002）　高橋章・中間研志・小田和利
193 次（2005）　児玉真一・石丸洋・小田和利・杉原敏之・岡寺良
202 次（2008）　杉原敏之・岡寺良・一瀬智
202-2 次（2009）　岡寺良・一瀬智・小島篤
211 次（2011）　杉原敏之・下原幸裕・小島篤
214 次（2011）　杉原敏之・下原幸裕・小島篤
223 次（2013）　杉原敏之・下原幸裕・岡田諭
224 次（2016）　小澤佳憲・大庭孝夫・下原幸裕

本書に掲載した各調査の出土遺物に対する保存処理は横田義章・加藤和歳・小林啓が担当した。遺構の写真撮影については各調査担当のほかに石丸洋・北岡伸一が担当した（但し空撮写真を除く）。

本書の作成にかかる平成 28 年度の関係者は以下のとおりである。

九州歴史資料館

総　括	館長	杉光　誠
	副館長	飛野博文
庶　務	総務室長	塩塚孝憲
	総務班長	中村満喜子
	事務主査	西村知子
	主任主事	原野貴生
	主任主事	秦　健太
	主事	甲斐進也
報　告	文化財調査室長	吉村靖徳
	文化財調査室長補佐	伊崎俊秋
	調査研究班長	小澤佳憲（執筆・編集）
	技術主査	大庭孝夫（執筆）
	主任技師	下原幸裕（執筆）
	学芸調査室長	小田和利（執筆）
保存処理	学芸調査室保存管理班長	加藤和歳
	主任技師	小林　啓

なお，発掘調査，報告書作成にあたり，太宰府市教育委員会文化財課諸氏には有益なご教示を賜った。記して感謝したい。

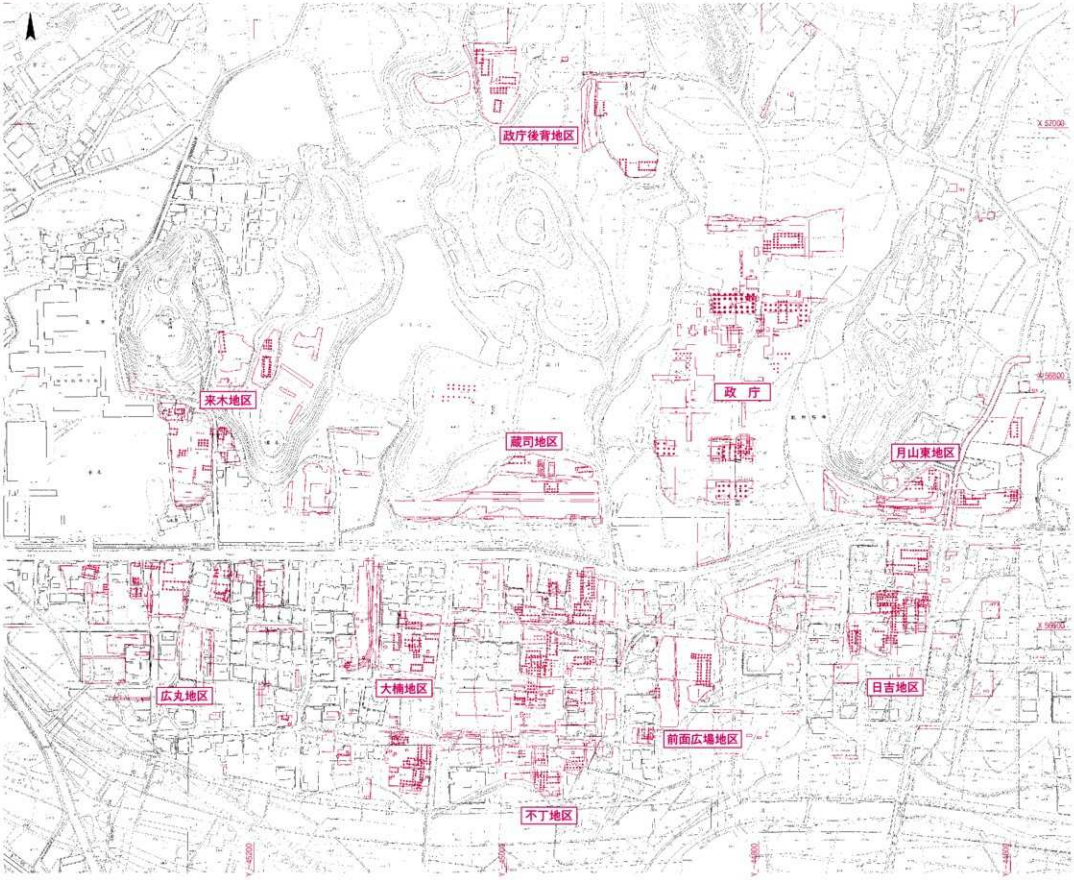


Fig.2　大宰府政庁及び周辺官衙跡検出主要遺構配置図（1/3,000）

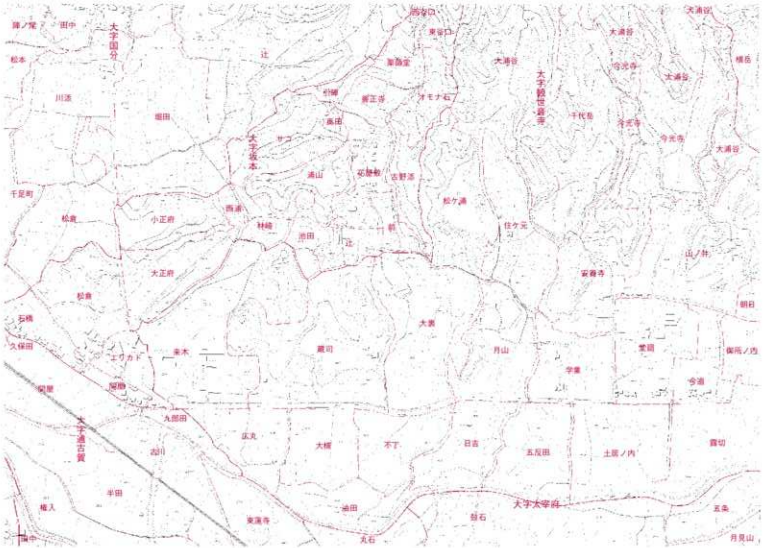


Fig.3　大宰府史跡地域小字図（1/7,500）

第Ⅱ章　調査の概要

調査の概要

（1）調査の概要

大宰府政庁周辺官衙跡・広丸地区は，九州歴史資料館の付した地区略号では西から6AYQ-B・6AYQ-A・6AYM-Dの3地区にまたがる。この地区では，昭和48年の第29次調査を皮切りとしてこれまでに計22次の調査を実施してきた。ここでは各次の調査成果についてその概要を述べる。

29次調査

1）29次調査（Fig.6）

調査期間：1973年6月20日～7月31日

調査面積：150㎡

概　　要：調査地は広丸地区の北東側に位置する。鏡山氏による条坊復原案の右郭5条4坊に比定される。個人住宅の建設に先立ち，広大な対象地区の中に3つの小トレンチを設定して調査を行ったものであり，部分的な調査にとどまっている。

調査の時点では，調査地付近を対象とした土地区画整理事業は開始されておらず，区画整理事業に伴う盛土は認められない。したがって，遺構面は薄い表土・水田床土の直下で検出されている。水田床土直下で検出された暗茶褐色土の上面が上層遺構面である。この暗茶褐色土は

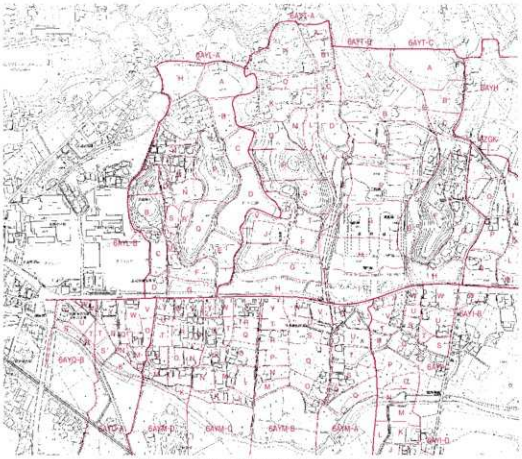


Fig.4　大宰府政庁跡及び周辺官衙跡調査地区割図（1/7,500）

遺物を包含しており，整地層とみられる。調査区の一部をサブトレンチ状に掘り下げて，整地層の下層を確認しているが，砂質土が厚く堆積しており遺構は検出されていない。

上層遺構面で検出した主な遺構は，溝５条，土坑７基で，このほかに不整形の落ち込み状遺構，小ピットなどもみられる。なかでもＡトレンチ拡張区で検出した溝 SD531 は西４坊路の側溝

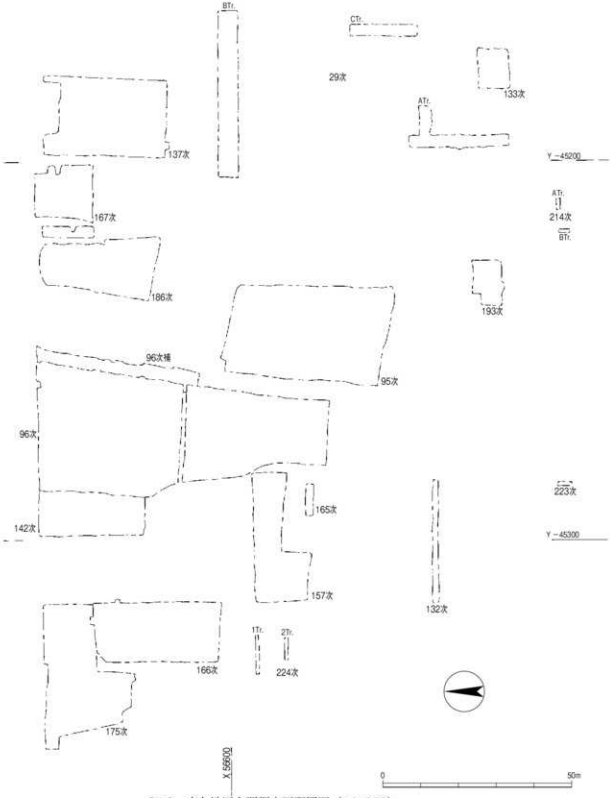
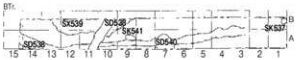


Fig.5　広丸地区主要調査区配置図（1/1,000）

の可能性が，またCトレンチで検出した溝SD540は6条路の側溝の可能性が考えられ，重要な調査となった。



95次調査 2）95次調査（Fig.7）

調査期間：1985年4月1日～5月29日

調査面積：1060㎡

概　要：調査地は広丸地区の中心部にあたる。太宰府市の土地区画整理事業に先立つ事前調査で，鏡山氏による条坊復原案の5条4・5坊と6条4・5坊の交差する地域にあたり，条坊遺構の確認，また隣接する不丁・大楠地区で認められる官衙としての性格が推定される建物群の，大楠地区以西への広がりを探ることを目的として行われた。

遺構面は，南から西側に向かって少しずつ標高を下げながら広がっており，北～東側では黄白色粘質土，南～西側では茶褐色砂質土からなる。その上層には部分的に整地層とみられる灰褐色土が乗っており，さらに水田床土・耕作土となっていた。

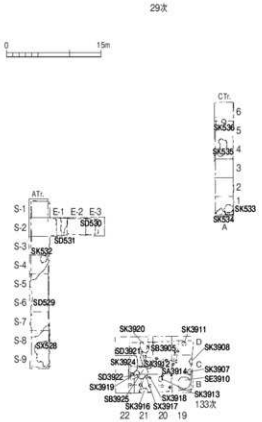


Fig.6　29・133次調査区（1/600）

調査の結果，溝9条，土坑8基，土壙墓18基を検出し，このほか小ピットや自然流路，不整形の落ち込み状遺構なども出土した。条坊遺構の可能性のある溝として東西溝SD2796（6条路側溝か）があげられる。土壙墓はいずれも長方形の平面プランを呈し，その形状から中世の所産である可能性が高い。また，溝SD2760は弥生時代後期に属するもので，蔵司地区と来木地区を画する谷から流出し，本調査区に西接する96次調査区を経由して御笠川へと流入するものとみられる。

96次調査 3）96次調査（Fig.7）

調査期間：1985年6月1日～10月23日

調査面積：2015㎡

概　要：調査地は広丸地区のほぼ中心部にあたり，先述した95次調査地に西接する。付近はかつて筑前国府跡ではないかと想定された地域にあたり，広丸地区の性格を考えるうえで重

要な成果が期待された。

調査は，南半部と北半部に分けて行われたが，本書では一括して報告する。遺構面は茶灰色砂質土からなり，その上層には暗灰色土・灰褐色土からなる遺物包含層が堆積していた。検出した主要な遺構としては，掘立柱建物跡5棟，柵列7条，溝14条，土坑13基などがあり，このほか自然流路や小ピットなどが調査された。掘立柱建物群は北半部に集中しており，大楠地区より広がる官衙的な建物群が付近まで広がることが確認された。北調査区では西5坊路の側溝の可能性のある溝SD2833・2834・2840も検出されている。また弥生時代の土器が出土する自然流路SD2760に伴って井堰関連遺構とみられるSX2815・2816・2844などのやや特殊な遺構も検出された。

4）96次補足調査
(Fig.8)

調査期間：1993年6月25日～7月28日

調査面積：200㎡

概　　要：調査地は，広丸地区のほぼ中心部に位置する。住宅建設に先立って，先述した96次調査の東側に隣接する道路部分にあたる幅5m，南北45mほどの範囲を調査した。調査区は96次調査区に隣接しており，層序等は共通する。

検出した主な遺構としては，ともに96次調査区で確認された掘立柱建物跡1棟・柵列1条，溝2条の延長を確認したほか，あらたに掘立柱建物跡1棟，溝2条，土坑1基などがある。このほか，96次調査区より伸びる弥生時代の自然流路，ピット群などを調査し

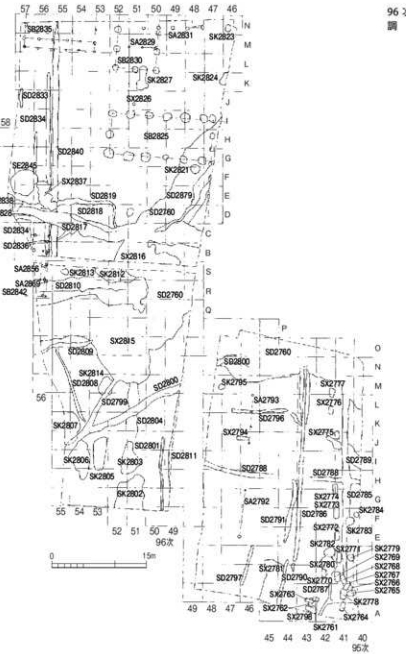


Fig.7　95・96次調査区（1/600）

た。なかでも北調査区で検出した南北溝 SD2833・2834・2840 は，西 5 坊路の側溝の可能性が高い遺構として重要な成果である。なお，自然流路 SD2760・溝 2817 については検出したのみで掘り下げていない。

132 次調査

5）132 次調査

調査期間：1991 年 6 月 19 日～ 6 月 21 日

調査面積：16㎡

概　　要：広丸地区の南西部，148 次調査に南接し南には御笠川が西流する地点である。対象地区の北側に，南北方向に幅約 1m，長さ約 16m のトレンチを掘削したところ，東端で地表か約 40㎝，標高 29.2m の深さで地山を検出した。地山は西に向かって徐々に下がっており，対象地区の中央部付近での標高は東端より約 1m 下がって 28.2m ほどとなる。西半部は御笠川の氾濫原とみられる堆積層が広がっていた。遺構は出土しなかった。

133 次調査

6）133 次調査（Fig.6）

調査期間：1991 年 7 月 11 日～ 8 月 13 日

調査面積：88.3㎡

概　　要：広丸地区の南東部に位置する。29 次調査地点の南に隣接し，大楠地区との境界にあたる里道に西接する。住宅建設に先立って行われた確認調査である。付近は過去に行われた区画整理事業によって盛土されており，マサ土の盛土とその直下の旧表土，水田床土を除去したところ，厚さ 10㎝ほどの黒褐色土からなる遺物包含層が広がっており，その下層の地山より遺構が検出された。遺構の検出レベルは 31.5m 前後で，遺構面は全体的に水平である。

検出した主な遺構としては，掘立柱建物跡 2 棟，柵列 2 条，溝 2 条，井戸 1 基，土坑 7 基がある。このほか，鋳造関連遺構の可能性のある炭化物集中ピット，不整形の落ち込み状遺構，ピット群などを調査している。

137 次調査

7）137 次調査（Fig.9）

調査期間：1991 年 10 月 8 日～ 12 月 16 日

調査面積：600㎡

概　　要：広丸地区の北東部に位置する。第 29 次調査の北に隣接し，大楠地区との境界にあたる里道に西接する。住宅建設に先立つ確認調査である。付近は区画整理事業により厚く盛土が施されており，盛土であるマサ土とその直下の旧表土を除去すると，黄～茶褐（灰）色土からなる遺物包含層が広がっていた。遺構は基本的にこの遺物包含層の下層に広がる地山より検出されたが，調査区の南東隅部（概報では南西隅部とあるが誤記か）では一部暗茶灰色ないし暗灰色の整地層が遺存し，その下層からも遺構が検出された。

検出した主な遺構としては，掘立柱建物跡 4 棟，柵列 2 条，溝 7 条，井戸 1 基，土坑 6 基がある。またこのほか，多くのピット群などを検出した。これらの遺構のうち，掘立柱建物群・井戸など大半は上層遺構面より検出されたが，一部の溝など下層遺構面より検出されたものもある。特に掘立柱建物 SB3950 と切り合う溝 SD3939 は西 4 坊路の東側側溝の可能性があり，

条坊制の施行と建物群との関係が問題となる重要な調査成果となった。また下層遺構面より検出されたSD3941は整地層の上限を示す遺構として重要である。

8）142次調査（Fig.8）

調査期間：1992年6月15日～7月27日

調査面積：488㎡

概　　要：広丸地区の中央部北側に位置する。96次調査区の西，県道筑紫野太宰府線の南に接する。住宅建設に先立って確認調査を行った。調査区の東側の一部は96次調査の北西部と重複している。基本層序は96次調査区と共通している。

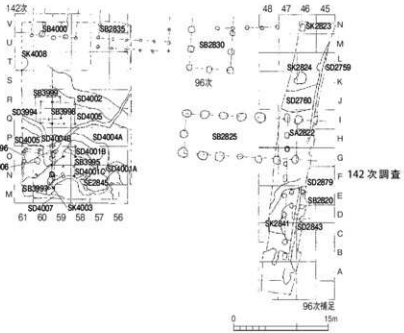


Fig.8　96次補足・142次調査区(1/600)

検出された主な遺構としては，掘立柱建物跡8棟（うち1棟は96次調査でも検出），井戸1基（96次調査と重複），溝8条，土坑3基，採土遺構1基（96次調査で検出）などがあり，ほかに小ピットなどを調査した。

9）148次調査　　148次調査

調査期間：1992年12月22日

調査面積：88㎡

概　　要：広丸地区の南西部に位置する。北に157次調査区が接し，南には道路を挟んで132次調査区が隣接する。住宅建設に先立つ確認調査である。バックホウを用いて敷地全体に「コ」の字状のトレンチを掘削したところ，北東から南西にかけて傾斜する御笠川の氾濫原が全体に広がっていることが確認された。遺構は確認されていない。

Fig.9　137・167・186次調査区(1/600)

9）157次調査

調査期間：1994年

1月13日～4月19日

調査面積：337㎡

概　　要：広丸地区の西側に位置する。南に148・165次調査地が，東に96次調査地が，道路を挟んで北には166次調査地が接する。住宅建設に先立つ確認調査である。

調査区は土地区画整理事業によりマサ土による盛土がなされており，盛土・表土を除去すると厚さ約20cmの黄褐色土からなる遺物包含層が広がっていた。この遺物包含層の下より遺構面が検出された。調査対象の区画の西半部には遺構はほとんど認められず，東西方向の溝SD4123を検出したのみで，遺構の大半は東半部より検出された。

検出された主な遺構は，掘立柱建物跡1棟，柵列4条，溝2条，土坑6基などである。うちSD4118は西5条路の側溝の可能性がある。また特殊な遺構として，6条路の側溝の可能性が考えられる東西溝SD4123にともなって，瓦組の暗渠遺構が出土している。このほか，ピット群などを検出している。

165次調査

10）165次調査

調査期間：1994年10月31日～12月19日

調査面積：37㎡

概　　要：広丸地区の西寄りに位置する。北に157次調査区の東半分が，東に96次調査区の南部が接する。層序・遺構面の状況は隣接各区と共通する。住宅建設に先立つ確認調査として実施し，対象区画の一部を幅約2.5m，長さ約10mの規模でトレンチ状に調査区を設定した。

調査の結果溝2条，土壙2基を検出したほか，自然流路，小ピットを数基調査している。

なお，概報に掲

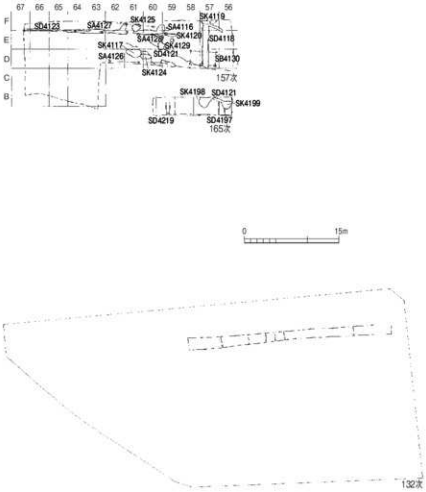


Fig.10　132・157・165次調査区（1/600）

載した遺構配置図は縮尺が 1/100 のものとなっているがこれは間違っており，正しくは 1/80 縮尺である。ここで訂正したい。

11）166 次調査（Fig.11）

166 次調査

調査期間：1994 年 10 月 31 日～ 1995 年 1 月 23 日

調査面積：528㎡

概　　要：広丸地区の西側に位置する。北に 175 次調査区が，南に道路を挟んで 157 次調査区がそれぞれ隣接している。住宅建設に先立つ確認調査である。

北側では表土下約 75㎝で遺構面が検出される。地山に遺構が掘り込まれている。南側に向かって遺構面はなだらかに傾斜しており，その傾斜に比例して遺構面直上に堆積する包含層が厚くなる。

検出された主な遺構としては，掘立柱建物跡 1 棟，柵列 1 条，溝 6 条，土壙 2 基，土壙墓 1 基などがある。うち SD4201 は検出にとどめている。また，平面形状が長楕円形で一長辺に突出部を持つ特徴的な形態の土坑が 2 基検出されており，土壙墓として報告しているが，その性格は確定的ではない。

12）167 次調査（Fig.9）

167 次調査

調査期間：1995 年 1 月 18 日～ 2 月 6 日

調査面積：216㎡

概　　要：広丸地区の北東部に位置する。西に 186 次，東に 137 次調査区があり，両調査区に挟まれている。住宅建設に先立って行われた確認調査である。

基本土層は区画整理時の盛土（マサ土）・旧表土の下層に黄褐色砂質土からなる地山が露出し，整地層は確認されていない。検出された主な遺構には，掘立柱建物跡 1 棟，竪穴住居跡 1 棟，溝 5 条などがある。

13）175 次調査（Fig.11）

175 次調査

調査期間：1996 年 7 月 9 日～ 8 月 31 日

調査面積：580㎡

概　　要：広丸地区の西側に位置する。南に第 166 次調査区が隣接し，北は県道筑紫野太宰府線により画される。調査区の北東には来木丘陵があり，調査区は来木丘陵の南西裾部にあたる。住宅建設に先立って行われた調査である。

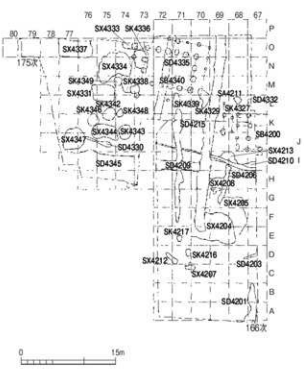


Fig.11　166・175 次調査区（1/600）

基本層序であるが，土地区画整理事業による盛土・旧耕作土・水田床土の下層に上層遺構面が形成されている。上層遺構面は約 50㎝の厚さを持つ整地層の上面にあたり，その下に砂質土からなる地山が存在する。これが下層遺構面となると考えられるが，調査では土層確認のためにごく一部の整地層を掘りぬいたのみであり下層遺構面の状況は不明である。

上層遺構面からは，掘立柱建物跡 1 棟，柵列 1 条，溝 4 条，土坑 11 基などが検出された。このほか，不定形の大型掘り込み遺構が 6 基確認され，採土遺構として報告する。

186 次調査

14）186 次調査（Fig.9）

調査期間：2002 年 2 月 5 日～ 3 月 26 日

調査面積：400㎡

概　　要：広丸地区の中央北側に位置する。東に 167 次調査区が隣接し，北は県道筑紫野太宰府線に接する。土地区画整理事業により生じた保留地の売却に先立って確認調査を行った。

調査地は北にある来木丘陵の延長線上にあたり，東西に浅い谷地形をもつ微高地である。基本層序は上から，区画整理時の盛土，旧耕作土，旧水田床土があり，最下層に真砂土の二次堆積層からなる基盤土が厚く堆積する。これが遺構面となる。遺構面はわずかに南に向かって傾斜する。地山が高い位置にあたるため，整地層は確認できない。

主な遺構としては，掘立柱建物跡 9 棟，柵列 7 条，溝 3 条，土坑 5 基，土壙墓 2 基などがある。中でも掘立柱建物跡 SB4550a・b，SB4551，SB4552 の 4 棟は，8 ～ 9 世紀代にほぼ同じ位置で繰り返し建て替えが行われた建物群であり注目される。

193 次調査

15）193 次調査（Fig.12）

調査期間：2005 年 7 月 25 日～ 8 月 9 日

調査面積：67㎡

概　　要：広丸地区の中央南側に位置する。北に 95 次調査区が，東に 29 次調査区があるがともにやや離れている。住宅建設に先立つ確認調査である。

調査地は広丸地区の中では南側に位置し，御笠川に最も近い調査区の一つである。基本層序としては，上層より，区画整理時の盛土，旧耕作土，旧水田床土などがやや撹乱を受けた状態で堆積し，その下に上層遺構面が検出されている。上層遺構面は数層からなる整地層の上に形成されており，整地層の厚さは約 50㎝をはかる。整地層の下には砂質土からなる地山があり，これが下層遺構面とみられる。

検出された主な遺構としては，2 基の土坑と，地山上面の不整形な落ち込みを整地層で埋め立てた整地遺構がある。なお，調査区の西半分は御笠川の氾濫により大きく損なわれており遺構はほとんど残っていない。

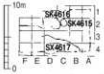


Fig.12　193 次調査区（1/600）

202 次調査

16）202 次調査（Fig.13）

調査期間：2008 年 11 月 27 日

調査面積：25㎡

概　　要：202-2 次調査の項を参照すること。

17）202-2 次調査（Fig.13）　　**202-2 次調査**

調査期間：2009 年 6 月 15 ～ 16 日・2010 年 1 月 7 日

調査面積：102㎡

概　　要：広丸地区の西端部に位置する。県道筑紫野太宰府線の西側起点となる関屋交差点の東にあたり，太宰府消防署の庁舎の建て替えに先立って確認調査を行ったものである。

旧庁舎が残っている状態でトレンチを設定して行ったのが平成 20 年度の第 202 次調査であるが，この時は現場条件が悪く，開発が及ぶ深さまで掘削することができなかった。これをうけて，平成 21 年度に入り再度対象地の南側にトレンチを設定して調査を行ったところ，旧表土の直下に御笠川の洪水堆積砂層が確認され，遺構が遺存しないことが分かった。しかし，これはあくまで調査地の南側における知見であることから，旧庁舎の解体後に北側に再度トレンチを設定して追加調査を行い，対象地の全面に御笠川の氾濫原が広がっていて遺構が遺存しないことを確認した。これを，202-2 次調査としている。

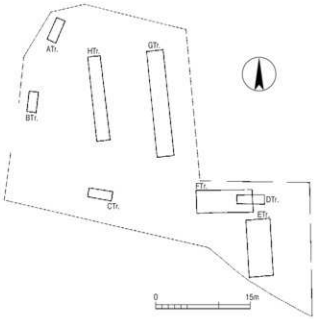


Fig.13　202･202-2 次調査区（1/600）

18）211 次調査（Fig.14）　　**211 次調査**

調査期間：2011 年 4 月 1 日

調査面積：7㎡

概　　要：広丸地区の中央南側に位置する。北にやや離れて 193 次調査地が位置する。住宅建設に先立つ確認調査である。

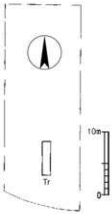


Fig.14　211 次調査区（1/600）

基本層序は，上層より，土地区画整理時の盛土，旧表土，旧耕作土があり，その下に砂と粘土の互層からなる河川堆積層が厚く堆積する。無遺物層であり古代以前の御笠川の氾濫堆積層と考えられる。遺構は検出できなかった。

出土遺物には古代の須恵器・土師器・瓦などがあるが，いずれも旧表土中からの出土で 2 次堆積によるものとみられる。

214 次調査 19）214 次調査（Fig.15）

調査期間：2011 年 1 月 24 日

調査面積：6㎡

概　　要：広丸地区の中央南側に位置する。北に 193 次調査地が，南に 211 次調査地がやや離れて位置する。住宅建設に先立つ確認調査である。

基本層序は，上層より表土・土地区画整理時の盛土，旧耕作土，灰褐色粘質土，淡茶褐色砂質土と続き，灰褐色粘質土からなる地山へと至る。このうち，地山直上に堆積した淡茶褐色砂質土は御笠川による氾濫堆積層とみられる。本地点では堆積厚さが約 10㎝ほどと薄く，氾濫による削平はそれほど大きくはないとみられる。ただし，トレンチ内に遺構は検出できなかった。

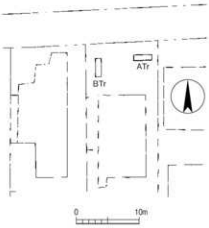


Fig.15　214 次調査区（1/600）

223 次調査 20）223 次調査（Fig.16）

調査期間：2013 年 12 月 26 日

調査面積：4.07㎡

概　　要：広丸地区の南西部に位置する。北に 132 次調査地がある。住宅建設に先立つ確認調査である。

基本層序は，上層より現耕作土，土地区画整理時の盛土，旧表土があり，その厚さは約 2.7m をはかる。旧表土の直下には灰色砂層が堆積していたが，これは御笠川の氾濫堆積層であろう。本地点では御笠川によりかつて付近に存在したであろう遺物・遺構ともに失われたものとみられる。

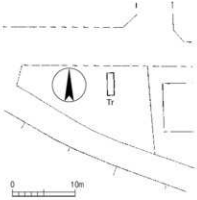


Fig.16　223 次調査区（1/600）

224 次調査 21）224 次調査（Fig.17）

調査期間：2014 年 6 月 26 日

調査面積：14.3㎡

概　　要：広丸地区の西側に位置する。北に 166 次調査地が，東に 157 次調査地が隣接する。住宅建設に先立つ確認調査である。調査対象地に 2 本の確認トレンチを設定した。

基本層序は上層より，現表土，区画整理時の盛土，旧表土があり，その下層が遺構面である。北側のトレンチでは砂質土からなる遺構面上に溝状の遺構が検出された。埋土から瓦・土器片が出土しており，8 世紀以降の遺構とみられる。南側のトレンチでは遺構面は検出されず，旧表土直下より厚い砂層が堆積しており，御笠川氾濫原の範囲に含まれるものとみられる。

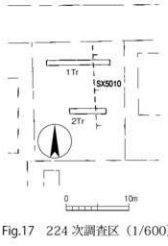


Fig.17　224 次調査区（1/600）

（2）基本層序

広丸地区官衙は，政庁前面域の最西部に位置する。前面官衙域の地質条件については過去の報告書にも再三述べられてきた。その要旨を端的にいえば，前面官衙域は北の四王寺山と南の御笠川にはさまれ，両者の影響を受けて北側から南側に向かって基盤土が変化するということにある。北側は四王寺山より派生する丘陵裾部にあたり，しばしば基盤層である花崗岩の風化した黄褐色粘質土からなる地山が遺構面に露出する。一方，南側では四王寺山や山麓の丘陵などを開析して生じた花崗岩由来の白色系砂質土が，御笠川などによって運ばれて厚く堆積して基盤層を形作る。さらに，四王寺山から派生した丘陵の裾部にあたるか，四王寺山から流出した谷部の延長にあたるかによっても基盤層は変化し，前者では浅い部分に花崗岩風化マサ土である黄褐色系粘質土が露出する一方，後者では北側でも白色系砂質土が堆積する地点もある。

この基盤層の上位に，しばしば整地層が形成される。整地層は一般に，北側ほど薄くなっていてしばしば完全に削平され失われる一方，南側では厚く残される地点もみられる。本来ならばこの整地層については各調査区を横断する形でその形成時期や厚さ・レベル等について整理し，示すことが必要であろう。しかし，整地層の遺存状況は特に北側ほど悪く調査区によっては全く残されていない箇所もあり，また調査年次が長期間にわたっていて調査担当者も多いため土質の記録や表現方法が多様で，異なる調査区間の層序の比較を行うことも困難を伴う。

ここでは，広丸地区の遺構群と整地層など鍵層との関係を理解するうえで基準となりうる，いくつかの調査区の基本土層を取り上げて説明を試みる。

29 次調査区（Fig.19-1）

Cトレンチの東壁で南北方向の土層観察を行った。最下層を旧水田床土とする表土の直下に，暗茶灰色の遺物包含層が堆積している。この遺物包含層は，北端部では削平により失われており，中央やや南側では厚く堆積していて最大30cmほどの厚さを持つが，南端部では再び見られなくなる。上層より遺構の掘り込みが認められることから，これが整地層とみられる。整地層の下層には，部分的に粘質土層を挟んで厚く粗砂層が堆積しているが，この粗砂層はトレンチの中央部で深く，南北端ではやや浅くなっており，谷状に堆積している。29 次調査地点は大楠地区との境界部付近に位置するが，大楠地区と広丸地区の境界部は，前面官衙域北側の蔵司地区丘陵と来木地区丘陵に挟まれた谷地形が南に向かって伸びる箇所にあたる。下層の粗砂層はこの谷地形を埋積して形成されたこの地区付近に特有の基盤層とみられる。

96 次調査区（Fig.19-2）

南区西壁の北寄りで南北方向の部分土層の観察を行った。SD2760 の土層と併せて示す。最下層を旧水田床土とする厚さ約 50cmの表土下層に，上から暗灰色土，灰褐色土，暗灰色土（部分的）の 3 つの遺物包含層があり，その下層が花崗岩バイラン土の地山となって，これが遺構面となる。遺構面上層の 3 つの遺物包含層は，土層図のほぼ中央に位置する弥生～古墳時代の自然流路である SD2760 上面に形成された緩やかな落ち込み付近で厚く堆積する一方，その南北では徐々に薄くなり，特に北側では完全に失われる。このことから，これらが整地層である可能性もある。しかし，調査の時点ではこの上面での遺構検出はできておらず，その点から見ればこれらは整地層ではなく，単なる遺物包含層で後世の攪乱堆積層である可能性が高い。

137 次調査区（Fig.19-3）

調査区南壁で東西方向の土層観察を行った。最上層から 4 層の黄茶灰土までが表土層である。

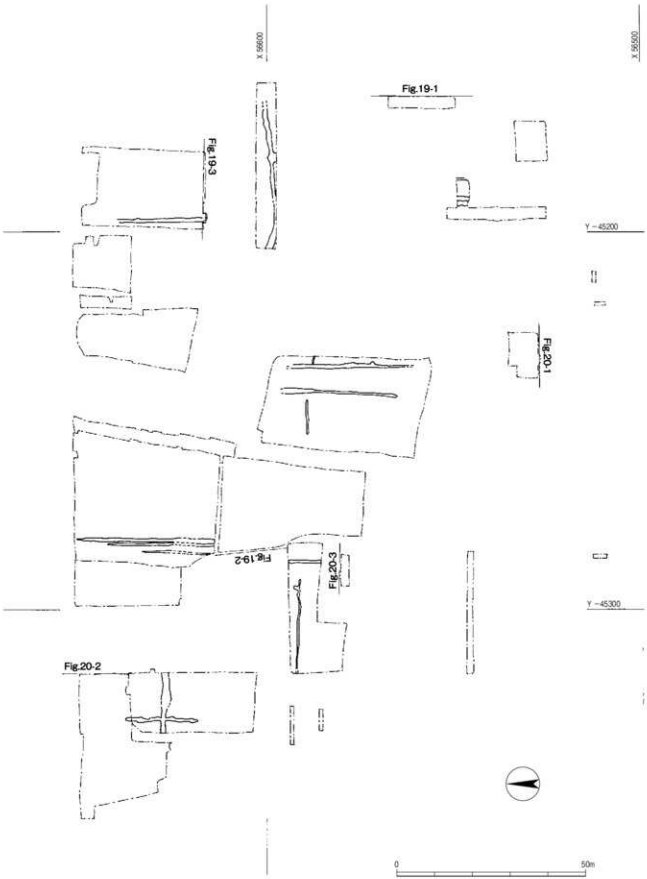


Fig.18　広丸地区基本土層図作成箇所（1/1,000）

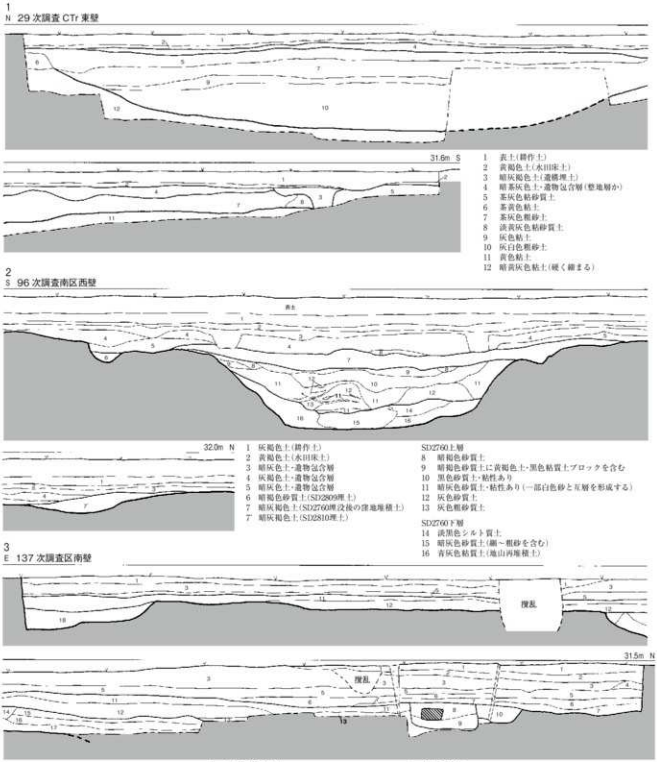


Fig.19 広丸地区基本土層図①（1/60）

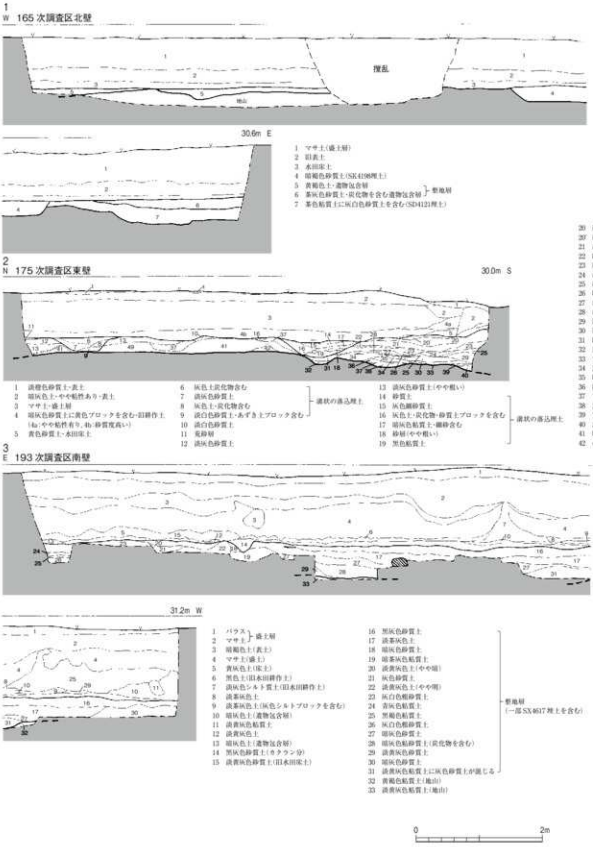


Fig.20　広丸地区基本土層図②（1/60）

その下層に，黄褐色土・茶灰色土の２つの遺物包含層が堆積しており，その下面が上層遺構検出面となる。上層遺構検出面からは掘立柱建物群や溝など多くの遺構を検出している。上層遺構検出面は，調査区北～西側では花崗岩パイラン土からなる地山が露出する一方，南～東側では暗茶灰色土・暗灰色粘質土からなる整地層が広がっており，その厚さは厚い部分で約 40cm をはかる。遺構面自身も南に向かって緩やかに下っている。整地層の下層には溝 SD3941 がある。整地層の上限を決める溝状遺構として重要である。また，調査区の南東側では基盤層である花崗岩パイラン土は深く地中に潜っており，付近の基盤層はその上に堆積した砂質土・シルト層から構成される。本地点が広丸地区の東端部に位置し，東に大楠地区との境を形成する谷地形（29 次調査区の項にて既述）を控えることによるものであろう。

165 次調査区

調査区北壁で東西方向の土層観察を行った。地表面から 80cmほど下げた位置に旧水田床土があり，その下面が遺構検出面となる。遺構検出面はその大部分が黄白色粘質土と灰色砂層（いずれも再堆積層）からなる地山から形成されるが，一部に遺物を包含する黄褐色土が広がっており，整地層とみられる。この整地層は最大厚さ 20cm程度で西側に偏って広がる。調査区の西側には，やや離れるが御笠川が北に向かって蛇行しており，旧地形が西に向かって少しずつ下がるのを整地層でかさ上げしているものとみたい。

175 次調査区

調査区東壁で南北方向の土層観察を行った。地表面から約 80cm下げた高さに旧水田床土が断続的に残されており，その下面が上層遺構面となる。上層遺構面の基盤は灰色砂質土を主体とする遺物包含層より形成されており，これが整地層となる。整地層の一部をトレンチ状に下げて確認したところ，その厚さは約 40cm，下面より地山を確認した。地山には一部溝状を呈する不定形の掘り込み SD4332 が確認され，整地層はこれらの下層掘り込みを埋め平坦面を造成したものであろう。

193 次調査区

調査区の南壁で東西方向の土層観察を行った。地表面から 110 ～ 120cm下げた高さに旧水田床土が広がっており，その下面が遺構検出面となる。遺構検出面の基盤層は灰色砂質土を主体とする遺物包含層より形成されており，約 50cmの厚さをはかる。これが整地層となる。整地層をトレンチ状に一部掘り下げたところ，その下層より淡黄灰色粘質土（花崗岩パイラン土か）からなる地山を確認した。地山を検出した範囲はごく狭く，下層遺構の有無は不明。

以上，土層の堆積状況を確認してきた。既述のとおり，調査区ごとに地山の状況はやや異なり，広丸地区の中央北寄りでは黄褐色粘質土からなる花崗岩パイラン土が露出するが，東側では谷地形に堆積した灰色砂質土を主体とする無遺物層が，また南側では御笠川の氾濫原を形成する灰色粗砂層が基盤層を形成する。基盤層の上層には，南寄りでは灰色砂質土を主体とする遺物包含層が認められ，整地層と考えられる。一方北寄りの調査区では，削平を受けて整地層が失われたものか，基盤層が遺構面を形成している調査区も多く，すべての調査区に共通する複数の遺構面の設定は困難な状況である。なお，整地層の下層に掘り込まれた遺構としては 137 次調査区出土の溝 SD3941 や 175 次調査区出土の SX4332・SD4345 などがあり，特に SD3941 からは 7 世紀末前後の土器の小片がごくわずかではあるが出土していて整地層の時期の上限を示す手がかりとなろう。

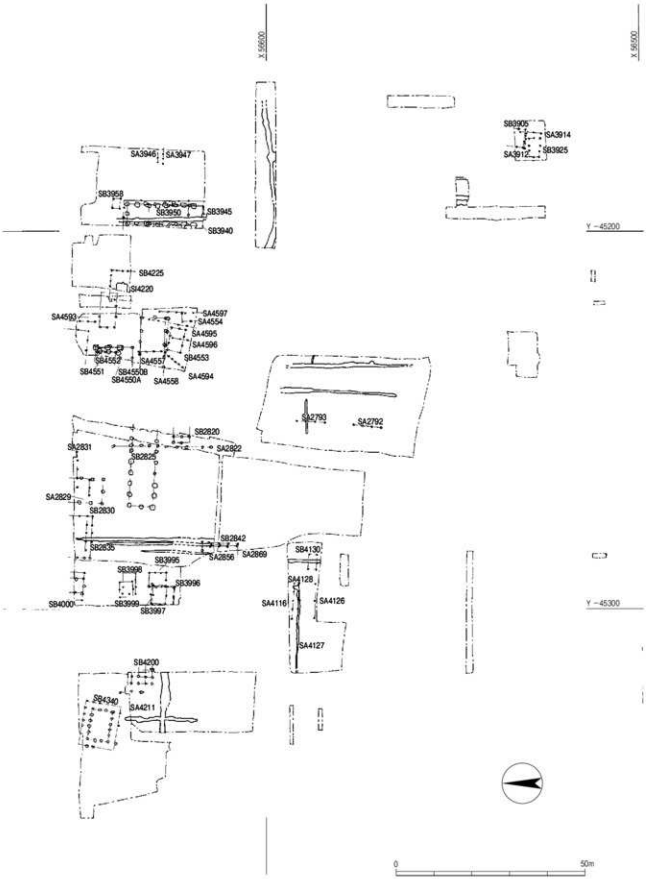


Fig.21　広丸地区建物・柵・竪穴住居配置図（1/1,000）

第Ⅲ章　検出遺構

（1）はじめに

広丸地区の範囲

広丸地区官衙は政庁前面官衙域の最も西側にあり，東接する大楠地区官衙との境界は従来，区画整理前の字名に従って，政庁中軸線から西に約 330m の地点に存在した里道に位置付けてきた。発掘調査によって，約 90m の条坊区画が明らかになってくると，従来大楠地区と広丸地区の境界に設定してきた場所が 90m 単位の区画と整合しないことが明らかになってきた。

大楠地区の報告においては，溝 SD2680 が大楠・広丸両地区の境界となる可能性を示している。確かに，地区名称と遺構に残る条坊区画とが一致すれば一般に理解しやすい。しかし，本来地区名称は調査に着手する際に便宜上必要となって付与したものであり，その性格上必ずしも実際の遺構と整合的にならなければならないというものでもないはずである。また，すでに大楠地区の報告で，両地区の境界の可能性を示唆された境界溝 SD2680 よりも西側（広丸地区側）の遺構についても報告していることを合わせて考えれば，今になって地区の境界を出土遺構に合わせて変更するわけにもいかない。

このような状況を併せ考え，本書では広丸地区の範囲について従来どおり政庁中軸線から西に約 330m の位置にかつてあった里道より西側として取り扱い，報告を行うこととする。必ずしも実際の遺構から推測されるかつての条坊区画との整合性はないが御了承いただきたい。

（2）掘立柱建物

堀立柱建物

（Fig.21）

広丸地区では，96・96 補・133・137・142・157・166・167・175・186 次調査において大小 30 棟の掘立柱建物を確認しているが，地区の南半部及び西側は御笠川の氾濫原となっており，不丁・大楠地区に比して建物の数は半数と少ない。

SB2820（Fig.22）

96 次調査北区の南東部

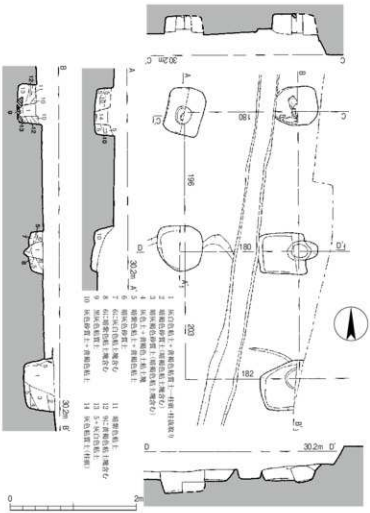


Fig.22　掘立柱建物 SB2820 実測図（1/60）

96 次調査出土建物

に位置し，溝 SD2843 及び土坑 SK2841 に切られる。現状で南北 2 間，東西 1 間以上の総柱建物であるが，東側は調査区外に伸びることから桁行 2 間（3.99m），梁行 2 間（3.6m）の南北棟になろう。柱掘方は隅丸方形を呈し，長軸 0.75m で，深さは残りの良いもので 0.5m を測る。

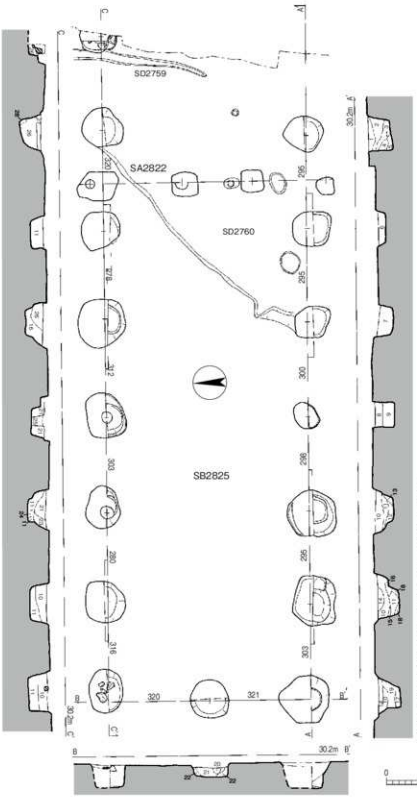


Fig.23　掘立柱建物 SB2825 実測図（1/120）

柱痕は径 0.3m 程で，底面には角礫の礎盤を設置しているものがある。桁行方位は北を示す。なお，概報で SB2820 としているのは，SA2822 の誤り。

SB2825（Fig.23，PL.12・14・18・20・21）

96 次調査北区中央に位置し，流路 SD2760 を切り，柵 SA2822 と重複する。96 次北区では桁行を 6 間分まで確認していたが，補足調査で新たに 1 間分を検出したことにより，梁行 2 間（6.41m），桁行 7 間以上（21.06m）の東西棟建物となり，広丸地区においては大規模な建物の一つとなる。柱掘方は不整方形を呈し，長軸 0.9 ～ 1.6m，深さ 0.7m 前後を測るが，梁行中央の掘方は 0.4m と浅い。掘方には柱痕を留めているものがあり，径 0.2 ～ 0.3m 程であった。柱間は梁側が 3.2m，桁側が 2.78 ～ 3.2m とばらつきがみられるが，平均すると 3.0m であることから 10 尺を基本としたとみられる。梁行方位は北から東に 3°振っている。掘方中からは須恵器蓋・坏，土師器甕，鞴羽口等が出土した。なお，北側柱列の西側から 2 本目の柱穴の北に約 80cmの位置で，土器片を埋納したとみられるピット状遺構 SX2826 が出土している。SB2825 に関わる地鎮遺構の可能性もある。

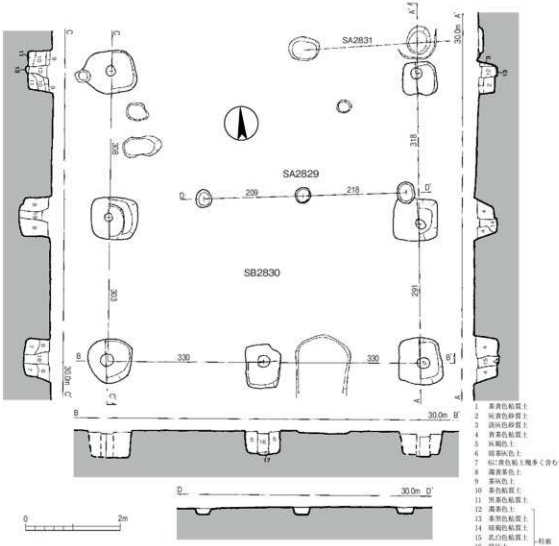


Fig.24　掘立柱建物 SB2830，柵 SA2829 実測図（1/80）

SB2830（Fig.24，PL.12・13・15・18）

96 次調査北区の北端中央部で検出した。柵 SA2829 に切られ，SA2831 と重複する。SB2825 の北側 6.3m に位置し，SB2825 の西側梁行と当建物の西側桁行とは柱筋を揃える。梁行 2 間（6.6m），桁行 2 間以上の南北棟建物で，北半部は調査区外に伸びる。柱掘方は隅丸方形を呈し，長軸 0.75 ～ 1.06m，深さ 0.6m 前後を測る。柱痕は径 25cm程で，掘方の大きさに比して貧弱な印象を受ける。なお，南東隅の掘方には柱根が辛うじて遺存していた。柱間は

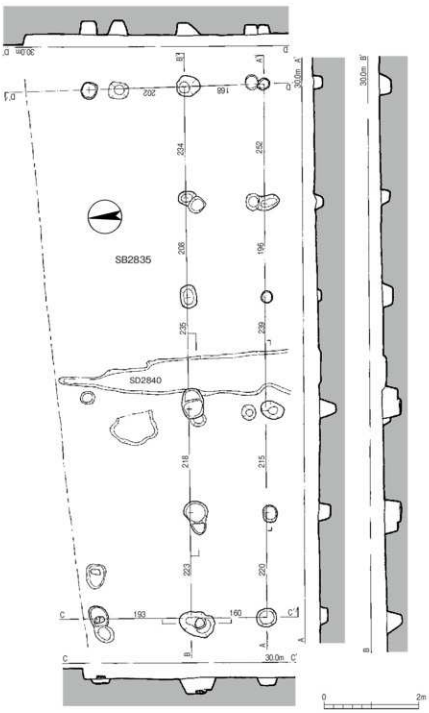


Fig.25　掘立柱建物 SB2835 実測図（1/80）

梁側が3.3m（11尺）等間，桁側が2.91～3.18mとばらつきがみられるものの，10尺を基本とする。東桁行方位は北から東に3°振っている。掘方内からは土師器坏・甕片が出土した。

SB2835（Fig.25，PL.13）

96次調査北区の北西隅部で，SB2830の3m西側に位置し，礫敷溝SD2840と重複する。梁行1間以上，桁行5間（11.18m）の身舎の南側に廂を設けた東西棟建物であるが，片廂になるのか，両面廂になるのかは，北側が調査区外にあるため判然としない。身舎の柱掘方は円形を呈し，径0.5m前後，深さ0.4m前後を測るが，廂の掘方は径0.4m前後，深さ0.2m前後と身舎に比してやや小振りである。身舎の柱間は梁側が1.93～2.02m，桁側が2.08～2.34mで，廂の出は1.68mを測る。また，身舎の南西隅柱には角礫を置き，礎盤としている。東側の梁行方位は北から東に3°振っている。掘方からは土師器坏・椀，須恵器甕片が出土した。

SB2842（Fig.26）

96次調査の北半と南半に跨がって位置する東西棟の建物で，南北溝SD2833・2834及び柵SA2856・2869と重複する。大半が調査区外にあるため桁行は1間以上としか判らないが，梁行3間の身舎の北側に廂を設けた片廂建物とした。柱掘方は径0.5m，深さ0.3mを測る。柱間は梁側が2.33～2.56m，桁側が2.33mを測る。梁行方位は北から東に2°30′振っている。

SB3905（Fig.27）

133次調査区の北側中央に位置し，土坑SK3920に切り込む。北半部が調査区外に伸びることから全体の規模は把握できていないが，後述するSB3925に柱掘方規模及び柱間が近似することから梁行2間×桁行3間規模の建物になる可能性を有する。現状で東西3間（4.9m），南北1間（1.71m）以上の建物である。柱掘方は径0.4m前後の円形を呈し，深さ0.2～0.4m前後で，南側の柱間は

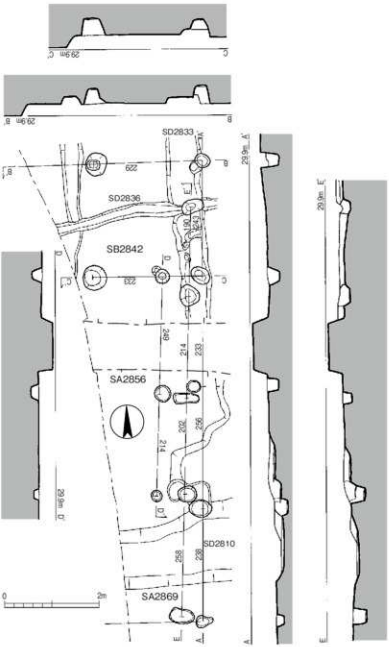


Fig.26　掘立柱建物SB2842，柵SA2856・2869実測図（1/80）

1.53 ～ 1.76m を測る。南側の柱列方位は東から南に 7°振る。

133 次調査出土建物

SB3925（Fig.27）

133 次調査区の南西隅部に位置し，梁行 2 間（2.98m），桁行 3 間（5.03m）の小型建物として復原した。SD3921・3922 を切り，SK3913・3924，SX3917・3918・3919 と重複する。

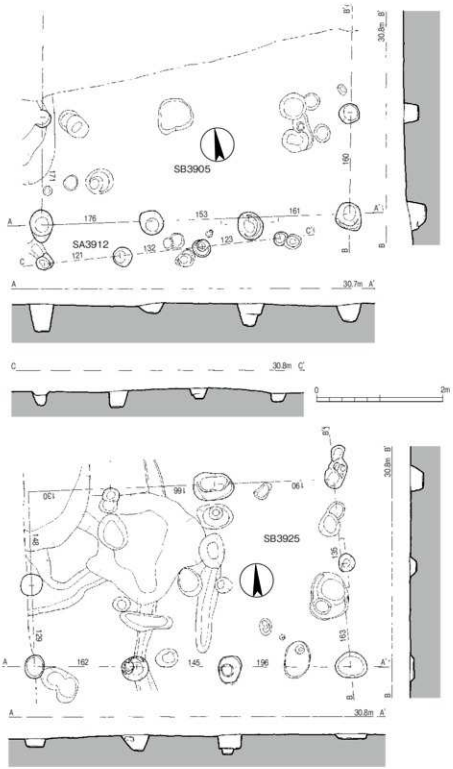


Fig.27　掘立柱建物 SB3905・3925，柵 SA3912 実測図（1/60）

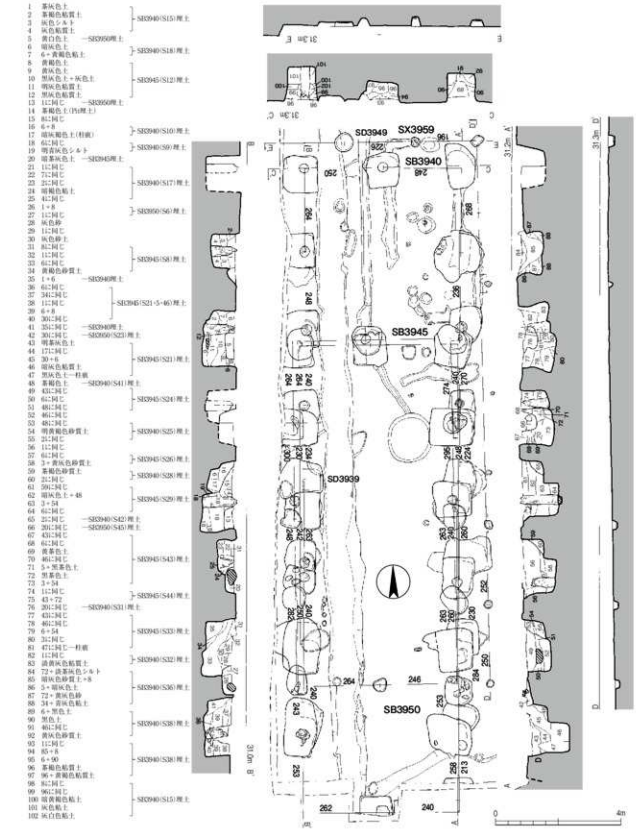


Fig.28　掘立柱建物 SB3940・3945・3950，足場 SX3959 実測図（1/120）

柱掘方は径 0.26 ～ 0.64m の円形ないしは楕円形を呈し，深さ 0.07 ～ 0.3m を測る。柱間は梁側 1.29m・1.63m，桁側 1.45 ～ 1.96m とばらつきがみられる。また，南側桁行柱列の西側隅柱から 2 番目の掘方内には瓦・土師器・炭化物・骨片が入れられていた。南側桁行方位は東から南に 4°振っている。

137 次調査出土建物

SB3940（Fig.28，PL.23・25 ～ 27）

137 次調査区の西端部に位置し，当建物と SB3945・3950 の 3 棟の建物が同一場所で建て替えられている。建物の前 SB3940 → SB3945 → SB3950 の順となる。また，SD3941 を切り，南北溝 SD3939・3949 と重複する。梁行 2 間（4.98m），桁行 8 間以上（20.03m）の長大な南北棟建物で，桁行は 9 間になるとみられる。柱掘方は隅丸方形を呈し，長軸 1.2m，深さ 1.1m 程であるが，北側梁行中央の掘方は隅柱掘方に比して 0.5m 程浅く掘られている。東桁側で 2 本，西桁側で 5 本の合計 7 本の柱根が遺存していたが，遺存していないものに関しては SB3945 築造時に抜き取ったためとみられる。柱材は径 35㎝程の大きさで，樹種同定の結果イスノキを用いていることが判明した。また，総ての柱根下部には一辺 10㎝前後の筏穴を空けている。柱間は梁側が 2.48m・2.5m で，桁側が 2.34 ～ 2.68m とばらつきがみられるが，2.4m（8 尺）を基本としよう。桁行方位は北から東に 1° 30′振っている。柱掘方内からは須恵器蓋・坏・甕，土師器坏・甕・甑の他に鞴羽口，鉄滓等が出土した。

SX3959（Fig.28）

SB3940 を囲んで配される柱穴列で，北側で 3 個，東側で 4 個の計 7 個確認した。柱穴は径 25㎝程，深さ 15㎝前後で，SB3940 柱筋から 1m 程離れ，柱掘方同士の間に 2.5m 間隔で配置されていることから建物築造に伴う足場穴と考えられる。

SB3945（Fig.28，PL.23・25 ～ 27）

137 次調査区の西端部に位置する。SB3940・SD3941 を切り，SB3950 に切られ，南北溝 SD3939・3949 と重複している。梁行 2 間（5.04m），桁行 6 間（14.82m）の大規模な南北棟建物である。柱掘方は基本的に隅丸方形を呈し，長軸 1.0m，大きいもので長軸 1.5m，深さ 1.1m 程であるが，SB3940 の柱を抜き取っているため隅丸長方形を呈するものも多い。また，SB3940 同様，北側梁行中央の掘方は隅柱掘方に比して 0.6m 程浅く掘られている。当建物も比較的柱根が遺存しており，東桁側で 2 本，西桁側で 2 本の合計 4 本が遺存していた。柱材は径 35㎝程の大きさで，総ての柱根下部には一辺 10㎝前後の筏穴を設けている。柱間は梁側が 2.24 ～ 2.8m，桁側が 2.13 ～ 2.84m とばらつきがみられる。なお，東側桁行の南東隅柱から北側に 2 個目・4 個目の柱掘方内，南梁行中央掘方，北西隅柱掘方，西側桁行の南西隅柱から北側 3 個目の柱掘方内には角礫ないしは円礫を据えており，礎盤としている。桁行方位は北から東に 1°振っている。柱掘方内からは SB3945 同様，須恵器蓋・坏・甕，土師器坏・甕・甑の他に鞴羽口，鉄滓等が出土している。

SB3950（Fig.28，PL.23・25 ～ 27）

137 次調査区の西端部に位置し，SB3940・3945 を切り，南北溝 SD3939・3949 と重複する。梁行 2 間（5.04m），桁行 4 間（10.94m）の南北棟建物である。柱掘方は長軸 1m 程の隅丸方形を呈するが，梁行中央の柱掘方はやや小さい。また，深さは SB3940・3945 に比して半分程の 0.5m 前後である。柱痕跡が不明瞭なため正確な柱間は判らないが，梁側が 2.33 ～ 2.71m，

桁側が2.48～3.0mとばらついている。柱掘方内には角礫ないしは円礫を据え礎盤としている。桁行方位は北から西に30′振っている。当建物も柱掘方内からは須恵器蓋・坏・甕，土師器坏・甕の他に鉄滓が出土している。

SB3958（Fig.29）

137次調査区の北西側に位置し，東西小溝SD3957と重複する。梁行・桁行とも1間の建物で，東西方向に若干長い。柱穴は0.3～0.5mの円形を呈し，柱間は梁行1.99m，桁行2.6mを測る。1間規模であることから竪穴住居が削平された可能性もある。梁行方位は北から東に4°振る。

SB3995（Fig.30，PL.28・29）

142次調査区の南西部に位置し，SD4004Aを切り，SB3996・3997，SK4003と重複する。概報では梁行2間，桁行4間の建物としていたが，南側梁行中央の柱掘方が検出できていないことから，今回は梁行2間（3.57m），桁行3間（4.58m）の南北棟小型建物として報告する。

142次調査
出土建物

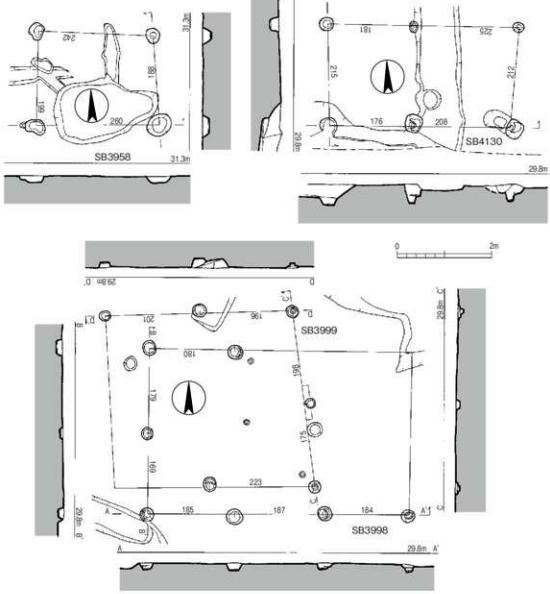


Fig.29　掘立柱建物SB3958・3998・3999・4130実測図（1/80）

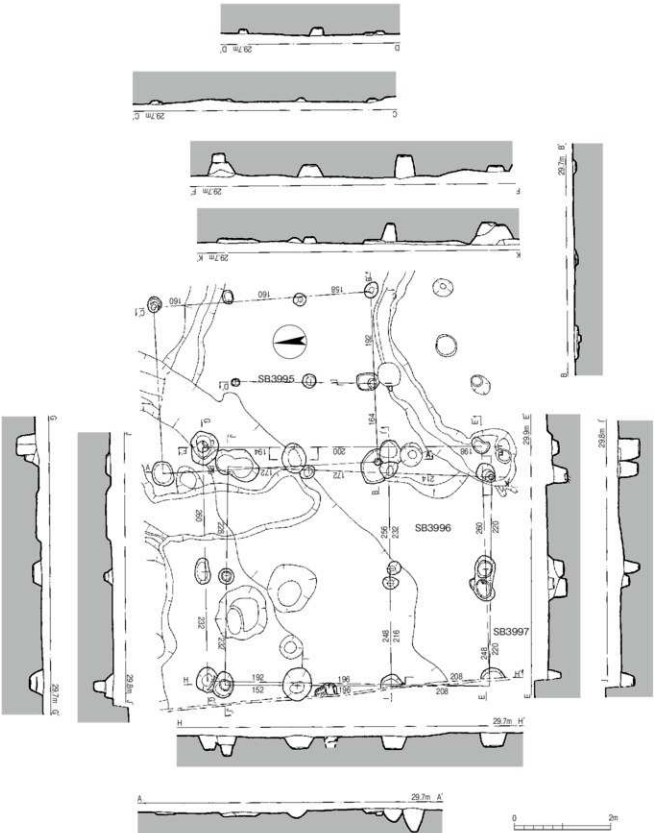


Fig.30　掘立柱建物 SB3995 ～ 3997 実測図（1/80）

掘方は円形を呈し，径 0.35 ～ 0.7m，深さは 10㎝前後と削平が著しい。梁行中央列にも柱穴が存在するが，間仕切りの用途になるか。柱間は梁行 1.64 ～ 1.93m，桁行 1.48 ～ 1.59m とばらつきがみられる。桁行方位は北から東に 1°振っている。柱穴からは須恵器と土師器の甕片が出土している。

SB3996（Fig.30，PL.28 ～ 30）

142 次調査区の南西隅部に位置し，SD4001A・4004A を切り，SB3995・3997，SK4003 と重複する。東西 2 間（5.02m），南北 2 間（4.18m）の身舎の南側に廂を付けた小型の片廂建物である。柱掘方は円形を呈し，径 0.5 ～ 0.7m を測る。身舎の柱間は梁行 1.94 ～ 2.2m，桁行 2.18 ～ 2.39m で，廂の出は 1.96m を測る。桁行方位は北から東に 4° 30′振っている。掘方からは土師器坏・皿・椀，須恵器甕片等が出土した。

SB3997（Fig.30，PL.28 ～ 30）

142 次調査区の南西隅部に位置し，SD4001A・4004A を切り，SB3995・3996，SK4003 と重複する。SB3996 同様，東西 2 間（4.58m），南北 2 間（5.53m）の身舎の南側に廂を付けた小型の片廂建物であることから，同建物の建て替えとみられる。柱掘方は円形ないしは楕円形を呈し，径 0.35 ～ 0.55m を測る。身舎の柱間は梁行 2.28m，桁行 1.7m で，廂の出は 2.12m を測る。掘方内には 10㎝程の柱根が遺存していた。桁行方位は北から東に 7°振っている。掘方からは，土師器坏・皿・椀，黒色土器鉢等が出土している。

SB3998（Fig.29，PL.30）

142 次調査区の中央やや西側に位置し，SB3999，SD3994・4002 と重複する。梁行 2 間（3.48m），桁行 3 間（5.56m）の東西棟小型建物である。柱掘方は径 0.25 ～ 0.33m の円形を呈し，深さは 0.15m 程であった。柱間は梁行が 1.69 ～ 1.79m，桁行が 1.8 ～ 1.87m を測る。梁行方位は北から東に 30′振れる。柱穴からの出土遺物はなかった。

SB3999（Fig.29，PL.30）

142 次調査区の中央やや西側に位置し，SB3998 と重複する。梁行 2 間（3.73m），桁行 2 間（4.2m）の東西にやや長い小型建物として復原した。柱掘方は径 0.25m の円形を呈し，深さは 0.1m 程であった。柱間は梁行が 1.75 ～ 1.98m，桁行が 1.96 ～ 2.23m を測り，掘方を結んだ線は菱形状を呈し，歪な形状をなす。梁行方位は東から北に 1°振れる。柱穴からの出土遺物はなかった。

SB4000（Fig.31，PL.30・31）

142 次調査区の北西隅部に位置し，大半が調査区外に伸びる。概報では梁行 2 間の側柱建物としたが，今回は両隅柱の左右に 1.5m 程の間隔で柱穴が存在していることから，廂の柱穴とみなし両面廂建物として復原した。建物規模は，身舎の梁行 2 間（3.91m），桁行 1 間以上の南北棟になる。柱掘方は身舎が 0.7 ～ 1.1m の隅丸方形ないしは円形を呈し，深さは 0.2 ～ 0.42m を測る。廂は径 0.5m の円形を呈する。柱痕は身舎の梁行中央掘方を除いて確認でき，径 20㎝程であった。柱間は梁行が 1.93 ～ 1.98m，桁行が 1.82 ～ 2.4m を測る。梁行方位は北から東に 4°振っている。柱掘方からは須恵器坏，土師器坏・椀の他に焼塩壺が出土した。

SB4130（Fig.29）

157 次調査区の南東隅に位置し，溝 SD4118・4121 と重複する。梁行 1 間（2.15m），桁

行２間（4.06m）の東西棟小型建物である。柱掘方は径 0.23 ～ 0.35m の円形を呈し，深さは南桁側が 0.4m と深いが，北桁側は 0.2m と浅い。柱間は梁行が 2.12m・2.15m，桁行が 1.76 ～ 2.25m とばらつきがみられる。梁行方位は北から東に 2°振っている。また，SA4126 とは方向が等しく，梁行と柱間が近似することから関連するものと考えられる。

166 次調査出土建物

SB4200（Fig.31，PL.37）

166 次調査区の北東隅部に位置する。166 次調査段階では梁・桁行とも２間以上の建物と

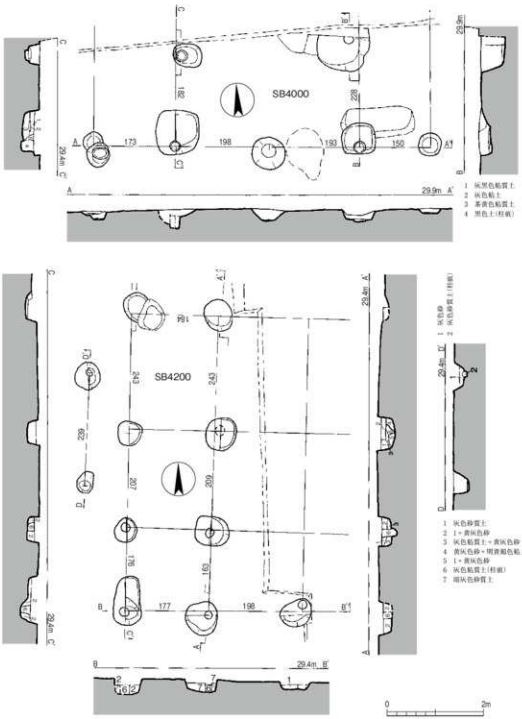


Fig.31　掘立柱建物 SB4000・4200 実測図（1/80）

していたが，175 次調査区において 2 個の柱掘方を検出したことにより，南北 3 間（6.26m），東西 2 間以上の総柱建物となった。柱掘方は長軸 0.52 ～ 0.74m の隅丸方形を呈するが，南西隅柱のみ長さ 1.04m の楕円形をなし，別の柱穴と重複している。柱痕跡は殆どの柱掘方で認められ，径 20cm前後であった。柱間は 1.66 ～ 2.08m とばらつきがみられる。西端柱列の方位は北から東に 2°振っている。柱掘方埋土中からは，土師器坏片が出土した程度であった。

SB4225（Fig.32）

167 次調査
出土建物

167 次調査区の南西隅部に位置する。調査当初は，竪穴住居 SI4220 を囲む L 形の柵としていたが，186 － 2 次調査区において当該建物に伴うとみられる柱掘方 1 個を検出しており，今回は掘立柱建物として報告する。竪穴住居 SI4220 及び掘立柱建物 SB4556 とは重複関係にある。柱掘方は北側で 4 個，東側で 4 個，西側で 1 個の検出状況であるが，桁行 5 間（7.8m），梁行 4 間（6.0m）の東西棟建物として復原した。柱掘方は径 0.35 ～ 0.5m の円形を呈し，深

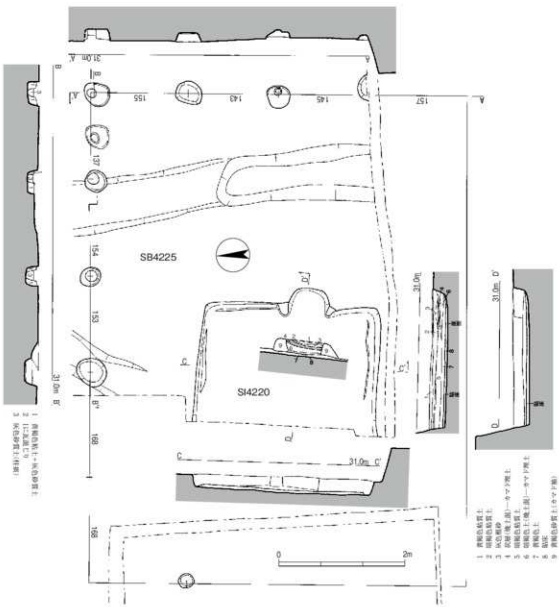


Fig.32　掘立柱建物 SB4225，竪穴住居 SI4220 実測図（1/60）

さ 0.2m 程の遺存状態であり，径 20cm前後の柱痕跡を確認している。柱間は桁側が 1.37 ～ 1.54m，同梁側が 1.43 ～ 1.55m の間隔を有する。梁行方位は北から東に 4° 30′振っている。

175 次調査出土建物

SB4340（Fig.33，PL.40・42・44 ～ 46）

175 次調査区の北側中央に位置し，南北溝 SD4335，土坑 SK4329・4331・4336・4338・4339 に切られる。東西棟の四面廂建物で，広丸地区においては唯一の四面廂建物である。建物規模は，身舎の梁行 3 間（5.56m），桁行 5 間（8.06m）で，身舎から 1.9m の間隔をおいて廂が巡るものの，西側は土坑に切られるため殆ど遺存していない。身舎の柱掘方は長軸 0.7 ～ 1.0m の隅丸方形ないしは円形を呈し，深さは 0.6m 程を測る。廂の柱掘方は 0.3 ～ 0.6m の円形を呈し，深さは 0.3m 程であった。身舎の殆どの柱掘方で柱痕跡を確認でき，径 20cm 前後を測る。また，柱痕跡の埋土中には焼土・炭が入っており，建物が焼失した可能性がある。

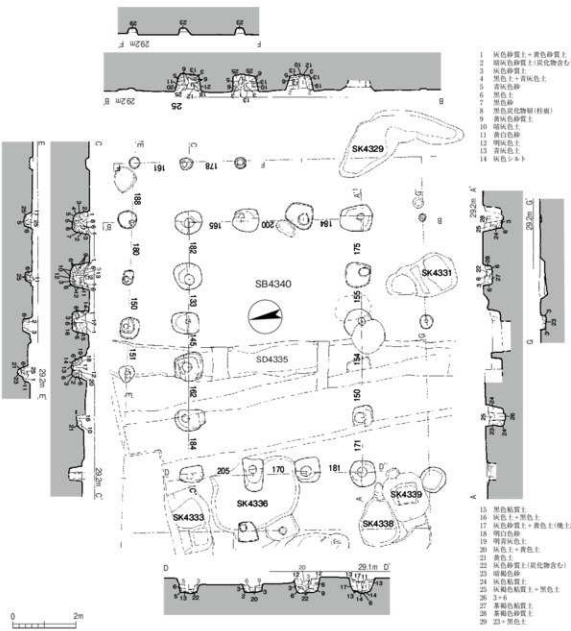


Fig.33　掘立柱建物 SB4340 実測図（1/120）

廂の柱痕跡は径 10 ～ 15㎝であった。柱間は身舎の梁側が 1.7 ～ 2.05m で，桁側は 1.33 ～ 1.84m でばらつきがみられるが，桁側は両端部が中央 3 間に比してやや広い。廂の柱間は梁側が 1.61m･1.78m，桁側が 1.5 ～ 1.88m とばらつく。東側の梁行方位は北から東に 9° 30′ 振っている。

SB4550A（Fig.34，PL.47・48）

186 次調査
出土建物

186 次調査区西側中央のやや北側で検出した。同一場所で建て替えを行っており，古期建物を A，新期建物を B とした。梁行 2 間，桁行 1 間以上の東西棟建物で，柱掘方は隅丸方形を呈し，長軸 1.2m，深さ 0.5m 程を測る。建て替えの際に柱を抜かれており，柱間は不詳。

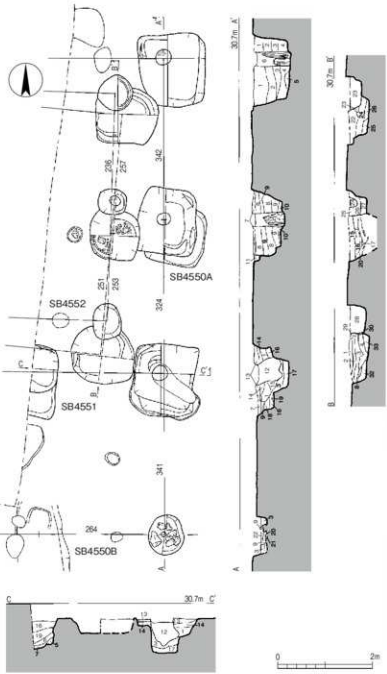


Fig.34　掘立柱建物 SB4550（A･B）･4551･4552 実測図（1/80）

SB4550B（Fig.34，PL.47・48）

SB4550A と重複して位置し，SB4551・4552 に切られる。梁行 2 間（6.66m），桁行 1 間以上の身舎の南側に廂を付した片廂建物である。柱掘方は長軸 1.3 ～ 1.6m の隅丸方形を呈し，深さは 0.7m を測る。梁行の北東隅と中央の掘方内には径 27㎝の柱根が遺存しており，柱根が沈下していることから瓦葺であった可能性を有する。梁行の柱間は 3.42m・3.24m で，廂の出は 3.41m を測る。梁行方位は北を示す。

SB4551（Fig.34，PL.47）

186 次調査区の西側に位置し，SB4550B を切り，SB4552 に切られる。梁行 2 間（5.08m）を確認した程度で，大半が調査区外にあるため詳細は不明。柱掘方は長軸 1.3m 程の隅丸方形を呈し，深さは 0.4m を測る。柱掘方を断ち割ったものの柱痕跡は掴めなかった。梁行中央の掘方下部には 2㎝程の花崗岩小礫を敷いていた。梁行方位は北から東に 5°振っている。

SB4552（Fig.34，PL.47）

186 次調査区の西側に位置し，SB4551 を切っていることから，SB4550A・4550B・4451・4552 の 4 棟のうち最も新しく，小型化する傾向にある。当建物も梁行 2 間（4.89m）を確認したのみで詳細不詳。柱掘方は径 0.75m の円形を呈し，深さは 0.4m を測る。梁行方位は北から東に 2°振っている。

SB4553（Fig.35）

186 次調査区の南側に位置し，SD4542，SK4547 を切り，SB4555，SA4558・4596 と重複するが，SB4555・SA4558 より後出する。概報では梁行 2 間，桁行 3 間の側柱建物としていたが，北側桁行に沿って柱穴がみられることから梁行 2 間（3.95m），桁行 3 間（6.22m）の身舎の北側に廂を設けた片廂建物と考えた。身舎の柱掘方は 0.5m 前後の円形を呈し，柱痕跡を確認していないが，柱間は梁側が 1.71 ～ 2.24m，桁側が 1.92 ～ 2.25m を測る。廂の柱穴は北側桁行の 1.42m 北側にあり，径 0.25m 前後で，柱間は 2.04m・2.23m を測る。西側梁行の方位は北から東に 9°振っている。当建物は，上面検出に留めたので詳細不明。

SB4554（Fig.35）

186 次調査区の南東部に位置し，SD4543 と重複する。概報段階では，梁行 2 間（2.85m），桁行 5 間（8.4m）の南北棟建物としていたが，梁行の柱間が 1.3m と狭小であることと桁行の東西柱間が余りにも揃っていないことから柵 SA4595 と SB4554 とに分離した。梁・桁とも 1 間のみの検出であり，調査区外に伸びる。柱掘方は 0.4 ～ 0.5m の円形を呈し，柱間は北側が 2.11m，西側が 2.04m を測る。上面検出に留めたので，柱痕跡・深さ等不詳。

SB4555（Fig.36）

186 次調査区の中央やや南側に位置し，SA4558，SD4542・4544 を切り，SB4553 に切られ，SA4557・4594・4595，SK4546 と重複する。梁行 2 間（7.01m），桁行 4 間以上（13.2）の大規模な東西棟建物である。柱掘方は長軸 0.7 ～ 0.9m の隅丸方形を呈する。上面検出に留めたが，径 25㎝程の柱痕跡を確認している。柱間は梁側が 3.43m・3.58m，桁側が 2.48 ～ 3.8m とばらつきがみられる。梁行方位は北から東に 2° 30′振っている。

SB4556（Fig.37）

186 次調査区の北東側に位置する。186 － 2 次調査で桁行 2 間目の柱掘方を検出したが，

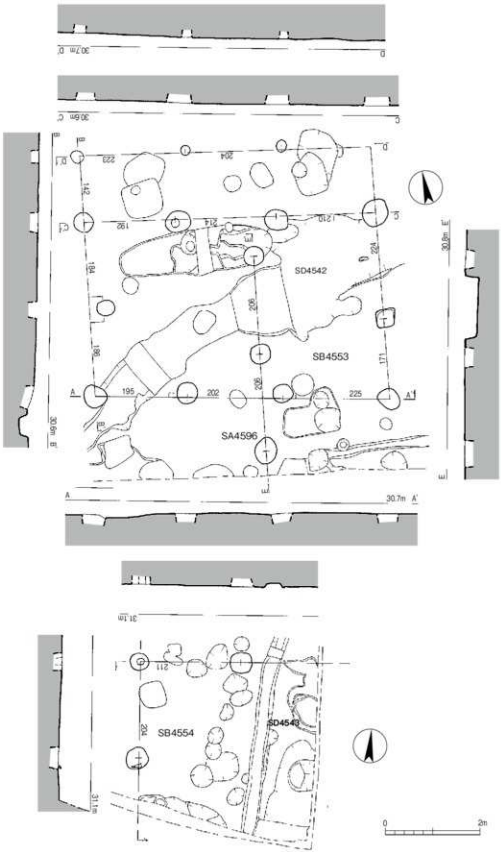


Fig.35　掘立柱建物 SB4553･4554，柵 SA4596 実測図（1/80）

更に東側に伸びるものの 167 次調査区までは及ばないことから梁行 2 間（2.11m），桁行 3 間（8.56m）の東西棟建物となる。柱掘方は径 0.4 ～ 0.5m の円形を呈し，深さは 0.3m 程を測る。柱間は梁行が 2.04m・2.07m，桁行が 2.82 ～ 2.92m を測る。梁行方位は北から東に 2°振っている。

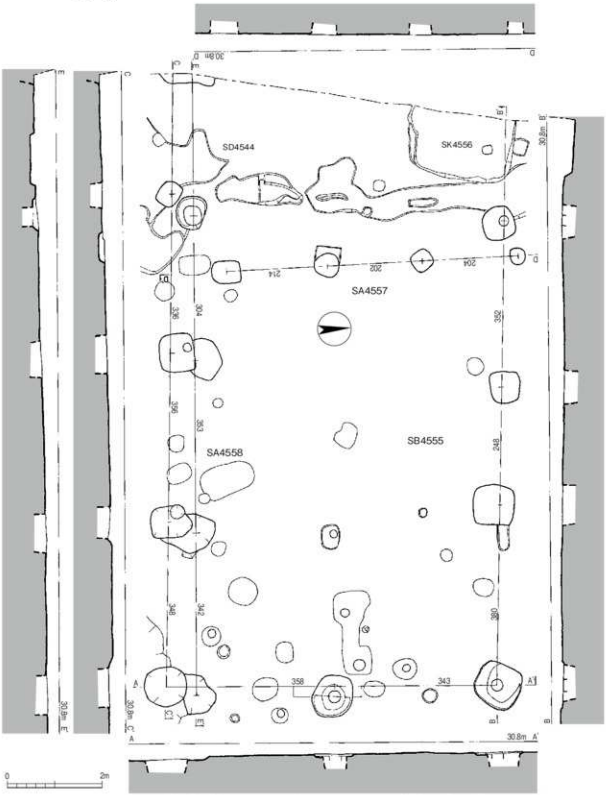


Fig.36　掘立柱建物 SB4555，柵 SA4557・4558 実測図（1/80）

SB4598（Fig.37）

186 次調査区の北西隅に位置する。図面検討の結果，新たに建物としたものである。梁行 1 間以上，桁行 2 間以上の東西棟建物と思われるが，大半が調査区外にあるため詳細は不明。柱掘方は 0.4m 前後の円形を呈し，柱間は梁行が 2.5m，桁行が東から 2.05m，2.36m を測る。梁行方位は北から東に 11°振っている。当建物も上面検出で留めている。

（3）柵（Fig.21）

広丸地区では，95・96・96 補・133・137・157・166・186 次調査において大小 23 列の柵を確認した。今回掲載している柵には，現場時点で検出したものと報告書作成時の図面検討によって新規に確認したものの二者が存在するが，後者の図面検討によって柵とみなしたもの

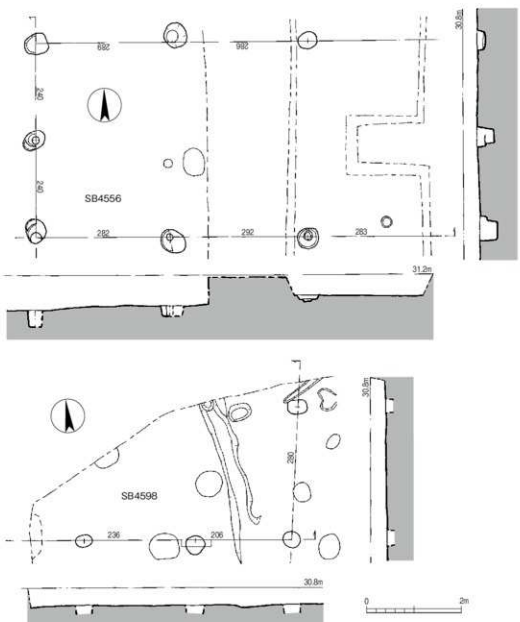


Fig.37　掘立柱建物 SB4556・4598 実測図（1/80）

が大半を占める。なお，柵の方位は，国土調査法第Ⅱ座標系の南北軸或いは東西軸から柵両端の柱穴底面中心を結んだ線が何度振れているかを全円分度器で計測して求めた数値である。

95次調査出土柵

SA2792（Fig.38）

95次調査区の南西側に位置する。南北方向に柱穴4個が2.42～2.58mの間隔で並び，図面検討の結果，柵とみなした。柱穴は径0.3～0.4mで，深さは0.2m前後と著しい削平を受ける。方位は北から東に6°30′振っている。柱穴からの出土遺物はなかった。

SA2793（Fig.38）

95次調査区の北西側に位置する。当該柵も図面検討の結果，柵としたものである。柱間はP1－2間2.72m，P2－3間2.35m，P3－4間2.6mで，中央間がやや狭くなる。柱穴は0.26～0.6mの円形ないしは楕円形を呈する。深さは0.2m前後であるが，P3は0.31mとやや深い。方位は北から東に4°振っている。なお，当該柵の南延長線上にはSA2792が位置するが，方位と柱間間隔が異なることから別物の柵とした。出土遺物はなかった。

96次調査出土柵

SA2822（Fig.39）

96次調査北区の東端に位置し，流路SD2760・2879を切り，SB2825，SK2841と重複する。南北方向の柵で，96次北区で5間分，96次補足調査で4間分を確認しており，合計9間以上（26.15m）の大規模な柵である。柱掘方は隅丸方形を呈し，長軸0.6～1.0mで，深さは残りの良いもので0.5m程を測る。北から2・3番目の掘方には径20cm程の柱根が遺存していた。柱間は2.04～3.36mとばらつきがみられる。方位は北から東に2°振っている。

SA2829（Fig.24）

96次調査北区の北端部に位置し，SB2830を切っている。東西方向に2間（4.27m）分を検出したが，これ以上伸びないことから目隠し塀になろう。柱穴は円形を呈し，径0.3m程，深さ0.1mと削平が著しい。柱間はP1－2間2.18m，P2－3間2.09mを測る。方位は東から南に2°振っている。柱穴からの出土遺物はなかった。

SA2831（Fig.39，PL.20・21）

96次調査区の北端部に位置し，SB2830と重複する。東西方向に伸びる柵で，4間分の長さ計9.5mを確認したが，北側が調査区外であることから，掘立柱建物になる可能性もある。柱穴は0.6m前後の楕円形を呈し，深さは0.2m前後を測る。柱間は2.27～2.48mとややばらつくが，8尺を基本としよう。方位は東から1°北に振っている。柱穴から土師器甕が出土した。

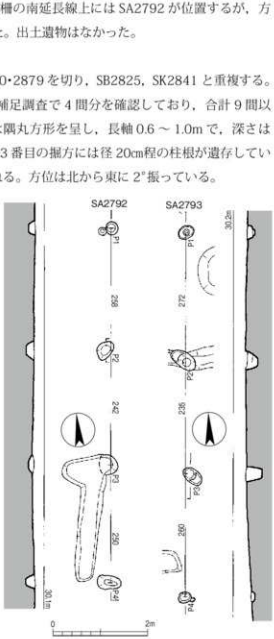


Fig.38　柵SA2792・2793実測図（1/80）

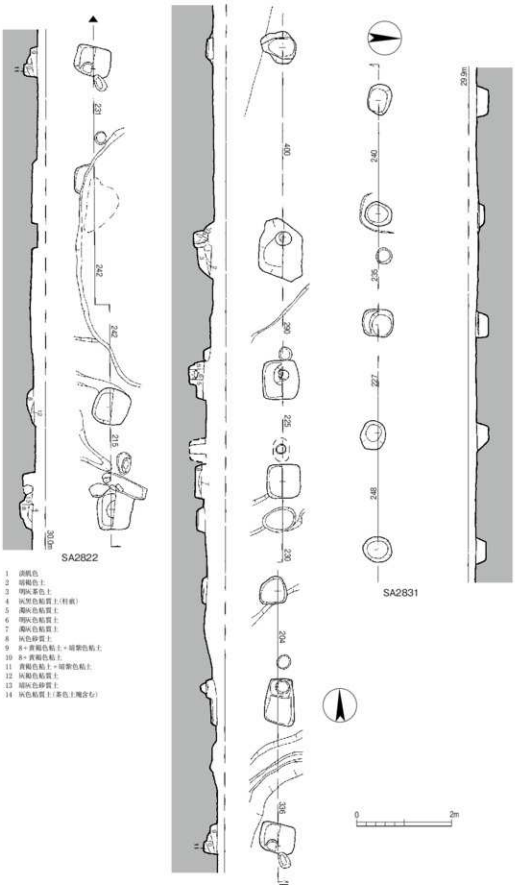


Fig.39　柵 SA2822・2831 実測図（1/80）

SA2856（Fig.26）

96 次調査区の西側中央部で，南北調査区に跨がって位置し，SB2842 と重複する。南北方向の柵で，2 間規模であることから目隠し塀的用途になろう。柱穴は円形を呈し，径 30㎝前後，深さ 20㎝前後を測る。方位は北から東に 4° 30′ 振っている。

SA2869（Fig.26）

SA2856 の 0.6m 東側に位置し，SB2842，SD2810・2833・2836 と重複する。南北方向の柵で，4 間（8.64m）を確認した。柱穴は円形を呈し，径 0.3m，深さ 0.3m を測る。方位は北から東に 4°振っている。

133 次調査出土柵 **SA3912**（Fig.27）

133 次調査区の中央で，掘立柱建物 SB3905 のすぐ南側に位置する。東西方向の柵で，3 間（3.76m）規模である。柱穴は円形を呈し，径 0.3m 前後，深さ 0.13 ～ 0.25m で，柱間は東から 1.23m・1.32m・1.21m を測る。方位は東から南に 4°振っている。

SA3914（Fig.40）

133 次調査区の中央やや東側に位置し，SB3905 と重複する。南北方向の柵で，3 間分（5.59m）を確認したが，北・南側とも調査区外に伸びる可能性を有する。柱穴は円形を呈し，径 0.25 ～ 0.36m で，深さは 10㎝前後と著しい削平を受ける。柱間間隔は北側から 1.84m・1.77m・1.98m とややばらつきがみられる。方位は北から東に 8° 30′ 振っている。柱穴からの出土遺物はなかった。

137 次調査出土柵 **SA3946**（Fig.40）

137 次調査区の南西側に位置する。東西方向の柵で，2 間分（2.2m）を確認しているが，東側に伸びる可能性を有する。柱穴は 25㎝程の円形を呈し，柱間間隔は 1.1m の等間である。P1 には径 6㎝の柱根が遺存していた。方位は東から南に 1°振っている。遺物の出土はなかった。

SA3947（Fig.40）

SA3946 の 1.1m 南側に平行して位置する柵で，2 間分を確認したが，東側に伸びる可能性がある。柱穴は 30㎝程の円形を呈し，柱間間隔は P1 － 2 間 1.28m，P2 － 3 間 1.33m を測る。方位は東から南に 2°振っている。遺物の出土はなかった。

157 次調査出土柵 **SA4116**（Fig.40）

157 次調査区の北端中央に位置し，土坑 SK4125 を切る。東西方向の柵で，5 間以上を検出したが，西側に伸びる可能性を有する。柱穴は円形を呈し，径 0.15 ～ 0.36m，深さ 0.21 ～ 0.53m を測る。柱間は 2.2 ～ 3.0m の間隔を有する。方位は北から南に 5° 30′ 振っている。柱穴からは土師器椀，須恵器甕片が出土した。

SA4126

157 次調査区の南端中央に位置する。東西方向の柵で，2 間以上（9.04m）を検出したが，東延長線上に掘立柱建物 SB4130 の南桁行柱列が乗ってくることから，両者は関連する可能性が高い。柱穴は円形を呈し，径 0.3m 前後，深さ 0.14 ～ 0.22m を測り，柱間は P1 － 2 間 4.38m，P2 － 3 間 4.66m の間隔を有する。方位は東から南に 2° 30′ 振っている。

SA4127（Fig.40）

157 次調査区の中央やや西側に位置し，東西溝 SD4123 と完全に重複する。柱穴 3 個 2 間

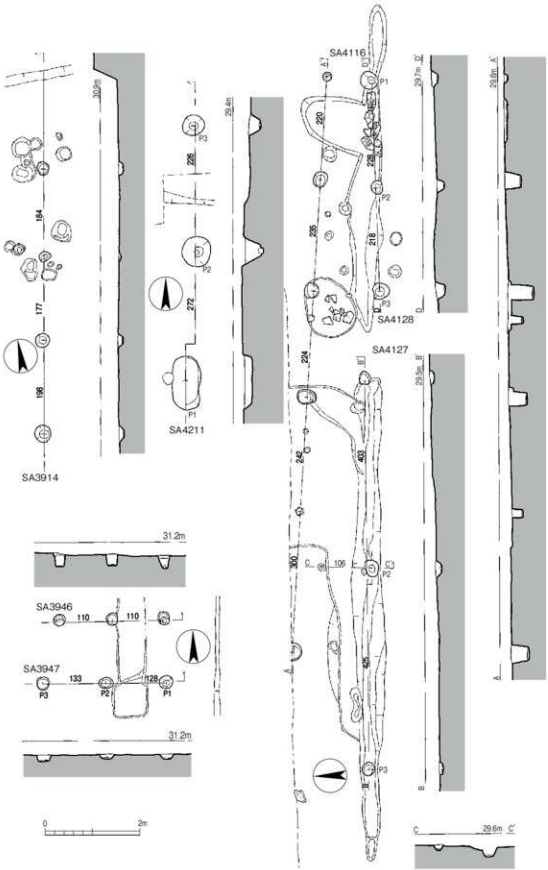


Fig.40　柵 SA3914・3946・3947・4116・4127・4128・4211 実測図（1/80）

分（8.28m）の柵で，柱間はP1 － 2 間 4.03m，P2 － 3 間 4.25m と間隔が長いが直線的に並んでいることから柵とした。また，P2 の北側には控え柱とみられる小ピットが存在する。柱穴は円形を呈し，径 0.3m 前後，深さ 0.1m 前後と削平が著しい。控え柱の小ピットは径 17㎝，深さ 10㎝を測る。柵の方位は東から南に 1° 30′ 振っている。柱穴からの出土遺物はなかった。

SA4128（Fig.40）

157 次調査区の中央部に位置し，溝 SD4123 と重複する。東西方向の柵で，2 間（4.46m）であることから目隠し塀的なものになるか。柱穴は円形を呈し，径 0.3 ～ 0.38m，深さ 0.2m 前後と削平が著しい。柱間は P1 － 2 間 2.28m，P2 － 3 間 2.18m を測る。方位は東から北に 30′ 振っている。柱穴からの出土遺物はなかった。

166 次調査出土柵

SA4211（Fig.40）

166 次調査区の北端部から 175 次調査区にかけて位置する。175 次調査区で柱穴を 1 個検出したことから柵とした。柱穴は径 0.44 ～ 0.64m の円形を呈するが，P1 は長軸 1.15m の楕円形を呈し，柱間は P1 － 2 間 2.72m，P2 － 3 間 2.66m を測る。2 間規模であることから目隠塀的な用途が考えられる。方位は北から西に 30 分振っている。

186 次調査出土柵

SA4557（Fig.36）

186 次調査区の西側に位置し，SB4555 と重複する。南北方向の柵で，3 間分（6.2m）であることから目隠し塀とみられる。柱穴は長軸 0.4 ～ 0.6m の円形ないしは隅丸方形を呈し，柱間は北から 2.04m・2.02m・2.14m を測る。方位は北から西に 30′ 振っている。当柵は上面検出に留めているので，深さ・柱痕跡・遺物等の詳細は不明。

SA4558（Fig.36）

186 次調査区の南側で，SB4555 南側桁行の柱掘方に重複した状態で切られる。東西方向の柵で，4 間分を確認したが，東・西側両方とも調査区外に伸びる。柱掘方は不整方形を呈し，長軸 0.8m と比較的大きい。柱間は東から 3.42m，3.53m，3.04m と 10 尺を越える。方位は東から南に 2° 30′ 振っている。上面検出で留めているため詳細は不明。

SA4593（Fig.41）

186 次調査区の北東部に位置する。南北方向の柵で，2 間分を確認したが北側に伸びる可能性がある。柱穴は径 0.4 ～ 0.6m の円形を呈し，柱間は南から 1.82m・1.88m を測る。方位は北から西に 1° 振っている。なお，上面検出に留めたので，深さ・柱痕跡・遺物に関しては不明。

SA4594（Fig.41）

186 次調査区の南西隅部に位置し，SD4544 を切り，SB4555 と重複する。北東－南西方向に走る柵で，5 間分を確認したが，南側に伸びる可能性を有する。柱穴は円形を呈し，径 0.4m 前後を測る。柱間は 0.93 ～ 1.3m とばらつきがみられる。方位は北から東に 38° と大きく振っている。当柵も上面検出に留めたので，詳細は不詳。

SA4595（Fig.41）

186 次調査区の南東側で，SB4543 の 1m 東側に位置し，同建物と柱筋を揃える。SD4542 を切り，SB4555 及び SA4558 と重複するが，当柵が最も後出するとみられる。概報段階では SB4554 としていたが，今次報告では西側桁行柱列を SA4595 として南北方向の柵とした。4 間分を検出したが，更に南側に伸びるものと思われる。柱穴は径 50㎝程の円形を呈し，柱間

は 2.35 ～ 2.67m を測る。上面検出に留めたが，北端の柱穴では径 15cmの柱痕跡を確認した。方位は北から東に 9° 30′ 振っている。

SA4596（Fig.35）

186 次調査区の南端中央に位置し，SK4547 を切り，SB4553・SD4542 と重複する。南北方向の柵で，2 間分を検出したが，南側に伸びる可能性を有する。柱穴は径 40cm程の円形を呈し，柱間は 2.6m 等間である。方位は北から東に 9°振っている。当柵も上面検出に留めており，詳細は不詳。

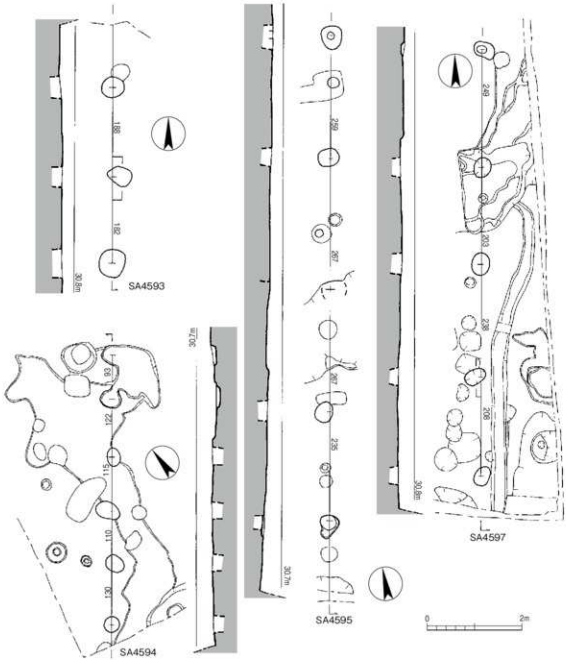


Fig.41　柵 SA4593 ～ 4595・4597 実測図（1/80）

SA4597（Fig.41）

186 次調査区の南東部に位置し，SD4542 を切り，SB4554・SA4558 と重複する。南北方向の柵で，4 間分を確認したが，更に南側に伸びる可能性がある。柱穴は径 40cm程の円形を呈し，柱間は 2.03 ～ 2.49m を測る。方位は北から東に 2°振っている。上面検出に留めたため深さ・遺物等不詳。

竪穴住居

（4）竪穴住居

SI4220（Fig.32，PL.38）

167 次調査区の南西隅で検出した。西半部は未調査であるが，186-2 次調査区までは伸びないことから一辺 2.8m 程の方形を呈しよう。東壁長 2.71m，壁高 0.2m を測る。床面に柱穴は存在せず，所謂小型無柱穴住居とみられる。北・東・南壁際で幅 10cm程の壁溝を検出した。床面は堅く締まっており，厚さ 4 ～ 7cmの貼床を施している。住居の埋土中からは須恵器蓋及び土師器甕の小片，鞴羽口細片が出土した程度である。

カマドは東壁のやや南側に付設される突出型で，焚口幅 54cm，奥行 25cmの隅丸方形を呈する。両袖は壁体掘込の隅部に貼付し，右袖は長さ 18cm，幅 24cmで，左袖は長さ 22cm，幅 22cmを測る。埋土中には焼土を含む炭層が堆積しているが，火床・壁体はそれ程焼けておらず，支脚・煙道も遺存していない。カマドの方位は東から南に 10°振っている。

溝

（5）溝（Fig.42）

広丸地区は東西に約 300m の幅，南北に約 180m の長さを持つ。近年明らかになってきた条坊区画の規模は約 90m の正方形を持っており，広丸地区の範囲内において，東西に少なくとも 4 単位，南北に 3 単位程度の条坊区画を含むことは明らかである。これらの条坊区画を示す可能性が高い溝（条坊道路側溝）を，従前に倣い本書でも「区画溝」として報告する。また，各条坊区画の内部を細かく分けるための溝も多く確認される。これらをやはり従前に倣い「その他の区画溝」として報告する。最後に，これらに該当しない溝群について，「その他の溝」として報告する。

区画溝

1）区画溝

29 次調査出土区画溝

SD529・530

29 次調査区 A トレンチで検出した。調査時にはそれぞれ別個の遺構番号を付していたが，埋土の共通性等から，概報では一連の溝として報告しており，本報でもこれに従う。A トレンチ拡張区では南方向に伸びているが中途で緩やかに西に曲がり A トレンチ南側でトレンチを北東から南西に向かって斜めに横断するように伸びる。幅 4.5 ～ 7m，深さ 40 ～ 50cmをはかり，埋土は上層が淡茶灰色砂質土，下層は黒灰色粘質土である。下層より土師器・須恵器の小片が出土しているが，時期の判断できるような破片はない。推定 4 坊路の東側側溝におおよそ合う位置にあるが，南半が西に向かって緩やかに湾曲していることから条坊道路側溝としては疑問も残る。ここでは一応区画溝としてあげておく。

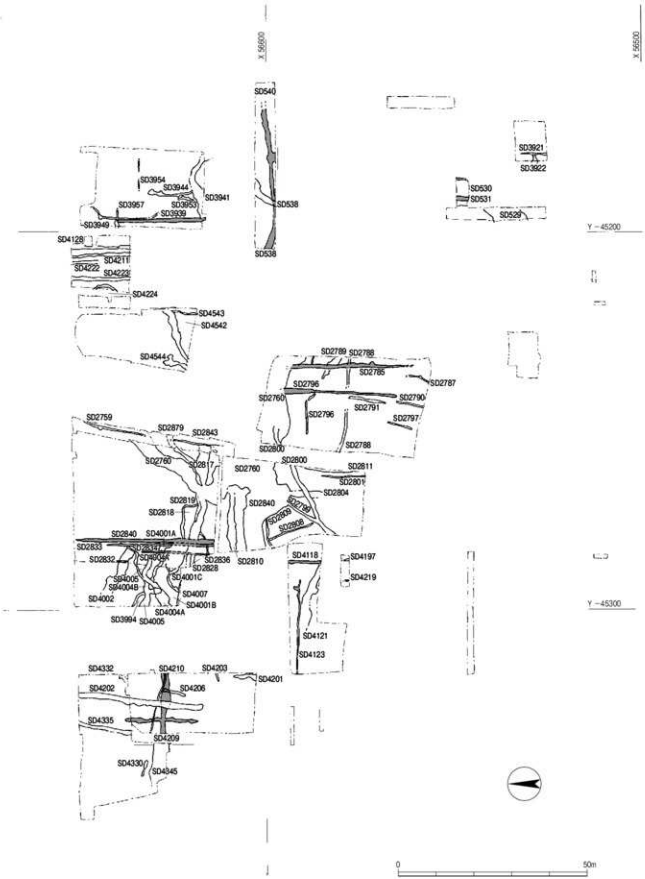


Fig.42　広丸地区出土溝・流路配置図（1/1,000）

SD540（Fig.43，PL.5）

29 次調査区 B トレンチで検出した。調査区を東西に横切るように伸びる。特に東半は緩やかな弧状を描いて伸びており，道路側溝とするにはやや不安もあるが，推定 5 条路におおよそ合う位置にあり，5 条路の側溝の可能性のある溝として報告する。幅約 50cm，深さ約 20cm を測る。底面にはわずかに凹凸が認められ，また西側端部ではやや不定型に広がるが，本来の形状かどうか疑問も残る。埋土は上層より茶灰色砂質土，淡灰茶色砂質土，灰白色砂，暗茶色粗砂・灰白色粗砂の順で堆積するとされる（Fig.43）。この土層が記録された部分は B トレンチの南壁中央部付近にあたり，横断土層ではなく縦断土層のはずであるが，溝左右の肩がきちんと傾斜を持っていることが注意される。付近は溝の南肩ラインが調査区外にはみ出る場所にあたり，その形状は判然としないが，ここから南に直交方向の溝が分岐する可能性もあろうか。他遺構の切り合い関係では，SK541 を破壊しておりこれより新しく，SD538 に切られていてこれより古い。出土土器には土師器・須恵器があり，8 世紀代の遺構であろう。

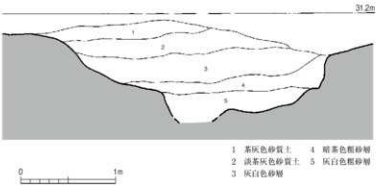


Fig.43　溝 SD540 土層図（1/40）

95 次調査出土区画溝

SD2788

95 次調査のほぼ中央を東西に横切る溝状遺構である。深さが深いところでも 10cm程度と非常に浅い溝で，削平により失われていて検出は断続的である。幅は太い箇所で約 50cm を測る。東半は大略条坊の方位と合致する方向に伸びる。西側は緩やかに北に向かって湾曲しているが，残りが非常に悪いためこの知見が正しいかどうかやや疑問である。SK2795 と重複しているが切り合い関係は記録されていない。後述する 6 条路南側溝に比定される SD2796 とほぼ並行して走っており，本溝もある時期 6 条路に付随する溝として機能していた可能性を考えて区画溝として報告しておく。なお，埋土中から遺物は出土していない。

SD2796

95 次調査区の北寄りを断続的に東西に横切る溝状遺構である。深さは約 10cm，幅は 30cm 程度と，非常に残りが悪い。157 次調査の SD4123 とつながり，少なくとも 90m ほどは条坊内を東西方向に貫くように伸びる可能性が高いこと，方位が条坊とほぼ合致すること，5 条路と推定される県道筑紫野太宰府線の南端部から約 100m の位置にあることなどから，6 条路の南側側溝の可能性を考えたい。埋土の記録はなく，出土遺物もない。

96 次調査出土区画溝

SD2832

96 次調査北区の西端を南北に伸びる小溝で，延長 3m ほどを検出した。幅最大 50cm，深さ 5cmほどで，削平により大半が失われたものとみられる。東に走る数条の溝とともに，西 5 坊路の側溝の掘り直し溝のうちの一つであろう。出土遺物はごく少量で時期を判断できるものに乏しいがやや古手の土師器が多い。混入か。

SD2833（Fig.44，PL.15）

96 次調査北区西側を南北に伸びる溝。延長 18m ほどを調査した。幅 80cm，深さ 10cmほどをはかる。東側に玉石貼の溝 SD2840 が並行して走り，西 5 坊路側溝の一つと考えられる。出土遺物はごく少量で時期を判断できる資料に欠ける。

SD2834

96 次調査北区の西端を南北に伸びる小溝。SD2832 と 2833 の間に位置し，並行して伸びる。7m ほどが検出された。幅 40cm，深さ 5cmほどをはかる。削平により大半が失われたものとみられ，西 5 坊路の一つであろう。出土遺物は土師器の小片ばかりビニール袋 1 袋ほどあり，薄手のものが大半を占めるが，時期の判断できる手掛かりに欠ける。

SD2840（Fig.44，PL.15）

96 次調査北区の西側を南北に貫く溝。周辺を並行して走る推定西 5 坊路側溝の溝群のなかでは最も残りがよい。幅 1m，深さ 20cmほどをはかり，特に南側で底部と側壁の一部に直径 10 ～ 30cmの玉石を貼った痕跡がよく残る。なお，玉石は全て抜き取られている。出土遺物は土師器の小片ばかりでビニール袋 1 袋ほどあるが，時期を判断する手がかりに欠ける。

SD3939（Fig.19）

137 次調査区の西側を南北に縦断する溝状遺構である。概報段階では掘立柱建物群との切り合い関係について不明とされていたが，調査区南壁土層を見ると（Fig.19 － 13），SB3940 に切られる関係であることがわかる。また SD3941 を切る遺構であることも併せて読み取れる。SE3955 のすぐ南側から伸びていて SE3955 とは切り合わない。このほか SD3957・SB3958 等と切り合うが先後関係は不明。大楠地区で検出した 94 次調査 SD2680 から西に約 90m の位置にあり，西 4 坊路の側溝と見られる。同じく 4 坊路の側溝の可能性を考えた 29 次調査 SD529・530 の延長線上よりやや西にあり，西側側溝か。幅は 1m，深さは 30cmほどあって比較的しっかりとした遺構である。北側端部が SD3957 東西溝と接しており，これが条坊内区画道路の側溝とすれば交差点遺構となりうるが，付近の残存状況が悪く断定できない。出土土器には土師器・須恵器の小片があり，これから判断すれば 8 世紀代の遺構となろう。

SD3953

上述 SD3939 の東側約 6m の位置で南北に伸びる小溝である。検出長は約 4m，幅は最大 80cm，深さは 20cmほどで底面に凹凸が見られる。SD3939 と比較すると形状が不安定で遺存状況も悪いため同時期・同性格の遺構と

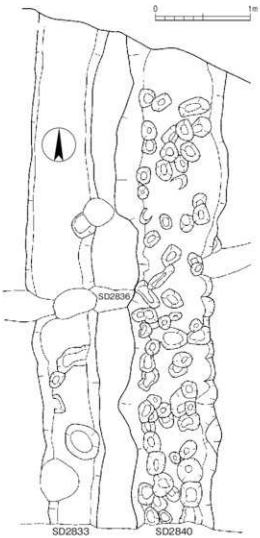


Fig.44　溝 SD2833・2840 南端部実測図（1/40）

するにはやや不安もあるが，位置関係から西４坊路の東側側溝の可能性がある遺構と考えたい。出土土器には土師器・須恵器の小片があるがやや時期判断の可能な遺物に乏しい。８世紀代か。

157 次調査
出土区画溝

SD4118

157 次調査区の東側で調査区を南北に縦断する直線的な溝である。５坊路推定地付近にあり，５坊路の側溝の可能性がある。幅は約 80cm，深さは約 15cmを測り，底面は平坦でかなり整った印象を受ける。SB4130･SK4119 と重複するが，先後関係は不明。土層略図が残されており，それによれば埋土は茶灰色粘質土よりなるという。同じ土層略図には SD4121 との切り合い関係も示されており，本溝が後出する。出土遺物には土師器・須恵器の小片がわずかにあり，高台を付す坏身の形状などから 10 世紀代以降の埋没と見られる。

SD4123（Fig.45）

157 次調査区の北側で東西方向に断続的に伸びる溝状遺構である。SD4121 と重複しておりこれより新しいほか，SK4129 とも重複するが新古関係は不明。東側・西側では削平によりきわめて残りが悪い。残りのいい中央部付近での残存幅は 60cm，深さは 10cmほどを測る。県道筑紫野太宰府線の南端より南に約 90m の位置にあり，直線的に伸びることから，５条路の側溝の可能性があろう。なお，本溝の底面より柵列 SA4127・4128 が検出された。本溝に伴う区画施設の可能性も考えられる。また，本溝の底部から，本溝に伴う暗渠施設と考えられる瓦組遺構 SX4122 が出土しており別個に報告する。

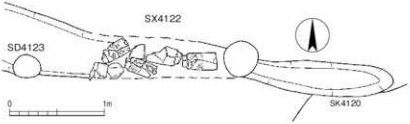


Fig.45　溝 SD4123 中の暗渠施設 SX4122 実測図（1/40）

10 世紀代の埋没と考えられる SD4121 に後出することから 10 世紀代以降の埋没と考えられ，出土遺物とも整合する。

SX4122（Fig.45，PL.32）

SD4123 の東側で，底面より検出された瓦組の暗渠とみられる遺構である。丸瓦５個が列状に並んで出土したが，壊されたものとみられ原位置をとどめておらず，当初の構造は不明である。状況から見て，当初の位置から大きく動かされてはいないと見られる。

167 次調査
出土区画溝

SD4218・4221 ～ 4223

167 次調査区を南北に縦断する４本の溝のうち最も東側の溝である。SD4218・4221 ～ 4223 の４本の溝は，互いに並行して南北方向に調査区を縦断する溝状遺構で，深さが 5cm 程度，幅が 60 ～ 80cmと共通点が多い一群である。４坊路の西側側溝と推定した 137 次調査 SD3939 の 10 ～ 15m 西に並行して走ることから，４坊路側溝の掘り直し溝の可能性があると考え区画溝の項で報告する。いずれの溝からも出土土器がなく時期を比定する材料に欠ける。

その他の
区画溝
95 次調査
出土その他
の区画溝

２）その他の区画溝

SD2785

95 次調査区を南北に並行して走る２条の溝のうち東側の溝である。南側に行くほどに浅く

細くなり，調査区南端部では削平によって完全に失われる。北側の太い部分で幅約 1m，深さ 10cmほどをはかる。溝の床面レベルは南に行くほどに徐々に深くなる。埋土の記録はないが，平面形状を見ると溝内に部分的に段が認められ，複数回の掘り直しの可能性も指摘できよう。埋土中からは土師器・須恵器の小片が出土しており，おおよそ 8 世紀代後半に位置づけられる。中世の土壙墓 SX2768 に切られるほか，SK2783 にも一部を切られる。SD2760 を破壊しこれより新しい。SD2789 と重複するが切り合い関係は記録に残されていない。直行する溝 SD2788 との関係も不明だが，底面レベルはほぼ同一である。SD2786 とともに，条坊区画内を 2 または 4 等分する区画内道路の側溝の可能性が高い（後述）。

SD2786

95 次調査区を南北に並行して走る 2 条の溝のうち西側の溝である。SD2785 と同様に，南に行くほどに溝幅が狭くなり浅くなっていて，調査区南端部では完全に失われる。幅は約 40cm，深さは 15cmほどを測る。北側では幅の広い落ち込みと重複しており，やはり掘り直しの可能性も考えられる。埋土中からは土師器・須恵器の小片が少量出土しており，須恵器の坏蓋の形状から 8 世紀代の遺構と考えられる。SD2760 と切り合っていてこれより新しい。また断続的に伸びる溝 SD2789 とも重複するが切り合い関係は不明。

本溝は，東の SD2785 と芯－芯で約 7m の間隔で並行して走る。ともに方位は東に 3 度弱振れていて条坊区画とおよそ同一方位で走る。SD2785･2786 を条坊域のなかに位置づけると，SD2786 は西 5 条道路東側側溝とみられる 96 次 SD2840 の延長線より約 40m，SD2785 は西 4 条道路西側側溝とみられる 137 次 SD3939 の延長線より西に約 37m の位置にあり，西 4 坊 7 条の区画を東西におおよそ二分する。以上より，SD2785・2786 は条坊内道路の側溝と位置づけておきたい。

SD2787

95 次調査区南端部にあり，SD2785 の横約 2m の位置でこれと略並行しながら南に伸び，調査区南端近くで屈曲して南西方向に伸びる。幅約 30cm，深さ約 10cmで大きく削平されているとみられる。SK2780 と重複するが切り合い関係は不明。条坊内道路側溝と推定した SD2785 と並行することから，これの掘り直し溝の可能性を考えたい。土層記録はなく，出土土器もない。

SD2790

95 次調査区南端部にあり，SD2786 の西約 1m の位置でこの延長線とほぼ並行するように伸びて調査区外へと至る。確認できた延長は 7m，幅 50cm，深さ 20cmほどをはかる。北側の延長線上に SD2791 があるが，わずかに位置がずれることから別個の溝として報告しておく。SX2781 と重複していてこれに後出する。条坊内道路側溝と推定した SD2786 の掘り直し溝の可能性を考えたい。埋土の記録はない。出土土器もなく時期の手がかりはない。

SD2791

95 次調査区の中央南寄りで南北に伸びる溝状遺構。確認延長約 10m，幅 50cm，深さ 10cmほどをはかる。条坊内道路側溝と推定した SD2786 の西側に接して略並行して伸びることから，この掘り直し溝の可能性を考えたい。埋土の記録はない。出土土器には須恵器・土師器の小片がわずかにあり，時期が判断できる遺物は 8 世紀代に収まる。

SD2797

95 次調査区出土の溝 SD2790 の西側約 6m の位置で，これと並行して伸びる小溝。確認延長は約 7m，幅 40cm，深さ約 5cmをはかる。条坊内道路側溝と推定した SD2786 の掘り直し溝と考えたい。埋土の記録は残されておらず，出土遺物もない。なお，この溝の西側にさらに細く短い溝状の掘り込みが数条あり，これらも関連する遺構の可能性があろう。

96 次調査出土その他の区画溝

SD2801

96 次調査南区の南東端部で検出された。幅 40cm，深さ 5cmほどできわめて残りが悪い。検出長は 10m ほどで，南側の調査区外に伸びる。埋土の記録はなく出土遺物もない。東に SD2811 が並行して伸びており関連が疑われる。

SD2804

96 次調査南区の南側で検出された。SD2760 の南側に接して始まり，南北に伸びる。ほかに SD2800・SK2803 と切り合うが，前後関係は不明。幅は太いところで 1.5 ～ 2m をはかり，深さは 10cm程度とごく浅いが，底面には段状の掘り込みがいくつか認められ，掘り直しがなされていた可能性もある。土層記録は残されていない。出土遺物はなく時期は不明。

SD2810

96 次調査南区の北側を東西に走る。SD2760 と切り合い，これに後出すると考えられる。また，SK2812，SB2842，SA2869 と切り合い関係を持つが前後関係は不明。幅約 50cm，深さ約 20cmの規模を持ち，東側では削平により延長が不明瞭になる。出土遺物には須恵器・土師器の小片があり，これらから 8 世紀後半～ 9 世紀初頭に位置付けられよう。

SD2811

96 次調査南区の南東端部を南北に走る溝。調査区の東端にあって全体を調査できていない。検出部分での幅 40cm，深さ 10cmほどをはかる。西にある SD2801 とはほぼ並行する。土層記録はない。出土遺物もなく時期は不明。

SD2828

96 次調査北区の南西部で検出された東西溝。SD2818 と切り合い，これより新しい。区画溝 SD2833・2834 と重複し，図面では一体の溝のように表現されているが，相互の関係は不明。幅 40cm，深さ 15cmほどをはかる。出土遺物は須恵器・土師器などがパンケースに 2 箱分ほどあり，新しいものとしては 10 世紀代の坏身があることからこの時期の遺構と考えられる。

133 次調査出土その他の区画溝

SD3921

133 次調査区の東側を南北に略縦断する。北側端部は削平により失われる。検出幅は太いところで 20cmほど，深さは 5cmほどと残存状況は悪い。SB3925・SK3916・SX3919 と切り合うが，新古関係は不明。土層の記録も残されていない。出土土器には須恵器・土師器の小片があり，8 世紀代の資料が多い。

137 次調査出土その他の区画溝

SD3954

137 次調査区中央部で検出した東西方向の小溝である。断続的に約 8m 伸びる。後述 SD3957 と約 6m の間隔を置いてほぼ並行し，条坊内区画道路の側溝の可能性が考えられるが，SD3939 と SD3957 の関係が前述のように交差点とすれば本溝との位置関係に齟齬が生じる。いずれの理解が正しいのか，ここでは結論を出せない。幅は 20cm，深さは 5cm程度と残存状

況は非常に悪い。出土遺物は土師器・須恵器の小片がごく少量で，1 点図示できる蓋坏の形状からすれば 8 世紀代の遺構か。

SD3957

137 次調査区の北西部で検出した東西方向の溝状遺構である。SD3939 と重複するが両者の関係は不明である。既述のように交差点遺構の可能性もある。幅は 40cm，深さは 10cmを測る。県道筑紫野太宰府線の南側から約 50m の位置にあり，条坊区画を分割する条坊内区画道路の側溝の可能性がある。出土遺物には土師器と須恵器の小片があり，時期の判断できる遺物はおおよそ 8 世紀代のものばかりである。

SD4197

165 次調査の東側で確認した南北溝である。調査区を縦断しているが調査区が狭小なため確認延長は 3m ほどしかない。幅約 80cm，深さ約 10cmを測る。SD4121 と切り合い，本遺構が後出する。出土遺物はなく時期は判断できない

165 次調査出土その他の区画溝

SD4219

165 次調査区の西側で確認した南北溝である。検出長は約 2m とごく短い。深さがきわめて浅く，削平により失われたものとみられる。幅は約 50cmを測る。出土遺物はない。

SD4215（PL.35）

166 次調査の東寄りで検出した南北溝である。北側調査区外より南に 17m ほど伸び，それより南側は削平により失われたものか。SD4209・SX4204 と切り合い本溝が後出する。SD4210 とも重複するが新古関係は不明。幅は場所によって異なるが最も太いところで 1m ほど，深さは 30cmほどを測り，溝肩に段が見られるなど複数回の掘り直しの可能性を想起させる形状を持つ。5 坊路側溝の可能性がある SD2840 より西に 45m ほどの位置にあり，略南北方向に伸びることから，西 5 坊 5 条内の区画溝（道路側溝）の可能性がある。出土土器から 8 世紀代の遺構の可能性が高い。

166 次調査出土その他の区画溝

SD4335

175 次調査の東寄りで検出した略南北方向に伸びる溝である。北が東に 10 度ほど振れており条坊内区画としてはやや振れ幅が大きいが，幅が 1m ほどで一定で，深さが 20cmほどあってかなりしっかりした溝であることから，条坊内の何らかの区画溝である可能性を考えここで報告しておく。出土土器は土師器・須恵器を中心に比較的多くあり，おおよそ 8 世紀代の埋没であろう。

175 次調査出土その他の区画溝

SD4543

186 次調査の南東端部で検出した南北溝である。南側調査区外よりやや蛇行しながら北に伸び 6m ほど伸びたところで浅くなって消滅する。幅は最大 35cm，深さは深いところで 15cm ほどを測り，壁が垂直に近く掘り込まれている。SD4542 に切られておりこれに先立つ遺構である。出土土器からは 8 世紀前半代に比定される。

186 次調査出土その他の区画溝

3）その他の溝

その他の溝

SD531

29 次調査の概報において A トレンチで検出した南北溝として報告したが，当時の土層記録

29 次調査出土その他の溝

を見ると表土最下層にあたる水田床土を掘り込んでおり，新しい掘り込みであることが確実であることから，遺構としては取り扱わない。

SD538

29 次調査区 B トレンチで検出した。トレンチの西側を北東から南西に向かってわずかに湾曲しながら横断し，南壁付近で西に屈曲する。6 条路側溝の可能性があるとした SD540 の下層で検出され，これより古い。幅約 1.0m，深さは 60cmほどを測り，埋土は灰色粗砂の単層である。遺物は出土していない。

95 次調査 出土 その他の溝

SD2789

95 次調査区の中央東側を，南東から北西に向かって断続的に伸びて，調査区中央付近で消失する溝状遺構。南東側では幅約 1.5m をはかるが，深さはごく浅く 10cm程度に過ぎない。土層記録は残されておらず，出土遺物もない。SD2785 と重複するが，残された記録からは前後関係が判断できない。

SD2799・2800

95 次調査区の北西端部で自然流路 SD2760 より分岐し，96 次調査南区の南側を北東から南西に直線的に横断する溝状遺構を SD2800 とする。途中，SD2760 に設けられた堰状遺構 SX2815 の南側に掘り込まれた溝状遺構 SD2799 と合流する。SD2799・2800 は 96 次調査南区の中央西側で合流して調査区外へと伸びており，その先は確認されていない。SD2800 は幅 1m，深さ 60cmを測り，SD2799 はこれよりやや細く浅い。両溝の切り合い関係は確認されず，同時期の溝の可能性が高い。出土土器はほとんどなく，時期は不明だが，自然流路の項で報告する SD2760 とその中に設けられた堰状遺構 SX2815・2816・2844 との関係が深い遺構であることは明らかであり，これらの所属時期である弥生時代後期に比定できよう。

96 次調査 出土 その他の溝

SD2808

96 次調査南区の西側で検出された。北西から南東に直線的に伸びる溝で，幅 40cm，深さ 20cmほどをはかる。土層の記録はない。SD2809 と重複するが前後関係は不明。出土遺物は須恵器の小片が 1 点あるのみで，時期の判断は困難である。

SD2809

96 次調査南区の東側で検出された溝。蛇行しながら略東西方向に 5m ほど伸びる。SD2808 と重複するが前後関係は不明。幅 1m，深さ 30cmほどをはかる。土層の記録はない。出土遺物はなく時期は不明。

SD2817

96 次調査北区の南側をやや蛇行しながら東西方向に伸びる。SD2818 に切られる。SD2760・2828・2833・2836・2840 等多くの遺構と切り合い，少なくとも SD2760 より新しく 2832 よりは古いようである。幅は場所によって異なるがおおよそ 2m 前後，深さは 60cmほどとやや深い。出土遺物には土師器・須恵器の小片がビニール袋 2 袋ほどあるが図示できるものはない。底面に板圧痕を持つ土師器皿などが散見されることから 10 世紀代の遺構とみたい。

SD2818

96 次調査北区の南側を東西に走る SD2817 の上層に掘り込まれた小溝。延長 2m ほど，幅

40cm，深さ 50cmほどをはかる。土層記録はない。出土遺物には黒色土器や陶磁器などがあり，中世の遺構か。

SD2819

96 次調査北区の南西部で検出された溝。東西に 10m ほど伸び，直角に屈曲して南に 5m ほど伸び，SD2817 と切り合う形で消滅するが，両者の前後関係は不明。SX2837 に西側を大きく破壊される。このほか SD2840 とも重複するが相互の関係は不明。幅 30cm，深さ 5cmほどをはかる。土層記録はない。出土遺物には土師皿や黒色土器，青磁の小片などがあり，中世の遺構か。

SD2836

96 次調査北区の南西隅部から，湾曲しつつ北東に伸びる小溝。SD2817 と重複するあたりで延長がわからなくなる。幅 30cm，深さ 10cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

SD2843

96 次補足調査区の東端部を略南北に伸びる。中途で一度途切れるが検出総延長は 36m ほどに及ぶ。幅 30 から 40cm，深さ 15cmほどをはかる。北側がやや強く東に振れる。SB2820・SK2841 と切り合い，これに後出する。出土土器はなく時期は不明。

SD3922 133 次調査 出土 その他の溝

133 次調査区の西側を蛇行しながら東に伸びる小溝である。SB3925・SK3924・SX3919 と重複するが新古関係は不明である。溝幅は 30cmほど，深さは 5cm程度とごく浅い。検出長は 1.5m ほどで，SX3919 より東側は確認できない。出土遺物はなく時期は不明。

SD3941（Fig.19 － 3） 137 次調査 出土 その他の溝

137 次調査区の南端を蛇行しながら略東西方向に流れる溝である。SD3944 と切り合うが前後関係は不明。整地層上面から掘り込まれた SD3939・SB3940 と切り合い，これらに先行する。本溝の上層を整地層が被覆していることから，8 世紀の広域整地に先行する遺構であることが確実で，整地の時期を考えるにあたり重要な遺構である。溝幅は東から西に向かって徐々に太くなり，1 ～ 3m 程度，深さは 20cm程度を測る。埋土は灰色シルト質土，埋土中からは土師器・須恵器の小片が少量出土しており，7 世紀代の後半に位置づけられる資料が散見される。

SD3944

137 次調査区の中央南側を，やや湾曲しながら略南北に流れる溝状遺構である。幅は 40cm，深さは 10cm程度を測るが，幅は各所で膨らんでいて一定ではない。SD3939 と略並行しており，区画溝としてもいいかもしれないが，わずかに湾曲していること，延長が短いことなどからその他の溝として位置づけておく。出土土器には土師器・須恵器の小片が散見され，8 世紀代の遺物が多い。

SD3949

137 次調査区の西側を略南北に走る溝である。南北端部はいずれも斜め東方向へ明瞭に屈曲して伸びる。SD3957・SB3940 と重複し，これを切る遺構か。幅 40cm，深さ 20cmほどをはかる。出土遺物はない。

SD3994 142 次調査 出土 その他の溝

142 次調査区の西端部で検出した。SB3998 と切り合い，これに先行する。湾曲しながら南

東に 4m ほど伸び，浅くなって消滅する。幅約 60cm，深さ 10cmほどをはかる。出土遺物はない。

SD4001A

142 次調査区の南東隅から，西に向かって大きく湾曲しながら伸びる。SE2845 に切られておりこれに後出する。SD4004 と重複するが前後関係は不明。幅 60cm，深さ 20cmほどをはかるが，幅は変化が激しい。SD4004 と重複する箇所の東側で中途で二股に分かれており，北側を西に伸びる方を SD4001B とする。また，SE2845 と重複する箇所の西側で弧状に湾曲する溝と接合しており，この弧状溝を SD4001C とする。出土遺物はない。

SD4001B

142 次調査区の南を，略南東から北西に向かって曲がりながら伸びる溝。約 16m 西北西に向かって伸び，SD4004 と交差する地点で消滅する。幅は比較的変化が少なく，約 80cmを測る。深さは 15cmほどでごく浅い。出土遺物はない。

SD4001C

142 次調査区の南端部で検出した。SE2845 の西側で SD4001A より分岐し，大きな弧状を描きながら東に伸びる。東端部は南に向いて SD4007 と重複しており，その先は調査区外に至る。SB3995 と重複しており，本溝が先行する。出土遺物には土師器の小片が多く，古墳時代中～後期に位置づけられようか。

SD4004A

142 次調査区の南西コーナー部付近から北東に向かって伸び，中途で大きく屈曲して東南東に向かい，さらに屈曲して南に下り，調査区外へと伸びる。中途で SE2845，SD4001A・B などと重複するが先後関係は不明。SD4005 と切り合い，本溝が先行する。調査区の中央付近で東に SD4004B 溝が派生する。溝の幅はもっとも太い調査区西端部付近で約 3m をはかるほかは平均 1m ほど，深さは 30cmほどを測る。出土遺物はなく時期は不明。

SD4004B

142 次調査区で検出した。上述のように，SD4004A より派生して西側に伸びる溝状遺構である。中途で大きく屈曲して南に向かい，SD4004A と切り合う。切り合い関係では本溝が後出しており，溝の付け替えあるいは流路の変更で生じた遺構の可能性もあろう。溝の幅は約 1m，深さは 10cmほどを測る。出土遺物はなく時期は不明。

SD4005

142 次調査区の西側から東に向かって伸び，中途で明瞭に屈曲して北東に進路を変更する溝状遺構である。溝の幅は西側が特に太く最大 2m 以上をはかるのに対し，北東部ではごく細くなり 30cmほどとなる。深さは 20cmほどである。出土遺物には土師器・須恵器の小片がビニール袋 1 袋ほどあり，図示できる資料はないが 8 世紀代に比定できようか。

SD4007

142 次調査区の最南端で検出した東西方向の落ち込みである。調査区内では北側の肩しか検出できなかったが，東側の延長方向に隣接する 96 次調査北区で検出された SD2817 と整合する位置にあたり，SD2817 と同一遺構である可能性が考えられるが，直接的につながる確証が得られておらず，ここでは一応別個の遺構として報告しておく。幅は調査区内で 60cm以上，深さは 15cm程度を調査した。SD4001C と重複するが新古関係は不明。出土遺物は土師器の小

片ばかりビニール袋２袋ほどあるが時期の判断できる資料に欠ける。

SD4201

166 次調査
出　土
その他の溝

166 次調査区の南東隅で検出した南北小溝である。湾曲しながら調査区外から北に向かって 6m ほど伸び，消失する。幅は最も広い南端部で 1.5m，深さは 5cmときわめて浅い。出土遺物には須恵器・土師器の小片があり，最も新しい遺物は 10 世紀代に位置づけられる。

SD4203

166 次調査区の東端部南寄りから西南西に 2m ほど伸びる小溝である。幅 30cm，深さ 15cm と小規模な遺構である。出土土器には須恵器・土師器の小片があり SD4201 と同様 10 世紀代の埋没とみられる。

SD4206

166 次調査区の中央北寄りで検出した略南北方向に伸びる小溝である。SD4209 と切り合い，これに後出する。幅は 70cm，深さ 15cmを測り，検出長さは 6m ほどである。出土遺物には 8 世紀代の須恵器坏身がある。

SD4210

166 次調査区北寄りで東南東から西北西に向かって調査区を横断する幅の細い溝である。西寄りでは削平を受けてほとんど消失しており断続的に伸びる。東寄りでの検出規模は幅 40cm，深さ 10cmほどである。SD4209 と切り合いこれに後出する。

SD4330

175 次調査
出　土
その他の溝

175 次調査区の南部で検出した。西北西から東南東に調査区を横切るが削平されており 4.5m ほどを調査したのみである。東側の延長線上に 166 次調査 SD4210 があり，同一の溝の可能性が高い。規模は検出幅最大 80cm，深さはごく浅く 5cmほどである。SD4347 と切り合い本溝が先行する。出土遺物には土師器・須恵器の小片があり，断面が細長い高台を持つ椀がある。9 ～ 10 世紀代の遺構であろう。

SD4345（Fig.46，PL.41）

175 次調査区の南端部で検出した東西方向の溝である。幅約 5m，深さ 60cmをはかりかなり大規模な溝状遺構である。断面形状は逆台形，溝の底面は凹凸があるものおおよそ平坦であ

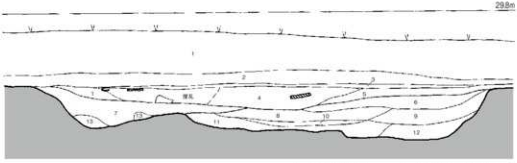


Fig.46　溝 SD4345 土層図（1/40）

る。埋土は砂層を主体とし，複数回の溝浚いの可能性を想起させる堆積状況を示す。遺物は上層4層を中心に8世紀代後半頃の土師器・須恵器が多量に出土しており，炭化物が多く共伴する出土状況であった。概報では溝の埋没が進行した段階で窪地状の溝に一時期に一括投棄された可能性が示されている。東側に隣接する166次調査区では，本溝の延長線上に古墳時代前期の埋没とされるSD4209自然流路がある。SD4209の埋土記録がないため両者を比較することは難しいが，本溝から出土した古代の遺物が最上層に集中することからすれば，中層以下が古墳時代前期頃の埋没であり，本溝における最上層が隣接調査区では削平等により失われていた可能性も考慮に値しよう。ただし，概報では本溝の東側を確認するため調査区東隣に重機でトレンチを入れたが延長を確認できなかったとしている。やや理解に苦しむところではある。

186次調査出土その他の溝 **SD4544**

186次調査区の南側で断続的に検出された溝状遺構である。やや蛇行気味に略南北に伸びる。概報では，南側の95次調査SD2785と同一の遺構である可能性も示唆されているが，深さが5～10cm程度ときわめて浅く形状が不安定で断言できない。SK4546を切り，SK4559・SD4542に切られる。切り合い関係から8世紀代の遺構とみられる。

流路 4）自然流路

96次調査出土流路 **SD2760**（Fig.19・47，PL.8・16）

96次補足調査区の東側より，96次北調査区を経由して96次南調査区の西側へと蛇行しながら流れ出る大溝状の遺構である。途中，95次調査区の北端をかすめつつ西流する大溝と96次南調査区の北東端部付近で合流する。両者を合わせSD2760として報告する。幅は細いところで3mほど，太いところでは10m程度にまで広がる。溝埋土は大きく上層と下層に2分され(Fig.18)，上層は砂質土を主体としていて若干の弥生時代遺物を包含する。下層は粘質土やシルト質土を主体とし，中央最下層にあたる15層を除き遺物は出土しない。溝の中心部を一段掘りくぼめたような状態で堆積する15層からは，ローリングを受けた弥生土器が少量出土している。96次調査北区では，溝を横断するように杭列が配されていた。これを堰状遺構SX2816として報告する。また96次調査南区で溝幅がもっとも拡大した部分からもやはりシガラ状に杭を配した遺構が検出されており，これを堰状遺構SX2815として報告する。両者の中間にあたる96次南調査区北側では，西岸より溝底部中央に向かって段状に下がりながら降りていく階段状の遺構が出土しており，これを階段状遺構SX2844として報告する。

堰 **SX2815**（Fig.47・48，PL.16）

自然木や加工材を用いて，流路に対しておおよそ直交方向に配置された堰状遺構である。堰状遺構は，流路が大きく湾曲する内側に流路に直交して配されたA列と，この南端より折れて南西方向にまばらに配されたB列からなる。いずれも上部は流出しており，検出した時点で溝の床面より上に約20cm程度が遺存するのみであった。遺存状況のよいA列を詳しく見ると，上流側のA1列と下流側のA2列の2つの配列が認められる。上流側のA1列は，中央部が下流側に膨らむ弧状を描きながら角杭や丸杭が密に打ち込まれており，杭の頭部は下流側に傾く。水流を受け止める堰の前面部にあたり，水圧により杭が下流側に倒された結果，あるいは水圧を少しでも受け流すために当初より斜めに打ち込まれているものとも考え

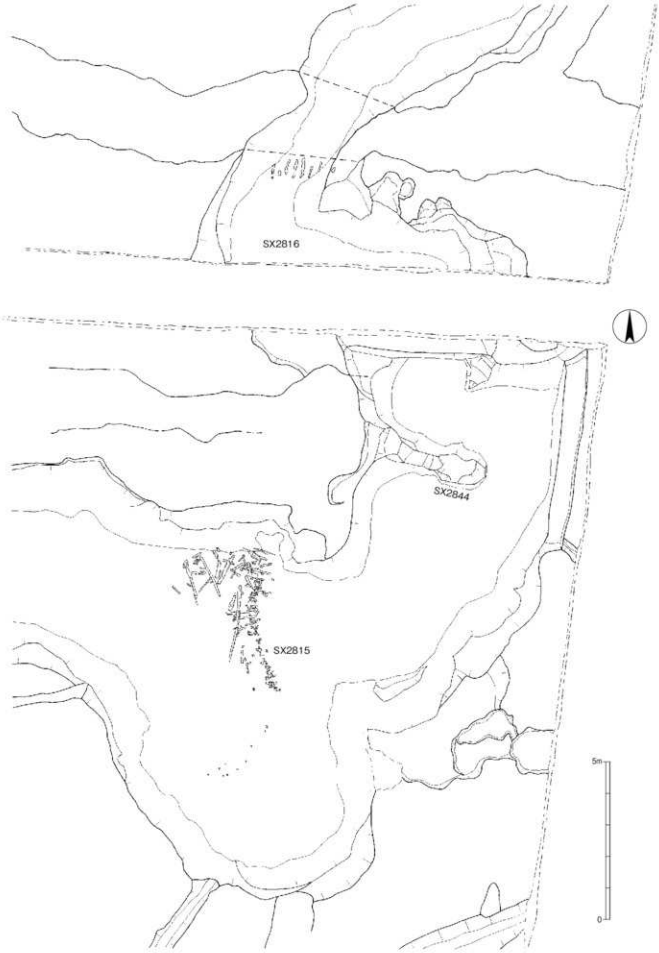


Fig.47　流路 SD2760 中の堰 SX2815・2816・2844 位置図（1/120）

られる。下流側のA2列は，A1列と略平行するように，これよりやや大きめの丸杭・角杭を，直立させながらまばらに打ち込んだもので，A1列を背後から支える機能を持つものであろう。さらに，これらの杭に重なるように長めの丸材が出土しており，両杭列をつないで補強する，あるいは水流をせき止めるための堰本体に用いられたものと考えられる。一方遺存状況の悪いB列は，小ぶりの丸杭が使用されていること，9本しか遺存していないことなどから，A列に付帯する施設で堰部付近の流路を固定化するための施設と考えたい。付近がSD2800への取水口にあたることから，SD2800への流入水量を調整するための施設の一部を構成していた可能性もあるが，遺存状況が悪く復原できない。またB列東側の流路が膨らんだ部分については，概報では流路本体より浅いこと，厚い黒色腐植土層が堆積すること，平面形状が流路本体の開析作用により形成されたとはやや考えにくい不自然な形状を持つことなどから，人工的な掘削であって水路SD2800の水口に砂泥が堆積することを防止するための沈殿池と理解されている。なお，両杭列ともに，部材の一部には鋭利な加工痕が認め

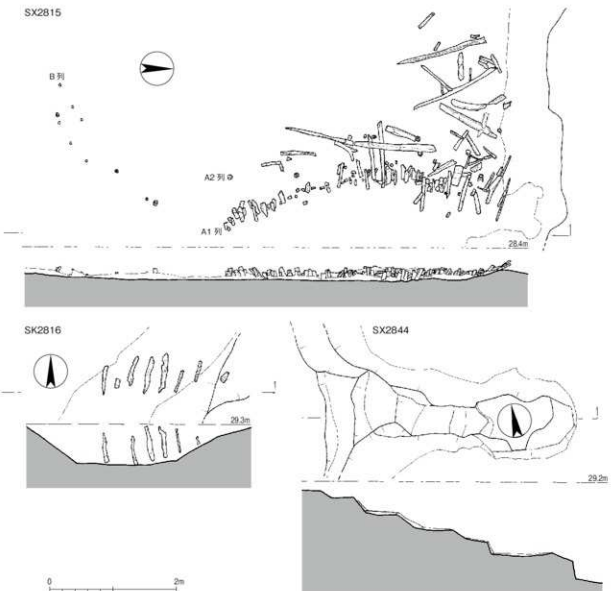


Fig.48　流路SD2760中の堰SX2815・2816・2844実測図（1/60）

られた。

SX2816（Fig.47・48，PL.17）

流路に対しておおよそ直交して配された8本からなる杭列である。最も長いもので約80㎝が遺存する。概報では，調査時には上層遺構SD2817と下層遺構SD2760の切り合い部分の調査が難航したため本杭列がどちらに属する遺構かを判断できなかったとしつつ，この杭列の下端部がSD2760の底面まで達しておらず，また上層遺構SD2817の南岸におおよそ合う位置に配されていることから，上層遺構SD2817の護岸遺構として報告された。しかし，本杭列とSD2817南岸の位置はやや齟齬があること，本杭列がSD2760に直交し，直に打ち込まれていることから，SD2760が多少埋没した段階で設置された堰状遺構として報告したい。部材の下部に「コ」字状の仕口を施したものがあり，横材を渡していた可能性が指摘されている。

SX2844（Fig.47・48）

SX2815・2816に挟まれた位置にある，溝西岸から溝中央部に向かって幅40～80㎝，計5段の階段状遺構である。調査時には特にその存在については注目されていなかったようで，特段の記録がないため，この遺構が地山の掘り残しであるのか粘土等を用いて溝斜面に設置されたものであるのかは定かではないが，いずれにしても人工的に作り出された階段状遺構と考えられる。いずれかの堰状遺構の管理のために作られた施設の可能性がある。

SD2879

96次補足調査区の西側から，南西に向かって流れて調査区を横断し，96次調査北区でSD2817と切り合う溝状遺構である。SD2817との切り合い関係は不明。この南の延長も不明である。SA2822・SK2841と切り合い，これらに先行する。96次補足調査の範囲では，検出のみにとどめ掘り下げを行っていない。96次調査北区では完掘していて，幅約1m，深さ20㎝ほどをはかる。出土遺物はない。

SD4002　　142次調査 出土流路

142次調査区で検出した。調査区の中央やや北寄りを，南東から北西に向かって斜めに横断する浅い溝状遺構である。幅約2m，深さ約20㎝で，一部がやや深くなる。やや蛇行しており太さも変化する。西側は一部の検出にとどめ掘り下げていない。SD4005と切り合い，本溝が古い。出土遺物はなく時期は不明。

SD4121　　157次調査 出土流路

157次調査区を北西から南東に向かって斜めに横断する溝状遺構である。溝の肩が不規則に凹凸を持ち，複雑な段状になっており，人工的なものではなく自然流路の可能性が高い。断面はゆるやかなV字状を呈し，幅は太いところで約3m，深さは40㎝ほどを測る。土層断面の略図が残されており，それによれば埋土は大別2層で下層が灰色砂層，上層が黄茶色砂質土からなるという。他遺構との切り合い関係では，SD4118と切り合いこれに先行することが残された土層略図より読み取れるほか，SK4129，SD4123より古い。出土土器には土師器・須恵器の小片があり，報告時には古墳時代を下限とするとされていたが，整理したところ10世紀代の遺物が散見される。SD4118・SD4123等の条坊道路側溝の可能性のある溝の時期を把握する上で重要な遺構である。

166 次調査
出土流路

SD4209（PL.36）

166 次調査区の北側を南北に横断する溝状遺構である。形状は大きくゆがんでおり最も幅の広い中央部付近で約 4m，幅の狭い西端部では 1m ほどをはかる。深さは 40cm程度である。SD4206・4210・4215 等の遺構に先行する。出土土器から古墳時代前期頃までに埋没したものと推測される。

SD4224

167 次調査区の西側で検出した弧状溝である。西側の調査区外から南東に向かって伸び，緩やかに西に湾曲して再び西側調査区外へと伸びるが，南端部は削平により失われる。SA4225 と切り合い本溝が先行する。幅はやや不安定だがおおよそ 60cm程度，深さは 5cmときわめて浅い。出土土器はなく時期は不明。

175 次調査
出土流路

SD4332

175 次調査区東端で整地層の下層を確認するために設定したサブトレンチの南端で検出した不定形の溝状遺構である。検出長はトレンチ幅に制限され 1m ほどしかなく全容は不明。

186 次調査
出土流路

SD4542（Fig.49）

186 次調査の南側を北東から南西に蛇行しつつ横断する溝状遺構である。幅は東側が太く約 2.7m，西側では 0.8m になる。深さはおよそ 35cmを測る。肩部や底面には多くの段や凹凸が見られ流水で浸食された状況を示す。出土遺物には土師器・須恵器のほかに多量の鉄滓（椀形滓を含む）や鞴羽口などが出土している。出土遺物から埋没は 8 世紀後半代とみたい。

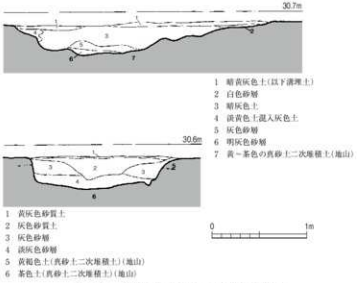


Fig.49　流路 SD4542 土層図（1/40）

土　　坑（6）土坑（Fig.50）

広丸地区の各調査区からは，様々な形状の掘り込みを検出した。それらの掘り込みのうち，その形状などからある程度性格が推測できるもの（井戸・土壙墓など）もあるが，中には何のために掘削されたのか判断が付かない掘り込みも多くある。ここでは，こうした掘り込みのうち，粘土採取のために掘られた可能性がある採土遺構や，不定形で浅い落ち込み状のものを除く遺構について，土坑として報告する。

土坑の平面形状は円形を呈するものから不定形のものまで様々で，深さも 5cm程のものから数 10cm程度の深さを持つものまでがみられる。遺物を多く包含し，廃棄土坑と考えられるものもあるが，その多くは性格を判断できる材料が不足している。

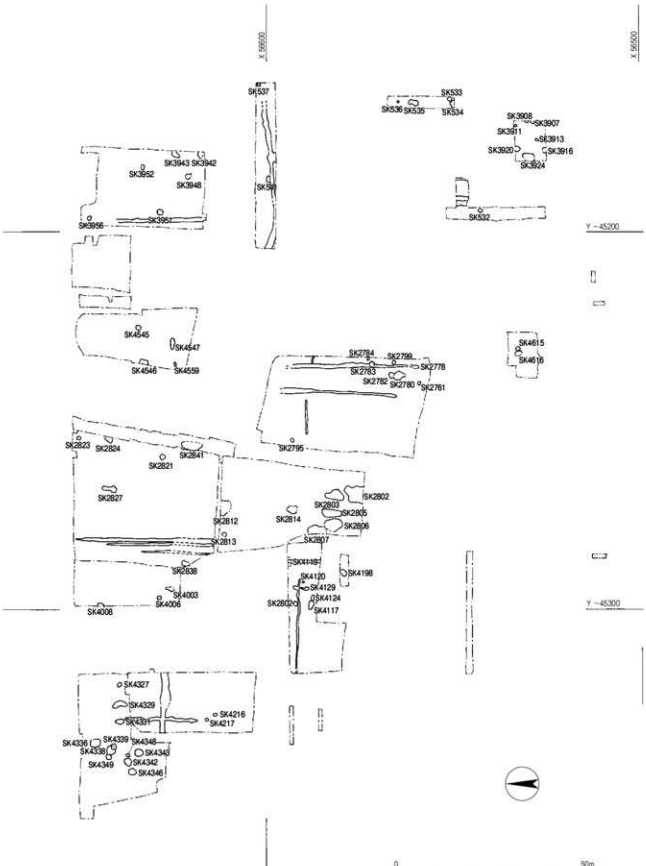


Fig.50　広丸地区出土土坑配置図（1/1,000）

29 次調査
出土土坑

SK532（Fig.51）

29 次調査 A トレンチの中央やや北寄りで検出した。南側で SD530 と一部重複しているが先後関係は不明。平面形状は不整隅丸 5 角形状を呈し，規模は長軸 1.15m，短軸 1.05m ほどをはかる。床面はフラットで，遺存深さは 20㎝程度である。出土遺物はない。

SK533（Fig.51，PL.6）

29 次調査 C トレンチ南端部で検出した。平面形状は不整円形で南東部が一部張り出しており，規模は長軸 1.4m，短軸 1.25m ほどをはかる。床面にはいくつかの段が認められ，遺存深さは最も深いところで 40㎝ほどとなる。調査時には西に接する SK534 と同一遺構として調査しているため出土遺物は区別して取り上げられていないが，SK533・534 出土遺物としては 8 世紀代の土師器・須恵器がある。

SK534（Fig.51）

29 次調査 C トレンチの南端部で検出した。東に SK533 が隣接する。南半部が調査区外に広がっていて全形は不明。北側の一部がサブトレンチ状に掘られているが，図面等に特段記載はなく本来の形状かどうか不明。検出範囲での規模は東西長が 1.75m をはかる。遺存深さは最も深い個所で 30㎝ほどをはかる。

SK535（Fig.51）

29 次調査 C トレンチのほぼ中央部で検出した東西にやや細長い土坑である。中央部西側が大きくくびれる。規模は南北長が 2.8m，東西幅が最大 1.8m ほどをはかる。床面は北側に一段下がった箇所がある以外はおおよそフラットで，遺存深さは 15㎝ほどと浅い。出土遺物には土師器・須恵器がビニール袋 2 袋ほどあり，時期の判断できるものはいずれも 8 世紀代の資料である。

SK536（Fig.51）

29 次調査 C トレンチの北側で検出した。平面形状が不整楕円形状を呈し，壁が直立に近く立ち上がる小土坑である。規模は長軸 0.7m，短軸 0.6m をはかる。床面はフラットで，遺存深さは 25㎝程度である。出土遺物はない。

SK537（Fig.51）

29 次調査 B トレンチの南東隅部で検出した。一部が調査区外に広がっているが全形は不整楕円形状を呈し，規模は長軸 0.9m，短軸 0.8m 程度をはかるものと思われる。床面はおおよそ平坦で，遺存深さは 35㎝ほどをはかる。出土遺物はない。

SK541（Fig.51）

29 次調査 B トレンチ中央やや北寄りで検出した。西側で SD540 と重複しているが先後関係は不明。残存部から推測される平面形状は不整長楕円形状で，規模は長軸 1.7m ほどをはかる。壁が緩やかに立ち上がり皿状を呈する土坑で，遺存深さは最大 30㎝程度をはかる。出土遺物はない。

95 次調査
出土土坑

SK2761（Fig.51）

95 次調査区の南東部で検出した。SX2762・2763 と一部重複するが，先後関係は不明。平面形状は隅丸長方形状を呈し，一見 95 次調査区で多く出土した土壙墓群にも似るが，壁の立ち上がりが緩やかでありここでは土坑として報告しておく。規模は長軸 1.0m，短軸 0.65m を

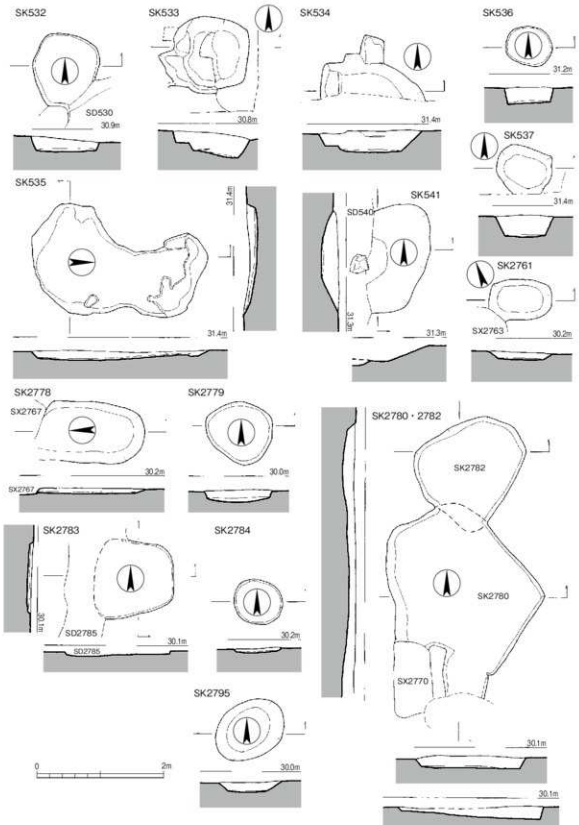


Fig.51　広丸地区出土土坑実測図①（1/60）

はかり，遺存深さは 10cm程度とごく浅い。出土遺物はない。

SK2778（Fig.51）

95 次調査区の南東部で検出した。SX2767 と一部で重複するが，先後関係は不明。平面形状は長楕円形状を呈し，壁はごく緩やかに立ち上がる。規模は長軸推定 1.6m，短軸は 0.95m をはかる。付近に多く検出された土壙墓群と，規模的に類似するが，平面形状や壁の立ち上がりに差異が認められ，ここでは土坑として報告しておく。出土遺物はない。

SK2779（Fig.51）

95 次調査区の南寄り東端で検出した。西に SD2785・SX2771 が隣接するが，切り合い関係はない。平面形状はややゆがんだ円形で，規模は長軸 1.1m，短軸 1.0m ほどをはかる。壁の立ち上がりはかなりきつい。床面は中央がややくぼみ，遺存深さは最大 20cm弱をはかる。出土遺物は土師器と須恵器の小片が数点あり，8 世紀代に比定したいが自信はない。

SK2780（Fig.51）

95 次調査区の南東部で検出した。南側の一部が SX2770・SD2787 と重複するが，先後関係は不明。また北に SK2782 が隣接し，重複しているが先後関係は不明。調査時には SK2782 の範囲まで同一の遺構として調査していたが，報告時に別個の遺構の可能性があると判断したもので，したがって両者の境界部はつながって表現されている。平面形状はゆがんだ多角形状で，規模は長軸推定 2.8m 程度，短軸 2.5m ほどをはかる。床面はフラットで，遺存深さ 20cm 程度である。出土遺物には土師器・須恵器が見られるがいずれもおおよそ 8 世紀代に収まり，この時期の遺構と見られる。

SK2782（Fig.51）

95 次調査区の南東部で検出した。SK2780 の項で述べたように，調査時には SK2780 の一部としていた遺構である。平面形状はゆがんだ多角形状で，規模は南北推定 1.8m 程度，東西も 1.8m ほどをはかる。床面レベルは SK2780 とほぼ同一である。出土遺物は土師器の小片が数点で時期は判断できない。

SK2783（Fig.51）

95 次調査区の南寄り東端で検出した。西側半分ほどが SD2785 と重複しているが，調査時に重複部の形状を記録しておらず，重複部分の形は不明。遺存部から推測される平面形状は不整隅丸方形，規模は 1.3m 四方程度をはかるものか。床面は平坦で，遺存深さはごく浅く 5cm 程度である。出土遺物はごくわずかだが 8 世紀代と考えられる土師器・須恵器の小片がある。

SK2784（Fig.51）

95 次調査区の南寄り東端で検出した。南に SK2783 が隣接するが，他遺構との切り合い関係はない。平面形状はややゆがんだ円形で，規模は長軸 0.8m，短軸 0.7m 程度をはかる。遺存深さはごく浅く 5cm程度，床面は平坦である。出土遺物には 8 世紀代の坏身がある。

SK2795（Fig.51）

95 次調査区調査区の北西部で検出された。北にやや離れて SD2760・2800 が西流するが切り合い関係はない。平面形状はゆがんだ楕円形状で規模は長軸 1.2m，短軸 0.9m ほどをはかり，床面は平坦で遺存深さは 15cmほど，壁の立ち上がりはごく緩く皿状を呈する。出土遺物はごくわずかで土師器・須恵器が見られるが時期の判断は難しい。

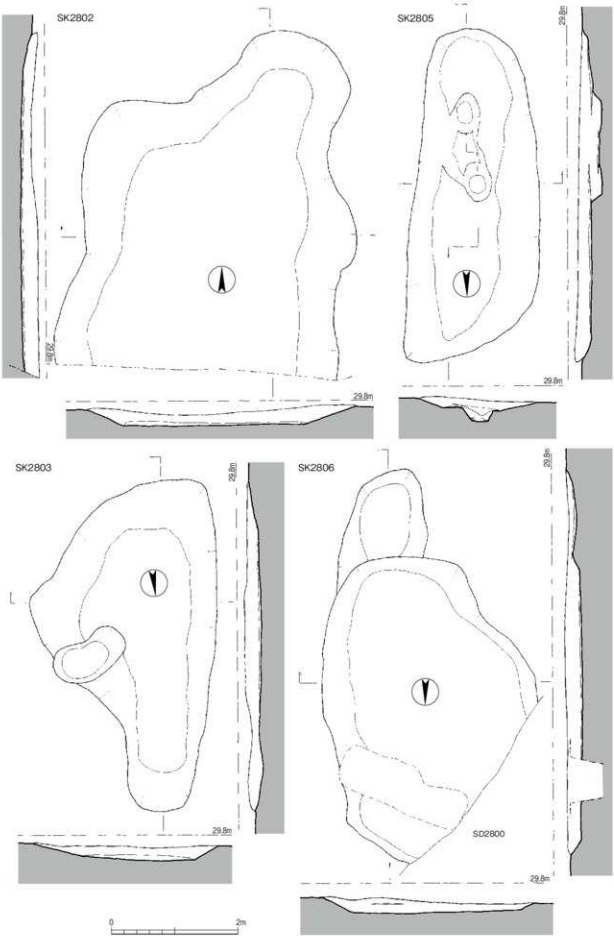


Fig.52　広丸地区出土土坑実測図②（1/60）

SK2802（Fig.52）

96 次調査南区の南端部ほぼ中央部で検出した遺構である。南部は調査区外に広がっており全形は不明ながら，南北方向に長軸をとる不定形の掘り込みである。検出範囲での規模は南北 5.4m，東西 4.5m ほどとかなり大きい。床面はほぼ平坦で，残存深さは 30cmほどをはかる。壁の立ち上がりはごくなだらかである。出土遺物はない。

SK2803（Fig.52）

96 次調査南区の南側で検出した。南に SK2802 が，西に SK2805 が隣接するが切り合い関係はない。SD2804 と重複する位置にあるが切り合い関係は不明。形状は南北に細長い不定形で，規模は長軸 5.3m，短軸 3.0m ほどをはかる。床面はおおよそ平坦で，壁の立ち上がりはごくなだらかであり断面形状は皿状を呈する。遺存深さは 20cm強と浅い。出土遺物はない。

SK2805（Fig.52）

96 次調査南区の南側にある。東に SK2803 が，西に SK2806 が並ぶが，相互に切り合い関係はない。平面形状は南北に細長い不定形で，検出規模は長軸 5.2m，短軸 2.4m ほどをはかる。床面の中央やや北寄りに一段深い掘り込みを持つがそれ以外の床面はおおよそフラットで，壁の立ち上がりはごく緩やかである。遺存深さは掘り込み部で最大 40cm，それ以外の箇所ではおおよそ 20cm程度をはかる。出土遺物はない。

SK2806（Fig.52）

96 次調査南区の南西部で検出した。東に SK2805 が隣接する。SD2800 と重複するが切り合い関係は不明。平面形状は南北に長い不定形で，南に一段高い部分を持つ。規模は長軸 6.2m，短軸 3.4m をはかり，遺存深さは最大 30cmほど。壁の立ち上がりはごく緩やかである。出土遺物はない。

SK2807（Fig.53）

96 次調査南区の西端部で検出した。半分以上が西側の調査区外に広がるものとみられる。SD2800 と重複するが，湧水が激しく十分な調査ができなかったこともあり先後関係は不明。出土遺物からは本土坑が後出する可能性が高い。平面形状は不整形で二つの不整形土坑が重複するようにも見える。規模は検出範囲で長さ 4.9m 以上，幅 1.8m 以上をはかる。床面は大きくみると南・西側が一段深く掘り込まれる二段掘りの様相を呈し，一番深いところで検出面より 60cm強の深さを持つ。出土遺物は土師器・須恵器の小片が数点あるがこのうち時期のわかるものは 6 世紀代の須恵器坏身 1 点のみである。

SK2812（Fig.53）

96 次調査南区の北端部中央付近で検出した。南に SD2810 が一部重複するが先後関係は不明。削平や他遺構による破壊などのほか，北側は大きく調査区外に広がっていることもあり，全体の形状は不明。遺存規模は東西 4.0m 以上，南北 2.0m 以上をはかる。床面は西側が一段深くなっており，最も深い部分の遺存深さは検出面より約 20cmほどをはかる。出土遺物は須恵器・土師器片がビニール袋 1 袋ほどある。図示できる資料はないが，10 世紀代に下る資料が散見される。

SK2813（Fig.53）

96 次調査南区の北端部西側，SD2810 の北側で検出した。不整形の小型土坑で西側を一部

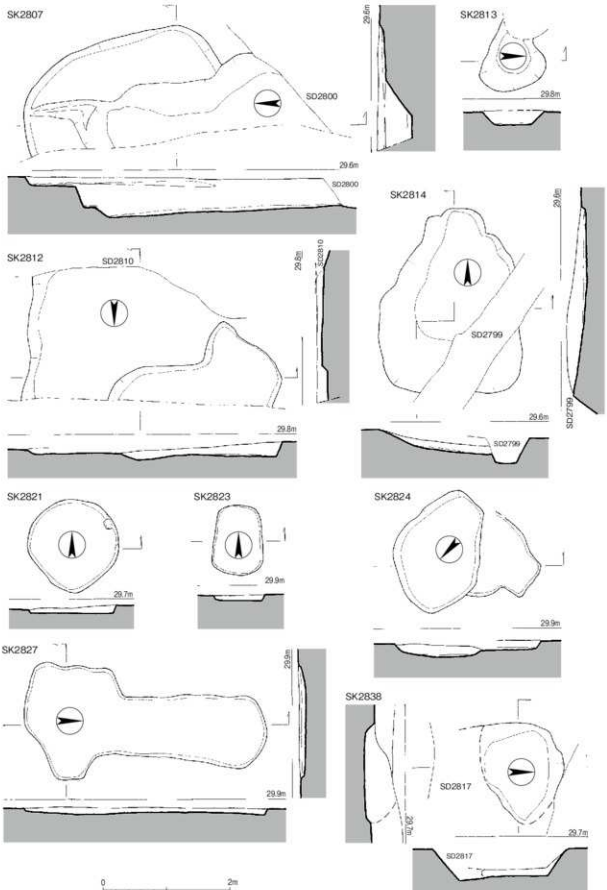


Fig.53　広丸地区出土土坑実測図③（1/60）

破壊されており，規模は長軸 1.2m 以上，短軸 1.0m ほどをはかる。遺存深さは 20cmほどである。出土遺物には土師器のほか灰釉陶器なども見られ 10 世紀代の遺構と考えられる。

SK2814（Fig.53）

96 次調査南区のほぼ中央で検出した。SD2799 と重複するが前後関係は不明。平面形状は不整形で，規模は長軸 2.9m，短軸 2.3m ほどをはかる。壁から床面にかけては緩やかに湾曲しており，遺存深さは最も深い土坑中央部で検出面より約 25cmをはかる。出土遺物はない。

SK2821（Fig.53）

96 次調査北区の東側調査区端部付近で検出した。平面形状はややゆがんだ円形で，規模は直径 1.5m ほどをはかる。残存深さはごく浅く，10cm程度が残されるのみである。出土遺物はない。

SK2823（Fig.53）

96 次調査北区の北東コーナー部付近で検出した。平面形状は隅丸台形状で，規模は長軸 1.1m，短軸 0.85m ほどをはかる。残存深さは極めて浅く約 10cm弱が残されるのみであった。出土遺物はない。

SK2824（Fig.53）

96 次調査北区の北東コーナー部で西側の半分ほどを検出した。また，96 次補足調査において残りの東半分を検出した。示した遺構図は，両調査区の遺構図を合成したものであり，二つの不定形土坑が切り合ったような形を呈しているが，ここでは一つの土坑としておく。西半分の底面が一段高く検出面から 15cmほどで平坦な段を形成しており，東側が一段深く検出面より 20cmほどでフラットな底面を形成している。規模は検出面で長軸 2.4m，短軸 2.0m ほどをはかる。出土遺物はない。

SK2827（Fig.53）

96 次調査北区の中央北寄りで検出した。SB2830 の範囲と重複するが柱穴との直接的な切り合い関係はない。形状は南半が不整五角形状で，北半が溝状を呈するが，底面に段等はなく調査時にも一連の遺構としている。規模は長軸 3.9m，短軸 1.9m，残存深さは 10cmほどをはかる。出土遺物は土師器の小片がやや多く見られ 10 世紀代の遺構か。

SK2838（Fig.53）

96 次調査北区の南西部で検出した。概報では SD2818 を切って掘られたと報告されている。平面図は SD2818 完掘後にその底面にかろうじて残された土坑の形状を示しており，切り合い関係が上記の通りであれば本来の形状は図面として残されていないということになろう。検出範囲での推定規模は長軸 1.6m，短軸 1.4m で，不整楕円形状を呈するものか。残存深さは検出面より約 40cmをはかる。出土遺物には土師器・須恵器の小片が多くみられ，新しいものは中世にまで下るか。

SK2841（Fig.54，PL.20）

96 次補足調査区の南側で検出した。南北に長い不整長楕円形状を呈し，東壁を SD2843 に大きく破壊される。床面はおおよそ平坦で，中央東側の一部が一段下がる。残存規模は長軸が 5.6m，短軸が 4.2m ほどをはかり，遺存深さは約 20cm，中央の一段深い部分で約 35cmをはかる。埋土の記録はない。出土遺物は土師器の小片がやや多く見られ 10 世紀代の遺構か。

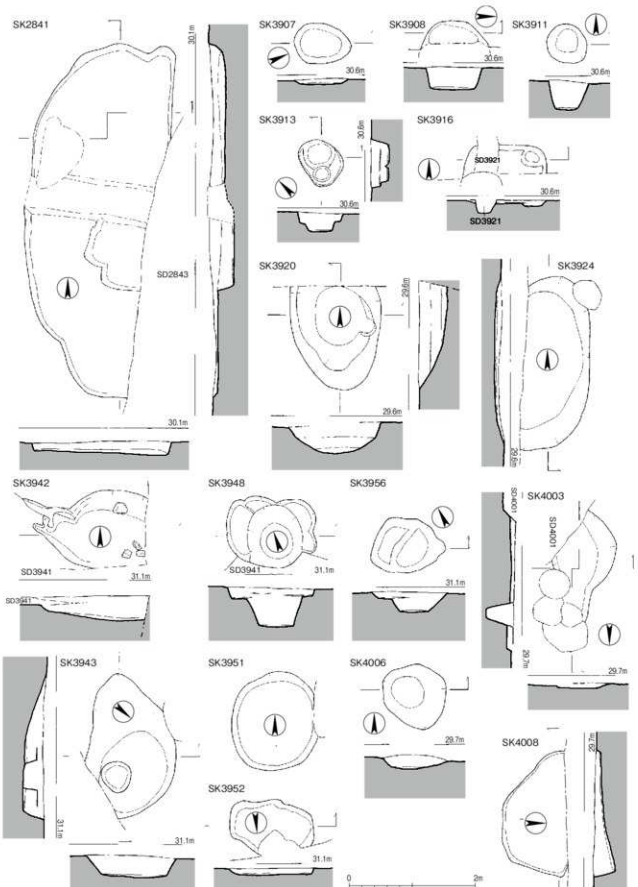


Fig.54　広丸地区出土土坑実測図④（1/60）

SK3907（Fig.54）

133 次調査区の東端部で検出した。平面形状は小型の不整長卵形を呈し，残存規模は長軸 0.9m，短軸 0.55m ほどをはかる。遺存深さはごく浅く 10cmほどで，床面は平坦，壁は緩やかに立ち上がる。埋土の記録はない。出土遺物には土師器の小片があり，10 世紀以降の遺構か。

SK3908（Fig.54）

133 次調査区の東端部で検出した。SK3907 の北に約 1m 離れて隣接する。東側の約半分が調査区外に広がっていて全形は不明。残存部分は不整（半）楕円形状を呈する。検出部分での規模は長軸が 1.1m ほどをはかる。遺存深さはやや深く 30 ～ 35cmほどをはかる。床面は平坦で壁はきつく立ち上がる。出土遺物には土師器・須恵器の小片があり，8 世紀代の遺構とみられる。

SK3911（Fig.54）

133 次調査区の北東コーナー部付近で検出した。平面形状はややゆがんだ円形で規模は直径約 0.65m をはかり，遺存深さは 40cmほどと比較的深い。床面は平坦で壁はややきつく立ち上がる。出土遺物は須恵器・土師器の小片が数点あるが時期の判断はやや困難である。

SK3913（Fig.54）

133 次調査区の中央南寄りで検出した。平面形状は不整楕円形で検出面での規模は長軸 0.75m，短軸 0.6m ほどをはかる。床面は北側が一段深い段掘りになっており，南側にも小ピットが形成されている。両者が一体の遺構というよりは，南側の小ピットが下層遺構の可能性が高いように見受けられるが，土層注記などは残されておらず判断できない。出土遺物はごくわずかだが 8 世紀代の須恵器片が散見される。

SK3916（Fig.54）

133 次調査区の南西コーナー部付近で検出された。南側の半分ほどが排水用のトレンチにより破壊されており全形は不明。SD3921 に西側を大きく破壊される。残存部から推測される平面形状は隅丸方形で，東西幅 1.35m ほどをはかる。床面は北東コーナー部にピット状の掘り込みがあるほかはおおよそ平坦で，残存深さはごく浅く 5㎝程度，一段深い部分は 10cmほどである。出土遺物には土師器の小片がいくつか見られ 10 世紀代の資料が多い。

SK3920（Fig.54）

133 次調査区の北西コーナー部付近で検出した。北側の一部が調査区外に広がっているが残存部分でおおよその平面形状は推測でき，不整長楕円形状を呈する。検出面での規模は長軸 1.6m 以上，短軸 1.45m をはかる。床面は中央が深くくぼむ半球形状で，一番深い部分の深さは約 50cmをはかる。出土遺物には 8 世紀代の土師器・須恵器ばかりで，この時期の遺構とみたい。

SK3924（Fig.54）

133 次調査区の西側で検出した。調査区の西側に半分弱が広がっていて全形は不明ながら，検出範囲で確認できた形状から平面形は不整長楕円形状を呈するとみられる。規模は長軸のみ判明し約 2.8m をはかる。遺存深さはごく浅く 5㎝程度。出土遺物には土師器の小片があり，一部に 7 世紀代・8 世紀代にさかのぼる資料もあるが最も新しいものから 10 世紀代の埋没とみたい。

SK3942（Fig.54）

137 次調査区の南東コーナー部で検出した。先後関係は不明ながら SD3941 と重複していて南半の形状が残されておらず，また東側も調査区外に広がっていて全形・規模は不明。東西方向に長軸を持つ不整長楕円形状を呈するものか。残存深さは約 20㎝をはかる。出土遺物には土師器片のほか鞴羽口などもみられる。時期の判断できる資料はない。

137 次調査
出土土坑

SK3943（Fig.54）

137 次調査区の東辺南寄りで検出した。東側の一部が調査区外に広がるがおおよその全形は把握でき不整楕円形状を呈する。検出範囲での長軸は 2.3m，短軸は 1.45m ほどをはかる。床面は大略平坦で，壁は北側と西側が急に立ち上がる一方南側はかなり緩やかな傾斜を持つ。遺存深さはやや深く 35㎝ほどをはかる。出土遺物はない。

SK3948（Fig.54）

137 次調査区の南東部で検出した。SD3941 と重複しておりこれを切る遺構である。形状は，中央に一段深い円形の掘り込みを持ち，北側には数段の浅い広がりを持つやや複雑な形状を呈する。検出面での規模は長軸 1.45m，短軸 1.1m ほどで，中央の円形掘り込みは直径 0.85m ほど，深さ 60㎝ほどをはかる。出土遺物は土師器の小片がわずかにあるのみで時期の決め手はない。

SK3951（Fig.54）

137 次調査区の西側，中央よりやや南で検出した。平面形状は略円形で，SB3945 に切られるほか SD3949 の南端部とも重複するが先後関係は不明。規模は直径約 1.55m をはかる。底面レベルが記録されておらず遺存深さや床面の状況は不明。出土遺物には龍泉窯系青磁があり中世の遺構としたい。

SK3952（Fig.54）

137 次調査区の東側，大略中央部付近で検出した。平面形状は不整形で北側の残りは悪い。規模は長軸が 1.35m，短軸が 0.85m ほどをはかり，床面はほぼ平坦で遺存深さは 10㎝ほどをはかる。出土遺物は土師器・須恵器の小片がごくわずかみられるが時期は判断できない。

SK3956（Fig.54）

137 次調査区の北西部，北側に調査区を拡張した範囲で検出した。不整形の掘り込みで，南東側が一段深い二段掘りの形を呈する。検出面での規模は長軸約 1.2m，短軸約 0.8m，深さは一段目が検出面より約 10㎝，2 段目が約 30㎝をはかる。出土遺物はない。

SK4003（Fig.54）

142 次調査
出土土坑

142 次調査区の南西部で検出した。SB3995 ～ 3997 と切り合い関係にあるが先後関係は不明。南側で SD4001C と重複するが先後関係は不明。平面形状は不整長楕円形状を呈し，長軸は検出状況で 1.8m 以上，短軸は約 1.0m ほどである。遺存深さは極めて浅く 10㎝弱が残る程度である。出土遺物には須恵器・土師器のほか灰釉陶器などもみられる。10 世紀代の遺構か。

SK4006（Fig.54）

142 次調査区の南西部で検出した。SB3996・3997 と重複する範囲にあるが柱穴との直接的な切り合い関係はない。平面形はゆがんだ略円形で直径は 1.0m ほど，床面は狭く壁の立ち上がりがかなり緩やかである。残存深さは 20㎝程度をはかる。出土遺物には土師器・須恵器の小片，緑釉陶器などの土器片のほか，碁石様の小円礫などもみられる。10 世紀代の遺構か。

SK4008（Fig.54）

142 次調査区の西端部，北西コーナー部に近い位置にあり，半分ほどが西側調査区外へと広がる土坑である。形状は不定形で規模は長軸 2.1m ほどをはかり，床面は北側に向かってやや強く傾斜する。出土遺物には須恵器・土師器の小片があるが時期の決め手には欠ける。

157 次調査出土土坑

SK4117（Fig.55）

157 次調査区の中央部で検出した。長軸を東西方向にとる不整長楕円形の土坑である。規模は長軸 2.45m，短軸 1.3m ほどをはかる。壁は比較的きつく立ち上がり，床面はおおよそ平坦で，遺存深さは最大 30㎝弱をはかる。出土遺物はない。

SK4119

157 次調査区の北東部で検出した。SD4118 が調査区北端より北へと伸びる付近で，これを切る形で出土したもので，大部分は北側調査区外へ広がり，またごく浅いくぼみ状の遺構であって平面プランが把握できなかったこともあり，全容は不明である。埋土には炭化物を多く含むほか，土師器・須恵器の小片が少量みられる。出土した土器から中世の遺構と考えられる。

SK4120（Fig.55）

157 次調査区の中央東寄りで検出した。SD4123 の南，SD4121 の北に挟まれた場所にあり，他遺構との直接的な切り合い関係はない。平面形状は略円形，規模は南北 0.6m，東西 0.55m ほどをはかり，遺存深さは 15㎝ほどである。出土遺物には完形を含む土師器片がまとまってみられ，これらよりおおよそ 10 世紀中頃の遺構と判断される。

SK4124（Fig.55）

157 次調査区の中央南側で検出された。西に SK4117 が隣接するが切り合い関係はない。また北には SD4121 があるがこれとも切り合わない。平面形状は不整長楕円形状で長軸を東西方向に持ち，規模は長軸 1.8m，短軸最大 0.8m ほどをはかる。遺存深さはごく浅く 10㎝弱程度である。出土遺物には土師器の小片がわずかにある。10 世紀代のものであろうか。

SK4125（Fig.55）

157 次調査区の中央北端で検出した。南に SD4123 があってごく一部が重複するが先後関係は不明である。平面形状は不整楕円形状で，規模は長軸 1.3m，短軸 1.05m ほどをはかる。遺存深さはごく浅く 10㎝程度である。土師器の小片がごくわずか出土しており，10 世紀代の遺構とみられる。

SK4129（Fig.55）

157 次調査区の中央やや西寄りで検出した。SK4120 の南西に位置するが切り合い関係はない。平面形状は不整形で規模は長軸 60㎝，短軸 35㎝程度とごく小さい。遺存深さは 20㎝程度をはかる。出土遺物には土師器坏数点がある。ごく小さな破片で時期を明確に判断できるとは言いがたいがおおよそ 10 世紀代に比定できようか。

165 次調査出土土坑

SK4198（Fig.55）

165 次調査区の中央やや東寄りで検出した。半分ほどが北側調査区外に広がっており全形は不明ながら，長軸方向を南西―北東にとる不整長楕円形の土坑となるか。規模は検出範囲で長軸 2.3m，短軸 1.6m ほどをはかる。床面はほぼ平坦で壁はやや斜めに立ち上がり，遺存深さは最大 30㎝程度をはかる。出土遺物はない。

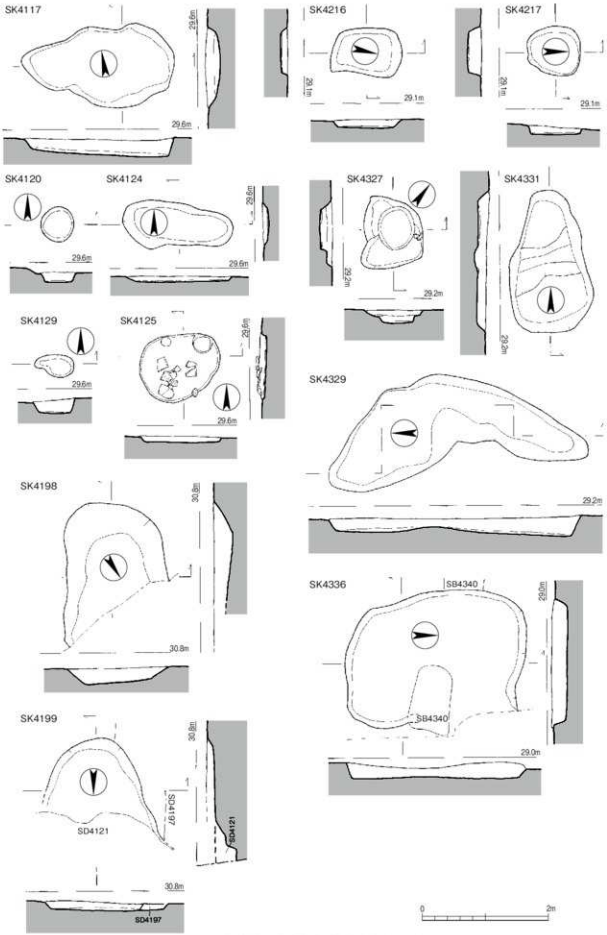


Fig.55　広丸地区出土土坑実測図⑤（1/60）

SK4199（Fig.55）

165 次調査区の東端で検出した。SD4121・4197 の上層より切り込む土坑である。北側調査区外に広がっていて全形は不明ながら，長軸を略南北にとる不整長楕円形状の土坑か。規模は検出範囲で長軸 2.0m，短軸 1.5m ほどをはかり，遺存深さは 10㎝程度と浅い。埋土中には炭化物を含むほか，ビニール袋 4 袋ほどの土師器片が出土しており，これらの資料から 10 世紀中～後葉代の遺構と考えられる。

166 次調査 出土土坑

SK4216（Fig.55）

166 次調査区の中央南西寄りで検出した。南に SX4207 が，北西に SK4217 があるが切り合い関係はない。平面形状はややゆがんだ隅丸長方形で，規模は長軸 1.15m，短軸 0.75m ほどをはかる。遺存深さはごく浅く 10㎝強である。出土遺物はない。

SK4217（Fig.55）

166 次調査区の中央南西寄りで検出した。南東に SK4216，南西に SX4212 が隣接する。平面形状は不整円形で規模は長軸 0.85m，短軸 0.75m ほどをはかる。遺存深さはごく浅く 15㎝程度である。出土遺物はない。

175 次調査 出土土坑

SK4327（Fig.55）

175 次調査区の南東部で検出した。平面形状は不整隅丸方形で，規模は長軸 1.2m，短軸 0.95m ほどをはかる。床面は中央が一段下がる二段構造となっており，遺存深さは最深部で 20㎝ほどをはかる。出土遺物は須恵器の甕の胴部片が 1 点あるのみで時期は判断できない。

SK4329（Fig.55）

175 次調査区の西側南寄りで検出した。SB4340 の南東部と一部重複しており，その東側廂柱穴のうちの 1 本を破壊していて，これに後出する遺構である。平面形状は略「く」字状の不整形で，長軸は 4.3m ほどをはかる。遺存深さは北部がやや浅く 20㎝ほど，南部は 30㎝ほどをはかる。出土遺物には土師器・須恵器の小片がわずかに見られ，時期の判断できるものとしては 8 世紀代の資料がある。

SK4331（Fig.55）

175 次調査区の西側南寄りで検出した。SK4329 の西側に並んでいるが切り合い関係はない。SB4340 の南東部と一部重複しており，その南側廂柱穴を一部破壊することから，これに後出する遺構であることがわかる。平面形状は不整長楕円形で規模は長軸 2.25m，短軸 0.85m をはかる。床面は中央部が一段下がっており検出面からの深さは 20㎝ほどをはかる。他の場所は 15㎝ほどの深さである。出土遺物はない。

SK4336（Fig.55，PL.41）

175 次調査区の中央北寄りで検出した。東壁の一部を攪乱により破壊される。SB4340 の西側身舎・廂柱穴を破壊しておりこれに後出する遺構である。平面形状はゆがんだ大型の隅丸長方形で，規模は長軸 2.8m，短軸 2.0m ほどをはかり，残存深さは 20㎝程度と浅い。出土遺物には青磁のほか須恵器・土師器の小片がやや多く見られ，これらより 10 世紀頃の遺構と考えられる。

SK4338（Fig.56，PL.43）

175 次調査区のほぼ中央部で検出した。SB4340 の西側廂柱穴列と重複し，これを完全に破

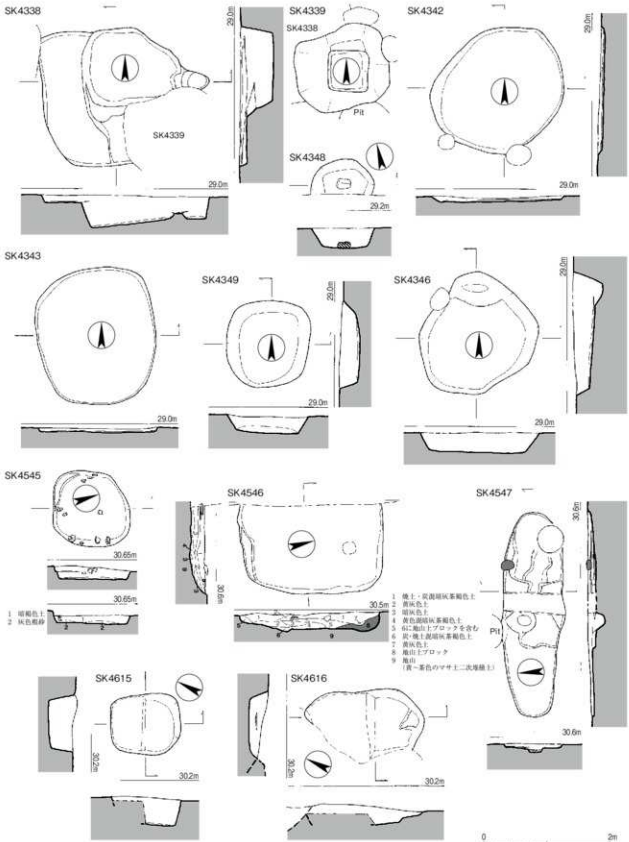


Fig.56　広丸地区出土土坑実測図⑥（1/60）

壊していることから，これに後出する遺構と判断できる。また西側で壁の一部が SK4349 に，東側を SK4339 により大きく破壊されている。平面形状は不整隅丸方形状を呈し，西側・南側が一段浅い段を形成している。規模は長軸 2.3m，短軸 2.2m ほどをはかり，遺存深さは最も深い部分で 50㎝ほどをはかる。出土遺物には土師器の小片がやや多く見られ，10 世紀代前後の遺構とみられる。

SK4339（Fig.56，PL.43）

175 次調査区のほぼ中央部で検出した。SB4340 の柱穴を一部破壊しており，これより新しい遺構である。また，SK4338 の南東部を大きく破壊しており，これにも後出する。検出面における平面形状は隅丸長方形状を呈し，規模は東西 1.4m，南北 1.05m ほどをはかる。中央部が方形に一段深く掘り込まれており，最深部の深さは検出面より 70㎝ほどをはかる。出土遺物には染付の小片が 1 点見られるほかは青磁片・土師器片などで，9 ～ 10 世紀代の遺構であろうか。

SK4342（Fig.56，PL.41）

175 次調査区の中央やや南西寄りで検出した。南に SK4348・SX4344 が隣接する。平面形状はゆがんだ円形で規模は長軸 2.0m，短軸 1.9m ほどをはかり，遺存深さはごく浅く 10㎝弱である。出土遺物には土師器・須恵器の小片があり，これらから 9 ～ 10 世紀頃の遺構とみられる。

SK4343（Fig.56，PL.41）

175 次調査区の南側で検出した。平面形状は南北に長い楕円形で，長軸 2.2m，短軸 1.95m ほどをはかる。遺存深さは 5㎝程度と極めて浅く，床面は平坦である。SK4342 と類似する遺構である。出土遺物には土師器・須恵器の小片があり，新しいものは 9 ～ 10 世紀代のものを含む。

SK4346（Fig.56）

175 次調査区の南西寄りで検出した。西に SK4342 が，南に SX4344 が隣接するが切り合い関係はない。平面形状は不整多角形で，規模は長軸 1.95m，短軸 1.9m ほどをはかる。北側に一段深く掘り込まれた部分があり深さ 45㎝程度をはかる。そのほかの床面はおおよそフラットで 30㎝ほどの深さをはかる。出土遺物は 8 ～ 10 世紀代の須恵器・土師器がビニール袋 3 袋分ほど出土している。

SK4348（Fig.56）

175 次調査区の南西部で検出した。SX4344 に南側を大きく破壊されていて全形は不明ながら，遺存部から推測すれば不整楕円形となるか。規模は東西幅のみ判明し約 1.0m をはかる。床面はおおよそ平坦で中央に角礫が埋置されていた。深さは 30㎝ほどをはかる。出土遺物には須恵器・土師器の小片が見られ，8 世紀代の遺構と考えられる。

SK4349（Fig.56）

175 次調査区の中央やや西寄りで検出した。東に SK4338 があって一部を破壊している。平面形状はゆがんだ隅丸長方形状で，規模は長軸 1.4m，短軸 1.3m ほどをはかる。床面はおおよそ平坦で深さは 30㎝ほどをはかり，壁はやや緩やかに立ち上がる。出土遺物には須恵器・土師器の小片があり，新しい資料は 9 ～ 10 世紀代に下るものが見られる。

SK4545（Fig.56，PL.49）　186 次調査 出土土坑

186 次調査区の中央東側で検出した。平面形状はややゆがんだ隅丸方形状を呈し，規模は長軸 1.20m，短軸 1.15m ほどをはかる。床面はほぼ平坦で深さは 20cmほどをはかる。図示したように，壁面に並べるように瓦片が出土しているがその性格は明らかにできなかった。出土土器には須恵器・土師器の小片があるがいずれも 8 世紀代の資料である。

SK4546（Fig.56，PL.49）

186 次調査区の西端部で検出した。西側が大きく調査区外に広がっており本来の形状・規模は不明だが，南北 2.3m ほどをはかる隅丸方形状を呈するものか。深さは平均して 30cm程度であるが床面には凹凸がみられる。土層では数回の掘り直しの痕跡の可能性も認められ，小鍛冶関連の鉄滓・炉壁片・羽口なども出土することから，廃棄土坑の可能性が考えられよう。このほかの出土遺物としては土師器・須恵器がある。須恵器の多くは 8 世紀代の資料であるが土師器の中に 9 世紀以降のものがあり，埋没はこの頃に下るものであろう。

SK4547（Fig.56）

186 次調査区の南側中央部で検出した。SB4553 に切られ，SD4542 を切る。東西に細長い土坑で平面形状は長楕円形状を呈し，規模は長軸 3.2m，短軸 0.95m ほどをはかる。床面はピット・段状の掘り込みが複雑にあり，最も深い部分で 30cmほどをはかるが，全体的に遺存状況は悪い。埋土からは鉄滓が多量に出土したほか，羽口片も出土しており，廃棄土坑と考えられる。出土土器は土師器・須恵器がみられるが，これらの時期は 7 世紀後葉～8 世紀後葉でやや幅をもつ。これらと切り合い関係から本遺構は 8 世紀後葉頃のものと推測される。

SK4615（Fig.56，PL.51）　193 次調査 出土土坑

193 次調査区の中央北寄りで検出した。平面形状は隅丸方形で規模は長軸 1.1m，短軸 0.95m ほどをはかる。半裁し，南半部を完掘した。床面は検出範囲ではほぼ平坦であり，遺存深さは 40cmほどとやや深い。埋土は暗灰色粘質土を基調とし単層である。出土遺物はない。

SK4616（Fig.56，PL.51）

193 次調査区の中央部で検出した。西側を攪乱で大きく破壊されているが，長軸を南東―北西に持つ長楕円形の土坑か。半裁し南半を完掘した。南端部に一段の段を有し，床面は中央に向かってやや深くなる。規模は検出範囲で長軸 1.15m，短軸 0.95m をはかり，遺存深さは 30cm程度である。出土遺物には須恵器・土師器の小片が少量見られ，時期の判断できるごく少量の遺物は 8 世紀代のものである。

（7）土壙墓（Fig.57）　土壙墓

広丸地区では，特定の地域に集中する形で平面長方形，底面が平坦な土壙が出土した。長さ約 2m 前後，幅約 60cm前後の大きさで比較的規格性が高い遺構群であり，本書ではこれらをその形態より土壙墓として報告する。

土壙墓はいくつかの調査区に偏って集中的に出土している。特に 95 次調査区では南北に列状をなして 18 基が出土した。出土遺物が少ないため時期を検討することが難しい遺構が多いが，形態的に共通性が多い遺構群であり，全体的にそれほど時期幅のある遺構群とは考えにくい。

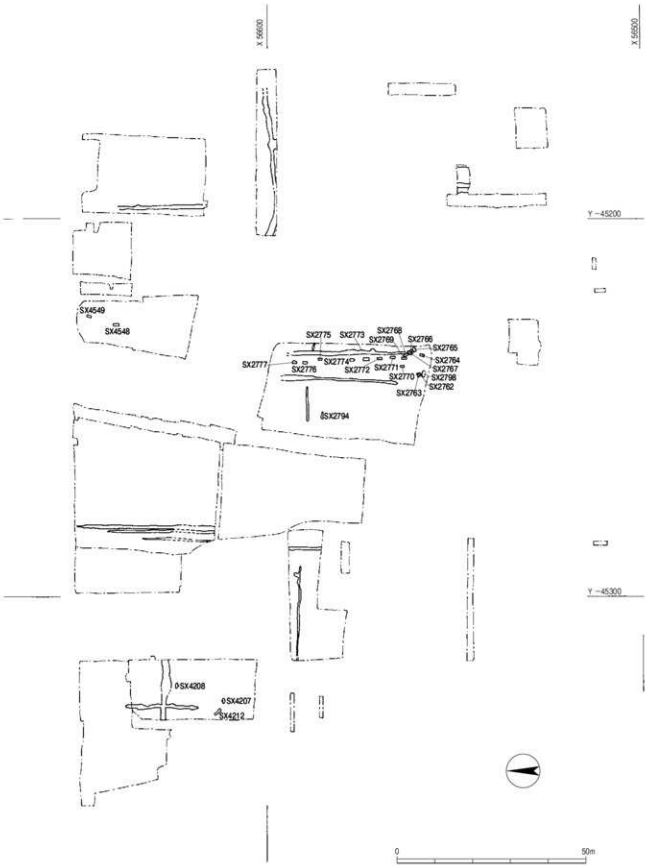


Fig.57　広丸地区出土土壙墓配置図（1/1,000）

SX2762（Fig.58）

95 次調査区の南東隅部やや西寄りで検出した。SD2787 の西側に位置し，SX2763 に切られる。SK2761 と一部重複するが先後関係は不明。長軸方向は略南北で，北が約 15 度東に振れる。北東側の肩部が東に大きく張り出すが，SK2761 と切り合う部分にあたり誤認の可能性が高い。壁は垂直に近く立ち上がる。長方形プランとすれば，長軸 1.14m，短軸 0.60m の規模を持つ。残存深さはごく浅く 5cm程度。出土遺物は土師器・須恵器の小片がわずかにあり，時期の判断できる資料には 8 世紀代のものが多い。

SX2763（Fig.58）

95 次調査区の南東隅部やや西寄りで検出した。SD2787 の西に位置する。SX2762 の中央部を破壊する。長軸方向は SX2762 と直交し略東西方向で，東が約 13 度南に振れる。幅の狭い隅丸長方形プランで，壁は垂直に近く立ち上がり床面は平坦。規模は長軸 1.40m，短軸 0.40m をはかる。残存深さは浅く 10cm程度しか遺存しない。出土遺物はごくわずかで時期の判断できる資料は乏しい。

SX2764（Fig.58，PL.9）

95 次調査区の南東隅部，SD2787 の東に位置し，これとわずかに切り合って後出する。長軸方向は略南北で北が 12 度ほど東に振れる。平面形状は長方形で，壁は垂直に近く立ち上がり，底面南半が 1 段下がっていて，検出面からの最大深さは 25cmほどをはかる。検出面での規模は長軸 1.38m 短軸 6.02m をはかる。出土遺物はごくわずかで時期の判断できる資料は乏しい。

SX2765（Fig.58）

95 次調査区の南東隅部で検出した。SD2787 の東，SX2764 の北に位置する。長軸方向は略東西で，東が 13 度ほど北に振れる。平面形状は長方形で，壁は垂直に近く立ち上がり，底面の一部が 10cmほど掘り込まれるが，掘り込みは不定形であり下層遺構の誤認の可能性がある。検出面での規模は長軸 1.34m，短軸 7.02m をはかり，遺存深さは一段下がる部分を除く約 10cmである。出土遺物は土師器の小片が数点あるが時期の判断できる手掛かりに欠ける。

SX2766（Fig.58）

95 次調査区の南東部，SX2765 の北に位置する。長軸方向は東南東―西北西で正方位から 35 度ほど振れる。西側の半分以上が SX2767 によって破壊されて失われている。平面形状は隅丸長方形とみられ，壁は垂直に近く立ち上がる。床面は平坦。検出規模は長軸 0.74m 以上，短軸 0.76m。遺存深さは 5cm程度と大きく削平されている。出土遺物はなく時期は不明。

SX2767（Fig.58）

95 次調査区の南東部で検出した。SX2766 を大きく破壊しこれに後出する。また SX2768 とも切り合いこれより新しい。平面形状はややゆがんだ長方形で壁は垂直に近く立ち上がり，床面は平坦。長軸は南北より北が 33 度東に振れる。検出規模は長軸 1.38m，短軸 0.63m をはかり，遺存深さは 10cmほどで極めて浅い。出土遺物は土師器・須恵器の小片がわずかにあり，時期の判断できる資料には 8 世紀代のものが多い。

SX2768（Fig.58）

95 次調査区の南東部で検出した。SX2767 により南端部を一部切られる。長軸方向は略南北で北が東に 26 度振れる。平面形状は略長方形で，壁はやや強く立ち上がり床面は平坦。遺

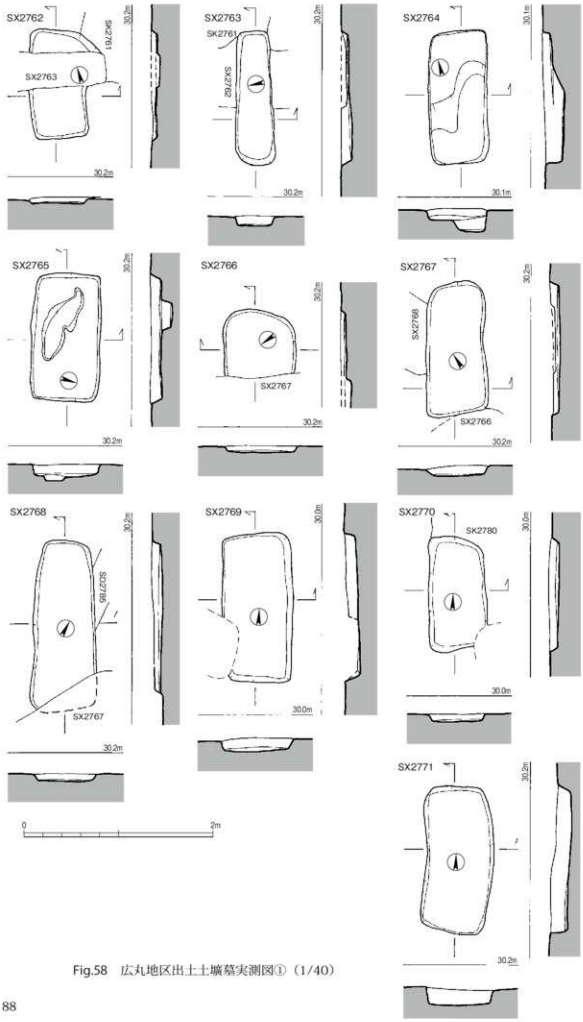


Fig.58　広丸地区出土土壙墓実測図①（1/40）

存規模は長軸推定 1.78m，短軸 0.64m。遺存深さは 8cmほどでごく浅い。出土遺物は土師器・須恵器の小片がわずかにあり，時期の判断できる資料には 8 世紀代のものが多い。

SX2769（Fig.58）

95 次調査区の南東部で検出した。SX2768 の西，SD2787 の東に挟まれた場所にある。北に向かって（SX2771 を除く）SX2775 までの計 6 基の土壙墓がほぼ直線上に並ぶうちの最も南にあたる。攪乱により南西隅部が一部失われる。平面形状は略長方形で，底面は平坦，壁は強く立ち上がる。長軸は略南北で北が 2 度ほど東に振れる。遺存規模は長軸 1.56m，短軸 0.74m。出土遺物は土師器・須恵器の小片がわずかにあり，時期の判断できる資料には 8 世紀代のものが多い。

SX2770（Fig.58）

95 次調査区の南東部で検出した。SD2787 の西にあり，北側が一部 SK2780 と重複していてこれに後出する。平面形状はややゆがんだ長方形で，規模は長軸 1.18m，短軸 0.60m をはかり，遺存深さは 10cm弱と極めて浅い。床面は平坦で壁は強く立ち上がる。長軸方向はほぼ南北。出土遺物には口縁部が完周する土師器甕があり，10 世紀頃のものか。

SX2771（Fig.58）

95 次調査区で検出した。SX2769 の北に位置する。平面形状は長方形状である。床面は平坦で壁は強く立ち上がる。規模は長軸 1.54m，短軸 0.70m をはかり，遺存深さは 15cm程度である。主軸方位はほぼ南北にとる。出土遺物はなく時期は不明。

SX2772（Fig.59）

95 次調査区の東側で一列に並ぶ土壙墓群の一つで，南の SX2771 と北の SX2773 に挟まれる。平面形状は長方形状でわずかにゆがみを持つ。床面は大略平坦だが北半がわずかにくぼみ，壁は強く立ち上がる。主軸方位はほぼ南北に沿う。規模は長軸 1.42m，短軸 0.58m をはかり，残存深さは 15cmほどである。出土遺物は土師器の小片が数点あるのみで時期の判断できる手掛かりはない。

SX2773（Fig.59，PL.9）

95 次調査区の東側で一列に並ぶ土壙墓群の一つで，南に SX2772，北に SX2774 が位置する。平面形状は長方形状でやや幅が広く，床面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸が 1.67m，短軸が 0.80m をはかり，遺存深さは 30cmとやや深い。主軸方位はほぼ南北に沿う。出土遺物には土師器・須恵器の小片があり時期の判断できる遺物は 8 世紀代のものが多い。

SX2774（Fig.59，PL.9）

95 次調査区の東側で一列に並ぶ土壙墓群の一つで，南には SX2773 が並ぶ。すぐ北には東西溝 SD2788 がある。平面形は長方形状を呈し，北側短辺に半円形で一段高い突出部がつく。規模は長軸が突出部を除き 1.34m，突出部を含めれば 1.48m，短軸が 0.68m をはかる。遺存深さは比較的深く 35cmをはかる。主軸方位はほぼ南北に沿う。出土遺物はなく時期は不明。

SX2775（Fig.59，PL.10）

95 次調査区の東側で一列に並ぶ土壙墓群の一つで，南には斜行溝 SD2789 が，北には SX2776 が隣接する。平面形はゆがんだ長方形状で，床面にはやや凹凸がみられる。規模は長軸が 1.2m，短軸が 0.64m をはかる。遺存深さは 15cm程度でやや浅い。主軸方位はほぼ南北

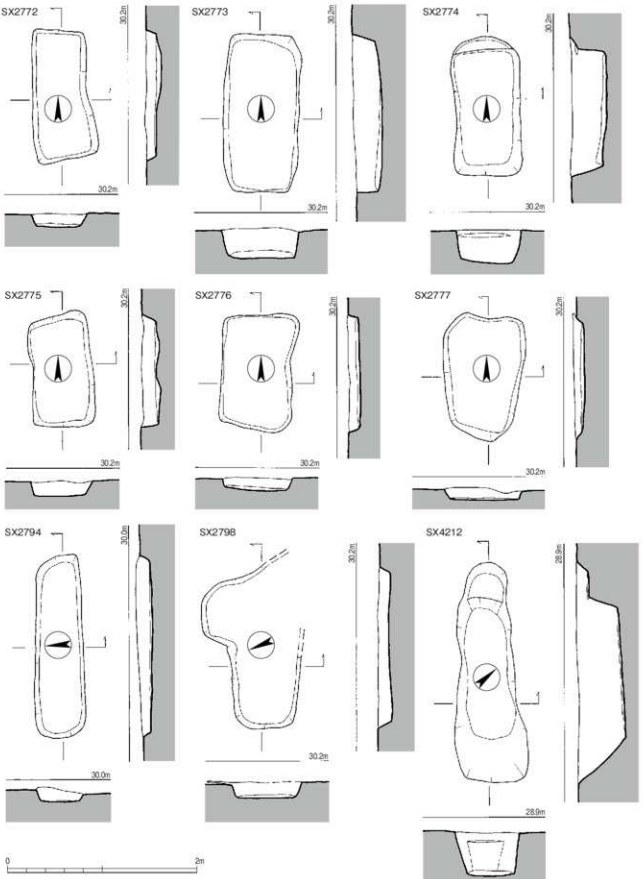


Fig.59　広丸地区出土土壙墓実測図②（1/40）

方向である。出土遺物はない。

SX2776（Fig.59，PL.10）

95 次調査区で検出した。SX2775 の北西部に 2 基縦に連なるうち南側の一つである。平面形はややゆがんだ長方形で床は平坦，壁は強く立ち上がる。規模は長軸が 1.22m，短軸が 0.76m をはかり，遺存深さは 15cm程度である。主軸方位はほぼ南北方向に沿う。出土遺物はない。

SX2777（Fig.59）

95 次調査区で検出した。SX2776 の北にほぼ主軸を同じくして並ぶ。平面形はゆがんだ長方形状で規模は長軸 1.32m，短軸 0.84m をはかる。遺存深さは 15cmほどで浅い。床面は平坦で，壁はやや斜めに立ち上がる。主軸方位はほぼ南北に沿う。出土遺物はない。

SX2794（Fig.59，PL.10）

95 次調査区の中央西寄りで検出した。主軸方位を略東西方向にとり北を西に 3 度ほど振る長楕円形の土壙である。付近にはほかに土壙墓はなく，北に SA2793 が，南に SD2788 がそれぞれやや離れて分布する。規模は長軸 1.95m，短軸 0.50m をはかる。遺存深さは 15cmほどである。床面は平坦で壁はやや斜めに立ち上がる。出土遺物はない。

SX2798（Fig.59）

95 次調査区の南東部に分布する。北に SX2762 が隣接する。検出時の形状はカギカッコ形で調査しているが，調査時の誤認と判断し，土壙墓として報告する。平面形状は北東コーナー部がふくらんだ長方形だが本来は長方形状を呈したものと想定して規模を復元すると，主軸方位は略東西にとり東側が 20 度南に振れており，長軸 1.6m，短軸 0.75m ほどの規模と推定で

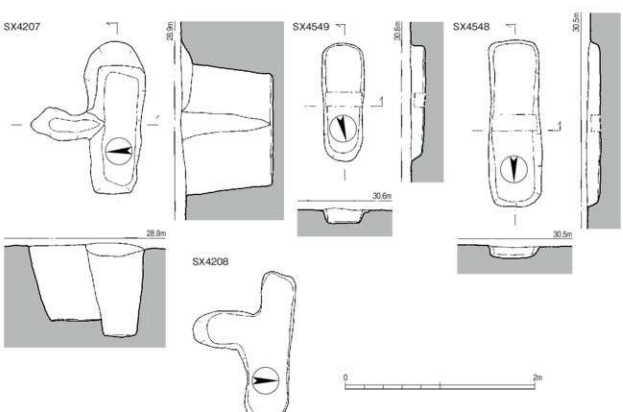


Fig.60　広丸地区出土土壙墓実測図③（1/40）

きる。床面はほぼ平坦で壁は強く立ち上がり，残存深さは 20㎝弱をはかる。出土遺物はない。

166 次調査 出土土壙墓 **SX4207**（Fig.60）

166 次調査区の南西部で検出した。平面形状は，長方形状の深い土壙の北に細い溝がとりついたような形で，東側も一部広がる。中心構造と考えられる長方形の土壙は長軸 1.36m，短軸 0.56m ほどの規模を持ち，深さは 95㎝と極めて深い。北側にとりつく細い溝状遺構はこれより一段浅く深さ 80㎝ほどである。形状や深さなどがほかの土壙墓と著しく異なることから土壙墓とするには疑問も残るが一応ここで報告しておく。出土遺物には土師器・須恵器・緑釉陶器などの小片がビニール袋 2 袋分ほどあり，10 世紀頃のものが多い。

SX4208（Fig.60）

166 次調査区の中央部で検出した。平面形状が SX4207 と同様の遺構で，一応土壙墓として報告する。中心構造の可能性のある長方形土坑は略東西方向を主軸にとっていて規模は長軸 1.58m，短軸は 0.5m ほどをはかる。南側壁に突出部を持つ。床面レベルの記録が残されていないために遺構の断面形状を示すことができない。写真を見る限りでは SX4207 よりはかなり浅い遺構のようである。出土遺物はない。

SX4212（Fig.60）

166 次調査区の西端，やや南寄りの位置で検出した，ややゆがんだ長楕円形の遺構である。床面が平坦で両側壁がかなり強く立ち上がることから，土壙墓の可能性がある遺構として報告する。北側が一段高い段を形成しており，規模は長軸が段を除いて 1.85m，段を含めると 2.42m，短軸は 0.64m ほどをはかる。遺存深さは 45㎝ほどとかなり深い。主軸方位は北西一南東方向でほかの土壙墓とは大きく異なる。出土遺物には土師器・須恵器の小片があり，時期の判断できるものとしては 8 世紀代・10 世紀代の遺物が見られる。

186 次調査 出土土壙墓 **SX4548**（Fig.60，PL.50）

186 次調査区の中央北寄りで検出した。平面形状は略長方形で規模は長軸が 1.78m，短軸が 0.55m をはかる。主軸方位はほぼ南北に沿う。床面は平坦で壁は強く立ち上がり，遺存深さは 15㎝ほどである。出土遺物には須恵器・土師器が見られ，8 世紀代の資料が含まれるが，少量かつ小片であり混入の可能性も否めない。

SX4549（Fig.60，PL.50）

186 次調査区北東隅部で検出した。平面形状は短軸が丸みを帯びた長方形あるいは小判型で，規模は長軸が 1.26m，短軸が 0.44m をはかる。床面はほぼ平坦で，壁の立ち上がりは強い。遺存深さは 20㎝ほどをはかる。出土遺物には須恵器・土師器が見られ，8 世紀代の資料が含まれるが，少量かつ小片であり混入の可能性も否めない。

（8）その他の遺構

井　戸　1）井戸（Fig.61）

広丸地区からは 3 基の井戸を検出した。広丸地区で出土した井戸は，特定の調査区に集中することはなく，広い地区の中に散在している。この状況は，27 基という数多くの井戸が出土し，しかも特定の調査区に集中するように分布していた，東の大楠地区の状況とは好対照であり，本地区の性格を考える上で重要な手がかりとなろう。

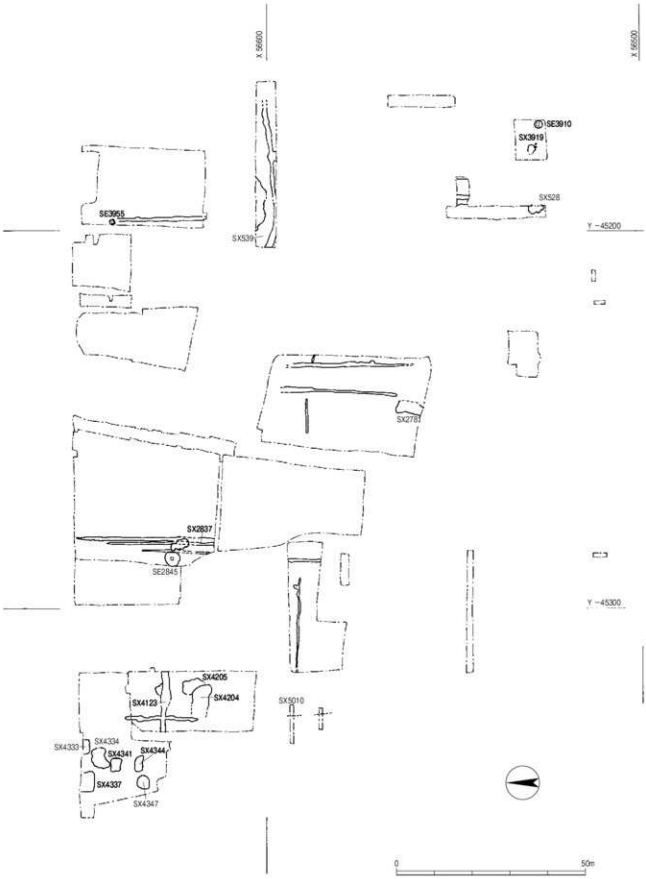


Fig.61　広丸地区出土のその他の遺構配置図（1/1,000）

96 次調査 出土井戸 **SE2845**（Fig.62，PL.17）

96 次調査北区の南寄り西端で検出した。SD2834・SX2837 と切り合い関係を持ちこれらよりも古い。検出面における堀方の平面形状は 3.8m × 4.0m ほどの規模を持つ不整隅丸方形状を呈し，南側に段状の平坦面を持つ。壁の崩落痕跡かもしれない。検出面から下に向かって掘方は漏斗状にすぼまる。約 40cm 下がったところで，2.7m × 2.4m，深さ 2.2m をはかる方形の掘り込みへと変化する。この方形の掘り込み部は壁がほぼ直立しており，中央部に板を組み合わせた井戸枠を設置する。井戸枠は平面形状が一辺 0.7m ほどの略正方形状を呈し，概報によれば井籠組みを下段とし，方形立板組みを上段としていて，下段は高さ約 28cm がほぼ完全な状態で遺存するが，上段は遺存状態が悪く立板の一部と横桟一本を検出したのみであるという。横桟の両端には出枘が作出されており，これをはめ込むための隅柱が立っていたと推定されている。埋土は上・下の 2 層に分層でき，下層からは多くの土師器と須恵器，また滑石製の風字硯も出土した。これらの出土遺物から，下層の埋没は 9 世紀後葉代と推定されている。一方上層には中世の遺物が含まれており，井戸の廃棄に伴う 1 次埋め戻しののち，自然沈下により形成されたくぼみに上層が堆積したと理解されている。

133 次調査 出土井戸 **SE3910**（Fig.62，PL.22）

133 次調査区の南東隅で検出した。検出面における堀方の平面形状はややゆがんだ隅丸方形

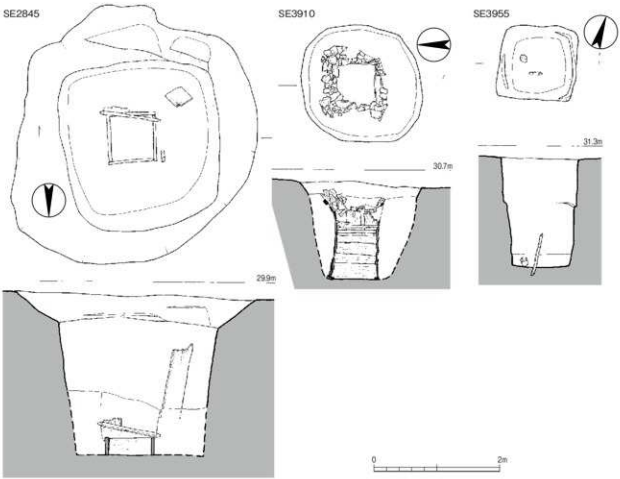


Fig.62　広丸地区出土井戸実測図（1/60）

状を呈し，規模は南北 1.9m，東西 1.85m ほどをはかる。壁は完全に検出できているわけではないがややすぼまりながら 1.5m ほど下がり，底面は平坦か。中央部に一辺 0.7m ほどの略正方形状を呈する木組みの井戸枠を配する。概報によれば，井戸枠は横板井籠組みで，用材は柾目材・板目材がみられる。板組みの方法は下半部と上半部でやや異なり，下部は相欠きの枘で組み合わせるのに対し，上半部は凸枘をつけた一枚ものと切欠き材 2 枚を用いて凹枘をつけたものを組み合わせているという。また，東側には縦板を裏側に立てて井戸枠を補強しているという。井戸枠に用いられる板材は長さ 68cm，幅 15 ～ 25cmをはかる。埋土の記録はないが，上面には土師器・瓦を多量に含む黒褐色土が堀方を覆うように広がっていたといい，廃棄・埋め戻し後の自然沈下により形成されたくぼみに黒褐色土からなる遺物包含層が堆積した可能性が高い。特に瓦は井戸枠の周囲にも多数混じっていたが，くぼみへの投棄と考えられる。出土遺物の一部に 8 世紀代の資料が含まれるが，大半はおそらく上面を覆う黒褐色土から出土したと思われる 10 世紀代のもので，埋め戻しはこれより前，8 世紀代にまでさかのぼる可能性があるものと思われるが，遺物取り上げ時に層位の記録がなく判断できない。

SE3955（Fig.62，PL.25）

137 次調査出土井戸

137 次調査区の北西部で検出した。SD3939 の北端部、SD3957 との交点の北側に隣接するが，相互の直接的な切り合い関係は不明。堀方は上端が一辺 1.2m の方形，底面は東西 0.8m ×南北 0.9m の方形を呈し，深さは 1.75m ほどをはかる。基盤層上層である青灰色粘質土層を掘り抜いており，底部はさらに下層の砂層に達している。堀方の中位に，東西壁を主体に全周するような小段を設ける。井戸枠は遺存しておらず，抜き取られたものとみられる。堀方の床面には下端を切り欠き節を抜いた竹が突き立てられ，傍らに小型の甕が正置状態で据えられており，井戸廃棄に伴い何らかの祭祀が行われたことをうかがわせる。埋土の記録はない。出土遺物には上記の甕型土器のほか，土師器・須恵器の小片がわずかにあり，8 ～ 9 世紀代に属するものであろう。

2）採土遺構

採土遺構

すでに報告してきた土坑は，ある程度定型的な形状を持つ掘り込みをそう呼称して報告してきたわけであるが，広丸地区では形状が不定形で床面にも著しい凹凸がみられ，上記の土坑群とはその性格などを区別して考えるべきではないかという掘り込みが数基確認された。これらに共通する特徴としては，平面形状や床面などから，繰り返し掘削して拡張するような行為が想定されること，規模が大きいこと，床面が深く，しばしば基盤層上位の砂質分の多い土を掘り抜いて下層の粘質土層にまで達していることなどが挙げられる。

こうした特徴を持つ掘り込みは，政庁前面広場地区・日吉地区などで多く類例を報告しており，採土遺構（粘土採掘遺構）として報告されている。本書でもこれに習い，これらの不定形の大型掘り込みを採土遺構として報告する。

SX2837（Fig.63）

96 次調査出土採土遺構

96 次調査北区の南西コーナー部付近で検出した。SD2819・2833・2840 と重複しているが切り合い上の先後関係は不明。南東から北西にかけて伸びる不定形で幅の広い溝状の遺構で，遺構のラインは非常に出入りが多いが，床面は平坦である。検出規模は長軸 5.2m，短軸 3.5m

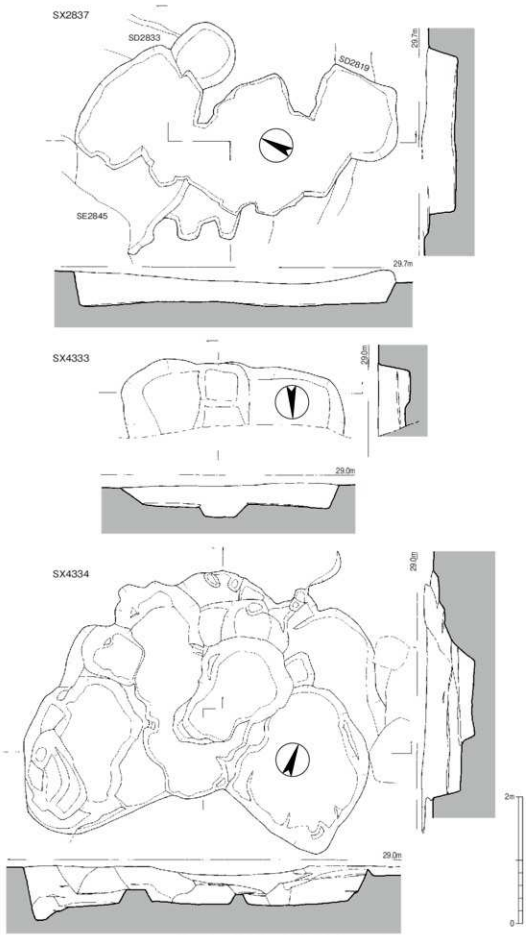


Fig.63　広丸地区出土採土遺構実測図①（1/60）

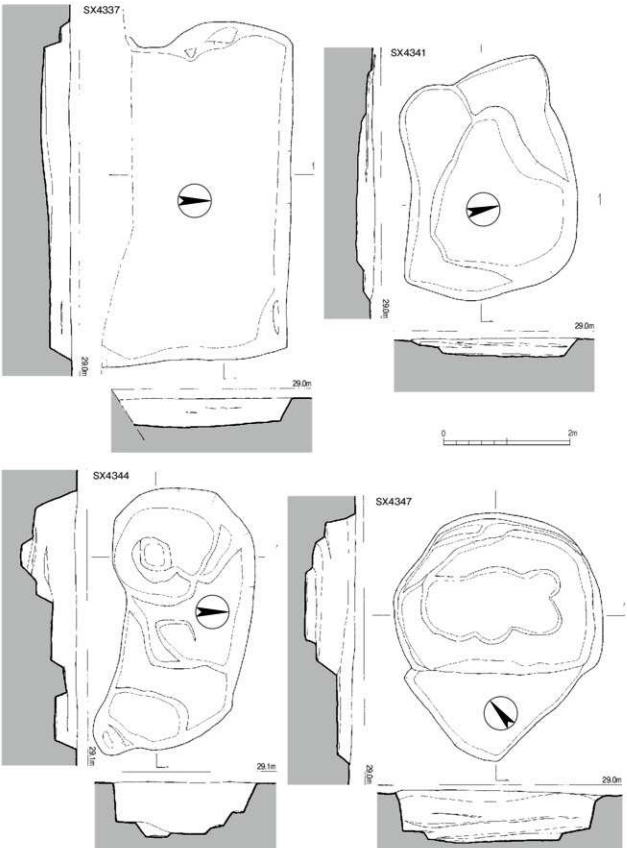


Fig.64　広丸地区出土採土遺構実測図②（1/60）

ほどをはかり，深さは 50cmほどとかなり深い。一応採土遺構として報告しておく。出土遺物としては土師器・須恵器のほか越州窯系青磁碗などもあり 10 世紀頃の遺構か。

175 次調査出土採土遺構

SX4333（Fig.63，PL.41）

175 次調査区の中央北端で検出した。北側の調査区外に遺構の大部分が広がっているものとみられる。検出範囲での形状は隅丸長方形状を呈し，東西 3.5m の規模をはかる。床面はおおよそフラットで深さは 30cmほどをはかり，一部さらに 20cmほど掘り込まれる。採土遺構の可能性がある遺構として報告しておく。出土遺物は土師器・須恵器の小片が少量であり，10 世紀代以降のものが多い。

SX4334（Fig.63，PL.41・43）

175 次調査区の中央部やや西側で検出した。東に SB4340 が，また南には SK4349 が隣接する。埋土は暗灰色の粘質土と砂質土が互層状をなしていた。平面形状は，不整形の土坑がいくつも重複するような形を呈しており，規模は長軸約 6m，短軸約 4.5m をはかる。最も深い部分は，遺構検出面より 80cmほどをはかり，かなり深い。基本的に，基盤層に存在するあずき色の粘質土層を掘りぬく形で掘られており，この土を採取するための採土遺構の可能性が考えられる。出土遺物は土師器椀を中心として 10 世紀代以降のものが多い。

SX4337（Fig.64）

175 次調査区の北東コーナー部付近で灰色の土色範囲を認めたため，調査区北端から幅約 3m のトレンチを設定して掘り下げ，調査を行った結果，東西において壁の立ち上がりが検出でき，東西幅 5.4m，最大深さ 0.45m ほどの遺構とした。ただし，概報を読む限りでは南側では壁を検出できておらず，また北は調査区外に広がる可能性が高いことから，遺構全体としての形状は把握できていない。ここでは掘り込み状遺構であると考え，採土遺構の可能性がある掘り込みとして報告しておくが，地山に形成された落ち込み状遺構を整地層により埋めたものである可能性も否定できない。出土遺物は土師器を中心として 10 世紀代以降のものが多い。

SX4341（Fig.64）

175 次調査区の中央西寄りで検出した。平面形状はややゆがんだ隅丸台形状を呈し，検出面での規模は長軸が 3.7m，短軸が 2.7m ほどをはかる。中央部が最も深く検出面より約 30cmの位置で平坦な底面を形成しており，西・南側を中心に一段高い段状の部分がめぐる。出土遺物は土師器・須恵器の小片がビニール袋 3 袋ほどあり，最も新しい資料は 10 世紀代のものが散見される。

SX4344（Fig.64，PL.41）

175 次調査区の南西部で検出した。平面形状は東西に長い不整形で，3 つほどの土坑が重複して掘削されたような形状を呈しており，規模は長軸 4.2m，短軸 2.3m ほどをはかり，残存深さは最も深い西側で 90cmほどをはかる。SX4334 と類似する遺構であり，採土遺構の可能性が考えられよう。出土遺物には土師器の小片がやや多く見られ，10 世紀代の資料が多い。

SX4347（Fig.64，PL.41・43）

175 次調査区の南西部で検出した。検出面における平面形状は，不整長楕円形と長方形の二つの遺構が切り合ったような形状を呈しているが，調査時には単一の遺構として認識されている。南東部に三角形状に表れている平面長方形状の部分は幅 2m，長さ 2.4m 以上の規模を持ち，

底面は平坦で深さは 15cmほどと浅い。一方北東側の不整楕円形状の部分は内部に 3 段ほどの段が認められ，深さも検出面から 80cm程度と深い。遺物は土師器・須恵器の小片がやや多く出土しており，一部に 8 世紀代のものも見られるが 10 世紀代の資料もあり埋没は後者の時期とみられる。

3）落ち込み状遺構

落ち込み状遺構

広丸地区で検出された大型で不整形の掘り込みのうち，深さがあってしばしば基盤層下層にある粘土層にまで到達またはこれを掘り抜いており，複数回にわたって掘削されたような状況を呈する掘り込みを，採土遺構として先に報告した。一方，大型で不整形の掘り込みのうち，床面の形状がそれほど複雑ではなかったり深さが非常に浅く人為的な掘り込みかどうかやや疑わしいもので，また特に整地層下層より検出されたものについて，これを落ち込み状遺構として報告する。おそらく，大々的な整地以前の自然地形にみられるくぼみなどを埋めたものとみたいが，面的に広がる整地層とは調査時の認識において異なるものと判断しており，別に報告するものである。

SX528（Fig.65，PL.4）

29 次調査 出土 落ち込み状遺構

29 次調査 A トレンチの南端部，SD529 の南側で検出した。東側は調査区外に広がっていて全形は不明である。検出範囲内では，南北長が最大約 4.0m をはかるアメーバ状の不定形に広がる掘り込みとなっていて，床面には数段の段を有し，中央部の最も深い部分での遺存深さは約 60cmを測る。出土遺物はない。

SX539（Fig.65）

29 次調査 B トレンチの北部で検出した。東側は調査区外に広がっており全形は不明である。形状からみて，調査区内では南側のおおよそ半分ほどが検出されているものとみたい。SD538 と切り合うが，前後関係は不明である。検出範囲内での平面形状は大局的にみれば半月状を呈し，全体的に非常に浅いが，西側がやや深くなっていて，遺存最大深さは 30cmほどを測る。床面には不定形の浅い凹凸が多くみられる。出土遺物はない。

SX2781（Fig.65）

95 次調査 出土 落ち込み状遺構

95 次調査区の南端部中央で検出した。平面プランは略長方形状を呈し，南側は調査区外に広がっている。規模は非常に大きく，検出範囲内での南北長は 7.3m，幅は最大 3.6m をはかる。東壁を SD2790 によって破壊されている。床面には長方形状の段状の高まりが中央にあって，その南北は一段下がっている。遺存最大深さは 10cm程度ときわめて浅い。全体的に平坦な床面を持つ印象である。出土遺物には須恵器・土師器の小片があり，8 世紀代に収まる。

SX3919（Fig.65）

133 次調査 出土 落ち込み状遺構

133 次調査の調査区西端部で検出した。概報によれば，遺構検出面において暗褐色土が直径約 4m の不整平円形状（一部は西側の調査区外へと広がる）に広がる落ち込み状の遺構として検出したが，掘り下げてみるといくつかの土坑の集合したような状況となったとされる。本稿では，このうち西・北に広がるいくつかを別の遺構（SK3924）として報告し，主に南東部の下層で検出された不整形の落ち込みについて SX3919 として報告することとする。平面形状は 1.5 m× 1.8m 程度の規模を持つアメーバ状の不定形をなしており，壁は緩やかに立ち上

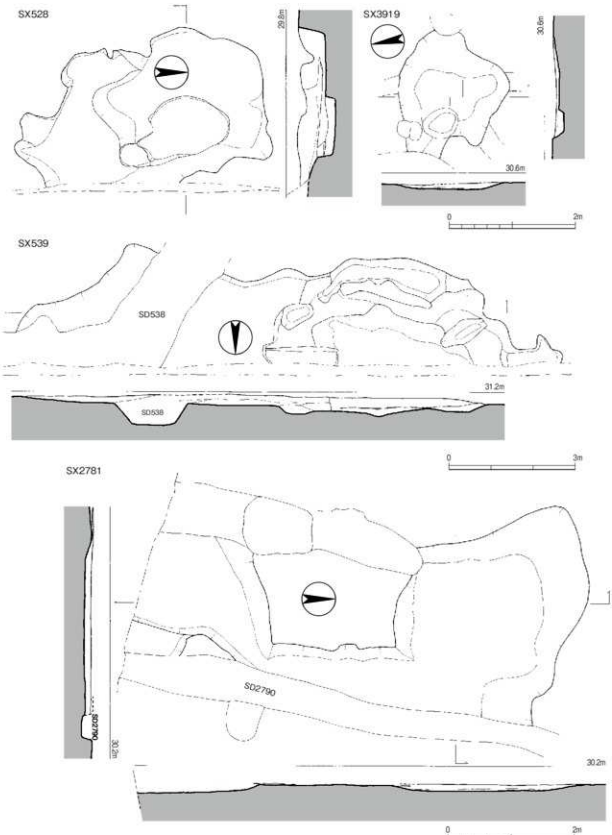


Fig.65　広丸地区出土落ち込み状遺構実測図①（1/60）

がっていて断面形状は皿状を呈する。遺存深さはごく浅く 10cm弱である。上記のような調査経過から，出土遺物は上層に広がる暗褐色土内出土と掘り込み内出土で区別しておらず，やや混じりもあるものと思われるが，8 ～ 10 世紀代の須恵器・土師器・陶磁器などが出土しており最終的な埋没は 10 世紀代に置くことができよう。なお，鋳型が多く出土しており近隣のSX3917・3918 などにおける生産活動との関係で理解すべきであろう。

SX4204（Fig.66）

166 次調査出土落ち込み状遺構

166 次調査区で検出した大きくて浅い落ち込み状遺構である。調査区のほぼ中央部を南北に横切るように広がっていて，西側の壁は試掘トレンチによって破壊されている。他遺構との関係では，SD4202 に中央部を破壊されていてこれより古いほか，SD4215 とも切り合っており

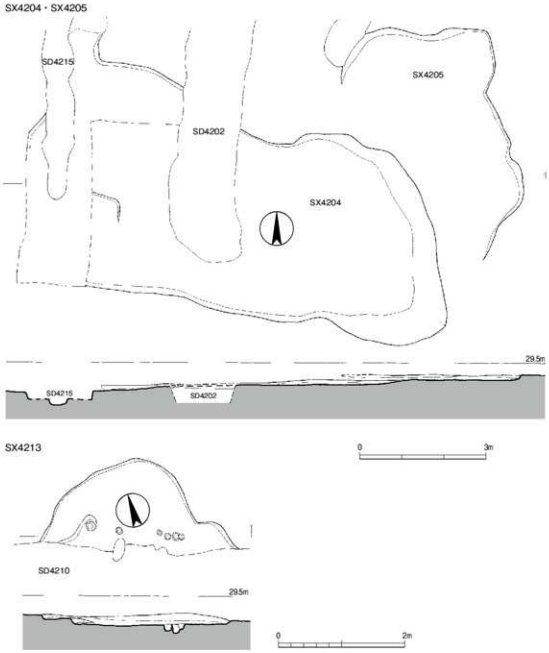


Fig.66　広丸地区出土落ち込み状遺構実測図②（1/90・1/60）

これに先行する可能性が高い。規模は東西長さが約 9 ～ 10m，南北幅は 4.2m ほどをはかる。床面は平坦で，遺存深さはごく浅く 10㎝程度をはかる。出土遺物はない。

SX4205（Fig.66）

166 次調査区のほぼ中央部で検出した。SX4204 の北東部に隣接するが，本遺構の南壁が削平されていて把握できず，両者の切り合い関係は把握できなかった。両者が床面に段を持つ一つの大きな落ち込みである可能性も除外できない。平面形状はアメーバ状の不定形で，規模は検出状況で南北 5.6m，東西 3.6m ほどをはかる。遺存深さはきわめて浅く最大でも 10㎝程度である。出土遺物は 9 世紀代の土師器を主体としておりこの頃の埋没か。

SX4213（Fig.66）

166 次調査区の南東部で検出した。SD4209・4210 と切り合い関係を持つが調査時の記録では先後関係を判断できない。南側は SD4209 と大きく重複していて全形は記録されていない。北半分は不整形な半月状を呈し，深さは最大 20㎝程度ときわめて浅い。床面はおおよそ平坦である。時期の判断できる出土遺物はない。

193 次調査出土落ち込み状遺構

SX4617（付図）

193 次調査区の南側で検出した。調査区の中央部から南西にかけて，深さ約 30 ～ 50㎝の落ちが広がっており，これを整地によって埋めている。前報では整地層としたが，本報では落ち込み状遺構の人為的埋め戻しとして扱う。検出範囲での規模は東西 5m，南北最大 3m ほどで，北東から南西に向けて緩やかに下がる。床面には不定型な凹凸がみられる。出土遺物は 8 世紀代の須恵器が目立つが一部に 9 世紀代に下るものも見られ，埋没はこの頃であろうか。

224 次調査出土落ち込み状遺構

SX5010（Fig.67）

224 次調査区で検出した。224 次調査区では 2 本の東西トレンチを設定したが，両者から大きな落ち込みの肩が検出され，この落ち込みを SX5010 として報告している。前報にもあるように，東側はトレンチ外に広がっているため，溝状遺構になる可能性もある。埋土は上層から中層にかけては砂層，最下層にはシルト質土が堆積している。深さは 1.2m ほどを測る。出土遺物には土師器・須恵器の小片があり，10 世紀代の遺物を含む。

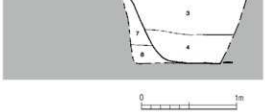


Fig.67　広丸地区出土落ち込み状遺構 SX5010 土層略測図（1/40）

3）鋳造関連遺構

SX3917（Fig.68）

133 次調査区の西側で検出した。長径 45cm，短径 40cmほどの小ピットの壁に沿って平瓦を一周するように並べ，その外側に黄褐色の粘土を貼ってこれを固定していた。従って粘土を貼るために掘り込まれた穴の大きさはピットより一回り大きく，長径 40cm，短径 30cmほどの不整楕円形状を呈していたものとみられる。小ピットの壁に沿って並べられた瓦は二次的な被熱を受けた痕跡があり，また付近からは鋳型片なども出土していることから，鋳造関連遺構の下部構造の可能性があるものとして報告しておく。ただし具体的な遺構の性格は明らかではない。

SX3918（Fig.68）

SX3917 の東約 30cmの位置にこれと並んで掘り込まれた小ピットである。平面形状は直径 25cmほどの略円形を呈し，底部に向かってすぼまる。深さは 15cmほどと浅い。検出面において，ピットの中央部分に直径 8cmほどの円形状に炭化物が集中して含まれる埋土があり，周辺の遺構から鋳型片が出土することなども踏まえ，鋳造関連遺構の可能性があるものとして報告する。SX3917 と同様に，具体的な遺構の性格は明らかではない。

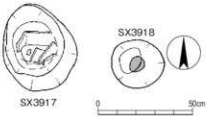


Fig.68　広丸地区出土鋳造関連遺構実測図（1/20）

4）その他の遺構

SP2926（Fig.69）

96 次調査北区で検出された掘立柱建物 SB2525 の北側柱列西から 2 番目の柱穴の北約 80cmの位置で検出した小ピットである。平面形状は略円形で直径約 40cmをはかり，深さは 10cm程度と浅い。ピットの内部から土師器の甕形土器大片が出土しており，概報では SB2525 に伴う地鎮遺構などの可能性があるものとして報告されている。出土土器から 8 世紀代の遺構であろう。

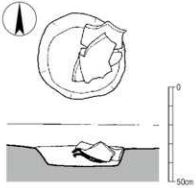


Fig.69　SP2926 実測図（1/20）

第Ⅳ章　総　　括

（1）はじめに

本書は，大宰府政庁周辺官衙跡の広丸地区で検出された遺構・遺物を網羅的に掲載する正式報告書であるが，広丸地区は東接する大楠地区に次いで遺構密度が高く，かつ遺物量も多く，規模的には前者と全く遜色はない。また，従前から大楠・広丸両地区は，官人が居住した区域との見解が提示されており，官衙区域とした日吉・不丁地区との比較・検討を要する地区であることから，単年度で総ての遺構・遺物を厳密に吟味し，詳細な検討を加えた上での正式報告書を刊行するには，時間的・体制的にも困難と言わざるを得ない。

従って，広丸地区の報告に際しては，遺構編・遺物編の二分冊とし，当年度で遺構編を刊行し，考察を含めた遺物編は次年度以降の刊行予定とした。なお，本章では，発掘調査及び遺構の検討によって得られた広丸地区における成果を主要な遺構ごとにまとめ，総括とする。

（2）広丸地区官衙の範囲

広丸地区の東縁と西縁

大楠地区と広丸地区との小字上の境は，152 次調査（大楠地区）と 29 次調査（広丸地区）間に存在する道路にあるが，『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅸ』に記した如く，大楠地区の境界溝 SD2680 から西側 85 mに位置する SD530（29 次調査Ａトレンチ）を東縁とすることができよう。なお，広丸地区の西縁は不明であるが，南北溝 SD2480 は SD530 から西側に約 95 m の場所に位置することから，広丸地区官衙も少なくとも東西２区画を有することとなる。

広丸地区の北縁と南縁

北縁は来木地区官衙と接するとみられるが，両者の境界は定かではない。ただ，蔵司地区官衙南端には，東西方向の築地 SA1410 があり，その西側延長線上に境界を設定することは可能である。南縁に関しては，朱雀門礎出土地点から東西方向に延長した線（区画施設の推定線）が想定でき，その距離は約 220 mを測ることから南北はおおよそ２区画半になろう。

（3）検出遺構

広丸地区においては，掘立柱建物 30 棟，柵 23 列，区画溝 14 条，その他の区画溝 19 条，竪穴住居 1 軒，井戸 3 基，土坑 72 基，落ち込み 10 基，鋳造遺構 2 基，採土遺構 7 基，土壙墓 23 基等を検出した。ここでは，建物，区画施設，墓，その他の遺構として採土遺構，井戸を取り上げる。なお，今回の報告書では遺構の時期については特段ふれておらず，時期・前後関係に関しては遺物編において改めて提示することとしたい。

1）建　物

広丸地区では，地区の北半部において大小 30 棟の掘立柱建物を確認しているが，南半部は御笠川の氾濫原となっており，本来の数はもっと増えるものと思われるものの建物同士の切り合いが少なく，他の前面官衙地区に比して閑散としている。建物の内訳は，四面廂建物 1 棟，片廂建物 6 棟，総柱建物 3 棟，側柱建物 20 棟であった。なお，日吉・不丁・大楠地区官衙でみられた梁行３間の大規模な建物は，現時点では確認されていない。また，175 次調査で検出した SB4340 は四面廂建物であることから，当地区において主体となる建物とみられる。

2）区画施設

区画施設としては，他の地区同様，溝・柵を検出している。137 次調査区で検出した南北溝 SD3939 は，8 世紀半ば以降の開鑿とみられ，大楠地区の境界溝 SD2700 との芯－芯距離は 90 mを測る。また，142 次調査区で検出した南北溝 SD2840 は 8 世紀後半の開鑿で，SD3939 との芯－芯距離が 85 mを測ることから両者を広丸地区の境界溝とみなすことが可能である。前述した SD530 は，調査面積が狭小なため規模・時期を明らかにできないが，SD2700 に先行する境界溝 SD2680 との芯―芯距離が 84 mであることから，それと対になる溝とみられる。東西方向の溝には SD2810 があり，官衙域内を南北に分割する施設と考えられる。

比較的規模が大きな柵には 96 次調査で検出した SA2833 があり，8 間の規模を有し，区画施設になろう。

3）土壙墓

96 次調査区で 18 基，166 次調査区で 3 基，186 次調査区で 2 基の合わせて 23 基検出した。長さ 1.1 ～ 1.7 m，幅 0.4 ～ 0.8 mの長方形を呈し，出土遺物・副葬品はみられないものの，その形態から土壙墓と考えられる。95 次調査では 10 基の土壙墓が直線的に配列している。採土遺構とともに広丸地区の土地利用の変遷を考察する上で重要な意義を持つ遺構と言える。

4）その他の遺構

①採土遺構

96 次調査区で 1 基（SX2837），175 次調査区で 6 基検出した。黒色粘土を採取した土取り穴で，政庁前面広場及び不丁地区官衙でも確認されている。掘削時期は他の事例から 9 世紀代を上限に 14 世紀代を下限とする。

②井戸

広丸地区においては，3 基の井戸を検出した。SE3995 が 8 世紀前半，SE2845・3910 が 9 世紀後半とされている。当然，建物と供伴するとみられるが，どの建物に伴うのか再検討したい。ただ，大楠地区官衙には 27 基の井戸が存在することから大楠地区官衙の特殊性が指摘できよう。

（4）おわりに

今回，『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅹ』として，広丸地区遺構編の報告を行った。従前より，建物規模が他地区の建物と比して小規模であること，井戸を伴っていることから“官人居住域”とされてきたが，当地区の性格付けに関しては大宰府の職制に関わる重要な問題を孕んでおり，建物群の時期・配列・変遷，他の遺構との関連，出土遺物等を詳細に検討するとともに日吉・不丁・大楠地区官衙との比較検討を経た上で改めて言及したい。

Tab.3　広丸地区遺構一覧

遺構種別	遺構番号	次　数	S番	概　要	前後関係（古→新）	掲載
建　物	SB2820	96-3	5・15	1 α × 2 総柱	SB2820 → SK2841 → SD2843	
	SB2825	96-2	1～13，3-13	東西棟 2 × 7 α間	SD2760 → SB2825；SA2822,SD2759 と重複	
		96-3	13	東西棟 2 × 7 α間	SD2760 → SB2825；SA2822,SD2759 と重複	
	SB2830	96-2	20 ～ 26	南北棟 2 × 2 α	SB2830 → SA2831；SK2827 と重複	
	SB2835	96-2	39 ～ 42・45 ～ 49・51・54 ～ 66	東西棟 2 α × 5 片廂?	SD2840 と重複	
		142	－	東西 1 α × 5 片廂?		
	SB2842	96-1	－	1 α × 2 α東西棟	SK2003 と重複	新
		96-2	79・81	東西棟?廂	SA2856・2869,SD2810・2833・2834・2836 と重複	新
	SB3905	133	13・14・24	東西棟 1 α × 3 間	SB3920 → SB3905	
	SB3925		8・9・12・26・27	東西棟 2 × 3 間	SD3921・3922,SK3913・3924,SX3917・3918 と重複	新
	SB3940	137	8・10・13 ～ 15・17・18・25・28・30	南北棟 2 × 8 α	SB340 → SB3945 → SB3950	
			32・35・36・38・39・41・42・44		SD3939・3941・3949 他と重複	
	SB3945		2 ～ 5・9・12・13・19・21・22・	南北棟 2 × 6	SB340 → SB3945 → SB3950	
			24・26・29・33・34・43・46・47		SD3939・3941・3949 他と重複	
	SB3950		6・11・23・27・31・37・45	南北棟 2 × 4	SB340 → SB3945 → SB3950	
	SB3958		－	東西棟 1 × 1	SD3957 と重複	新
	SB3995	142	25	南北棟 2 × 3 総柱	SB3996・3997 と重複	
	SB3996		4・7・9・11・12・15・16・18・21・24・28	南北棟 2 × 3 片廂	SB3996 → SB3997；SB3995 と重複	
	SB3997		3・5・6・8・13・19・22	南北棟 2 × 3 片廂	SB3996 → SB3997；SB3995 と重複	
	SB3998		－	東西棟 2 × 3	SB3999 と重複	
	SB3999		－	東西棟 2 × 2	SB3998 と重複	
	SB4000		31 ～ 35	南北棟 2 × 1 α		
	SB4130	157	7・8・11・12	東西棟 1 × 2	SD4121 → SB4130；SD4181 と重複	新
	SB4200	166	1 ～ 6・35	南北棟 2 × 2 α 総柱		
	SB4225	167	3	東西棟 3 α × 5		
	SB4340	175	10・1・11・1 ～ 24	東西棟 5 × 7 間四面廂	SB4340 → SD4335,SK4329・4331・4336・4338,SX4333	
	SB4550A	186	108・109	東西棟 2 × 1 α	SA4550A → SB4550B → SB4551 → SB4552	
	SB4550B		81・90・95 ～ 98・102・103・107	東西棟 3 × 1 α 片廂	SA4550A → SB4550B → SB4551 → SB4552	
	SB4551		94・101・104	東西棟 2 × －	SA4550A → SB4550B → SB4551 → SB4552	
	SB4552		93・100・105	東西棟 2 × －	SA4550A → SB4550B → SB4551 → SB4552	
	SB4553		12・14・19・40・42・49・51・53	東西棟 3 × 3 片廂	SD4542 → SA4558 → SB4555 → SB4553；SA4596 と重複	
	SB4554		56・75	東西? 1 α × 1 α	SA4597,SD4543,AK4599 と重複	新
	SB4555		2・7・10・21・41・43	東西棟 2 × 3 α	SD4542 → SA4558 → SB4555 → SB4553；SA4557 と重複	
	SB4556		78・82・106	東西棟 2 × 2 α (3)		
	SB4598		－	東西棟 1 α × 2 α		新
柵	SA2792	95	－	南北 3 間	SA2793 と一連?	新
	SA2793		－	南北 3 間	SA2792 と一連?	新
	SA2822	96-2	14 ～ 19	南北 8 間	SD2760 → SA2822；SB2825,SD2879,SK2841 と重複	新
		96-3	3・8	南北 8 間	SD2760 → SA2822；SB2825,SD2879,SK2841 と重複	新
	SA2829	96-2	－	東西 2 間	SB2830 → SA2829	新
	SA2831	96-3	32・35 ～ 37	東西 4 間	SB2830 → SA2831	
	SA2856	96-1	－	南北 2 間	SB2842 と重複	新
		96-3	80	南北 2 間	SA2856 → SB2842	新
	SA2869	96-3	11・12	南北 4 間	SB2842,SD2810・2833・2834・2836 と重複	新
			－	南北 4 間	SB2842 → SA2869；SD2810・2833・2834・2836 と重複	新
	SA3912	133	19	東西 3 間		新
	SA3914		23	南北 3 α 間	SB3905 と重複	新
	SA3946	137	－	東西 2 間		新
	SA3947		－	東西 2 間		新
	SA4116	157	13・15	東西 4 間	SK4125 と重複	新
	SA4126		－	東西 2 間		新
	SA4127		－	東西 2 間	SD4123 と重複	新
	SA4128		－	東西 2 間	SD4123，SX4122 と重複	新
	SA4211	166	8・36，175・6	南北 1 間 α		新
		175	6，166・8・36	南北 2 間		新
	SA4557	186	20・64・67	南北 5 間	SB4555 と重複	
	SA4558		36・37・65・70	東西 4 間 α	SD4542 → SA4558 → SB4555 → SB4553；SA4557 と重複	
	SA4593		－	南北 2 間 α		新
	SA4594		28・38	斜行 5 間 α	SD4544 → SA4594；SB4555 と重複	新
	SA4595		46・66	南北 4 間 α	SD4542 → SA4558 → SB4555 → SA4595	新
	SA4596		5	南北 2 間 α	SD4542・SK4547 → SA4596	新
	SA4597		62・72・73	南北 4 間 α	SD4543 → SD4542 → SA4597	新
足　場	SX3959	137	－	足場穴 α	SB3940 に伴う	
竪穴住居	SI4220	167	5	小型竪穴住居		
溝	SD529	29	529	弧状溝（区画溝）	SD530 と一連?	
	SD530		530	南北溝（区画溝）	SD529 と一連?	
	SD531		531	南北小溝		
	SD538		538	L 形溝	SD538 → SD540；SX539 と重複	新
	SD540		540	東西溝（区画溝）	SK541・SD538 → SD540	
	SD2759	96-3	－	南北小溝	SB2825 → SD2857	新
	SD2785	95	1	南北溝	SD2760・2788・2789,SK2783,SX2768 と重複	
	SD2786		10	南北溝	SD2760 と重複	
	SD2787		－	南北溝	SK2780 と重複	新
	SD2788		－	東西溝（区画溝）	SD2785 と重複	新
	SD2789		－	斜方向溝	SD2785 と重複	新
	SD2790		－	東西溝	SX2781 と重複	
	SD2791		11	南北溝		新
	SD2796		－	東西溝（区画溝）	SA2793 と重複；SD2789 と一連?	新
	SD2797		－	斜め方向溝		新
	SD2799	96-1	－	斜め方向溝	SD2800 に接続し，SK2814 と重複	新
	SD2800	95	－	自然流路	SD2760 と重複	
		96-1	1	斜め方向溝	SD2804,SK2806・2807 と重複	
		96-2	86	自然流路	SD2760 → SB2825・SA2822・SD2817・SK2821	
	SD2801	96-2	－	南北小溝		新
	SD2804		－	南北溝	SD2800,SK2803 と重複	新
	SD2808		2	斜め方向小溝	SD2809 と重複	新
	SD2809		－	東西小溝	SD2808 と重複	新
	SD2810	96-2	13・15	東西溝	SB2842,SA2869,SK2812 と重複	
	SD2811		－	南北小溝		新
	SD2818		87	東西溝（SD2817 上層）	SD2717 → SD2718	

遺構種別	遺構番号	次数	S番	概要	前後関係（古→新）	掲載
溝	SD2819	96-2	86	L形溝	SD2819→SX2837；SD2817・2840と重複	
	SD2828		74	東西溝	SD2818→SD2828；SD2833・2834と重複	新
	SD2832		68	南北小溝（区画溝）		新
	SD2833		69	南北小溝（区画溝）	SD2833→SX2837	
	SD2834		71	南北小溝（区画溝）	SE2845→SD2834	
	SD2836		－	東西小溝	SD2817・2833・2840，SB2842と重複	
	SD2840		67	南北小溝（区画溝）	SD2840→SX2837；SB2835，SD2815・2836と重複	
	SD2843	96-3	12	南北小溝	SB2820→SK2841→SD2843	新
	SD3921	133	4・34	南北小溝	SB3925,SX3916,SX3919と重複	新
	SD3922		－	東西小溝	SB3925,SX3924,SX3919と重複	新
	SD3939	137	1	南北溝（区画溝）	SB3940・3945・3950,SD3941,SE3955他と重複	
	SD3941		51	蛇行溝	SD3941→SB3940・3945；SD3944，SK3942と重複	
	SD3944		54	南北溝	SD3941と重複	新
	SD3949		－	南北小溝	SB3940・3945・3950,SD3957,SK3951と重複	新
	SD3953		77	南北小溝（区画溝）		新
	SD3954		68	東西小溝		新
	SD3957		61・63・65	東西小溝	旧SX3957をSD3957とした	新
	SD3994	142	－	弧状溝	SD3994→SE3998	新
	SD4001A		－	弧状溝	SD4004Aと重複	
	SD4001B		－	弧状溝	SD4004Aと重複	新
	SD4001C		27	弧状溝	SD4000C→SE2845，SB3995	新
	SD4004A		－	弧状溝	SD4004A→SD4005	新
	SD4004B		－	弧状溝	SD4004A・B→SD4005	新
	SD4005		20	東西溝	SD4004A・B→SD4005	
	SD4007		10	東西溝	SD2817と一連？	
	SD4118	157	4	南北溝（区画溝）	SB4130，SK4119と重複	
	SD4123		1	東西溝（区画溝）	SA4128；SX4122は同に伴う	
	SD4197	165	－	南北溝	SD4121→SD4197	
	SD4201	166	16	南北溝		新
	SD4203		14	東西小溝		新
	SD4206		12	南北小溝	SD4209，SX4205と重複	
	SD4210		10	斜行溝	SD4202・4209・4215，SX4213と重複	
	SD4215		29	南北溝	SD4209→SD4215；SD4210と重複	
	SD4218	167	－	南北溝（区画溝）		新
	SD4219	165	－	南北小溝		新
	SD4221	167	－	南北溝（区画溝）		新
	SD4222		－	南北溝（区画溝）		新
	SD4223		－	南北溝（区画溝）		新
	SD4215		－	南北溝		
	SD4330	175	29・34	南北溝	SD4330→SX4347	新
	SD4335		9	南北溝	SB4340→SD4335	
	SD4345		22	東西溝		
	SD4543	186	8	蛇行溝	SD4543→SD4542→SA4597	
	SD4544		30～35	南北溝	SD4544→SB4555→SA4594	
堀	SX4122	157	五輪塔集		SD4123と一連？	
道路	SD2760	96-1	95	自然流路	SD2785・2786・2800と重複	
		96-2	－	自然流路	SD2760→SD2810；S2799・2800・2809と重複	
		96-2	86	自然流路	SD2760→SB2825・SA2822・SD2817・SK2821	
	SD2760	96-3	－	自然流路	SD2760→SB2825・SA2822・SK2821；SD2817と重複	
	SD2817	96-2	83・85	自然流路	SD2760→SD2817；SD2833・2840,SK2838と重複	新
	SD2879	96-2	3～4	自然流路	SA2822と重複	新
		96-3	4	自然流路	SD2879→SA2822→SK2841	新
	SD4002	142	－	自然流路	SD4002→SD4005	
	SD4121	157	5	自然流路	SD4121→SB4130，SK4124・4129；SD4181と重複	
	SD4209	166	30	自然流路	SD4209→SD4215；SD4202と重複	
	SD4224	167	－	自然流路		新
	SD4332	175	－	自然流路		
	SD4542	186	6	自然流路	SD4542→SA4558→SB4555→SB4553；SA4557と重複	
土坑	SK532	96-1	29	円形土坑		新
	SK533		－	方形土坑		
	SK534		－	楕円形土坑		新
	SK535		535	不整形土坑		
	SK536		－	円形土坑		新
	SK537		－	円形土坑		新
	SK541		－	円形土坑	SK541・SD538→SD540	新
	SK2761		29	楕円形土坑	SX2762と重複	
	SK2778		18	楕円形土坑	SX2767と重複	
	SK2779		33	円形土坑		新
	SK2780		25	不整形土坑	SK2780→SX2770；SD2787,SK2782と重複	
	SK2782		26	不整形土坑	SK2780と重複	
	SK2783		7	方形土坑	SD2785と重複	
	SK2784		6	円形土坑		
	SK2795		24	円形土坑		新
	SK2802	96-1	－	不整形土坑		新
	SK2803		－	不整形土坑	SD2804と重複	新
	SK2805		－	楕円形土坑		新
	SK2806		－	不整形土坑	SK2806→SD2800；SK2807と重複	新
	SK2807		3	不整形土坑	SK2807→SD2800；SK2806と重複	
	SK2812		14	不整形土坑	SD2810と重複	新
	SK2813		8・9	円形土坑		
	SK2814		－	不整形土坑	SK2814→SD2799	新
	SK2821	96-2	－	円形土坑	SD2760→SK2821	
	SK2823	96-2	－	隅丸方形土坑		新
		96-3	－	隅丸方形土坑		新
	SK2824	96-2	－	不整形土坑		新
		96-3	－	不整形土坑		新
	SK2827	96-2	87	不整形土坑	SB2830と重複	新
	SK2838		75	不整形土坑	SD2817と重複	
	SK2841	96-3	10	不整形土坑	SB2820・SA2822→SK2841	
	SK3907	133	33	円形土坑		

遺構種別	遺構番号	次	数	S番	概	要	前後関係（古→新）	掲載
土	SK3908	133		15	円形土坑			新
	SK3911			16	円形土坑			
	SK3913			37	土坑		SB3925と重複	新
	SK3916			1	方形土坑		SD3921と重複	
	SK3920			20	楕円形土坑		SB3905と重複	
	SK3924			6	楕円形土坑		SB3925,SD3922,SX3919と重複	新
	SK3942	137		53	土坑		SD3941と重複	
	SK3943			—	不整形土坑			新
	SK3948			52	円形土坑		SD3941と重複	新
	SK3951			59	円形土坑		SB3940・3945・3950,SD3949と重複	新
	SK3952			70	土坑			新
	SK3956			—	方形土坑			新
	SK4003	142		26	不整形土坑		SD4001C→SK4003；SB3995～3997と重複	
	SK4006			14	円形土坑		SD4004A→SK4006；SB3996・3997と重複	
	SK4008			29	楕円形土坑			新
	SK4117	157		—	楕円形土坑		SD4121→SK4127	新
	SK4119			9	土坑		SD4118と重複	
	SK4120			6	円形土坑			
	SK4124			18	楕円形土坑		SD4121→SK4124	
	SK4125			20	円形土坑			
	SK4129	157		17	不整形土坑		SD4121→SK4129	
	SK4198	165		4	土坑			新
	SK4199	165		1	土坑		SD4129・4197→SK4199	
	SK4216	166		—	方形土坑			新
	SK4217	166		—	方形土坑			新
	SK4327	175		3	不整形土坑			新
	SK4329			7	不整形土坑		SB4340→SK4329	新
	SK4331			12	不整形土坑		SB4340→SK4331	新
	SK4336			13	不整形土坑		SB4340→SK4336	
	SK4338			18	方形土坑		SB4340→SK4338→SK4339	
	SK4339			16	方形土坑		SB4340→SK4338→SK4339	
	SK4342			23	円形土坑			
	SK4343			25	円形土坑			
	SK4346			31	円形土坑			
	SK4348			24	土坑		SK4348→SX4344	
	SK4349			19	方形土坑		SB4340→SK4338→SK4349	新
	SK4545	186		1	円形土坑			
	SK4546			3	方形土坑		SD4544→SK4546；SB4555と重複	
	SK4547			4	楕円形土坑		SK4547→SA4596	
	SK4559			27	土坑		SD4544→SK4559	
	SK4615	193		2	方形土坑			
	SK4616			9	楕円形土坑			
扇	SX2762	95		31	土壇墓		SX2762→SX2763；SK2761と重複	
	SX2763			30	土壇墓		SX2763→SX2762；SK2761と重複	
	SX2764			19	土壇墓			
	SX2765			17	土壇墓		SX2766→SX2767	
	SX2766			16	土壇墓		SX2766・2768→SX2767	
	SX2767			15	土壇墓		SD2785→SX2768→SX2767	
	SX2768			14	土壇墓			
	SX2769			13	土壇墓		SK2780→SX2770	
	SX2770			27	土壇墓			
	SX2771			12	土壇墓			
	SX2772			2	土壇墓			
	SX2773			3	土壇墓			
	SX2774			2	土壇墓			
	SX2775			35	土壇墓			
	SX2776			36	土壇墓			
	SX2777			36	土壇墓			新
	SX2794			—	土壇墓			新
	SX2798			—	土壇墓			
	SX4207	166		26	土壇墓			
	SX4208			—	土壇墓			
	SX4212			31	土壇墓			
	SX4548	186		83	土壇墓			
	SX4549			84	土壇墓			
井戸	SE2845	96-2		73	木枠井戸		SE2845→SD2834・SX2837	
		145		1			SD4001A-C，SD4004A→SE2845	
	SE3910	133		35	木枠井戸			
	SE3955	137		64	井戸			
探 土	SX2837	96-2		76	採土遺構			
		142		2	採土遺構		SD4001A→SX2837	
	SX4333	175		14	採土遺構		SB4340→SX4333	
	SX4334			21a・b	採土遺構			
	SX4337			26	採土遺構			
	SX4341			20	採土遺構			
	SX4344			30	採土遺構		SK4348→SX4344	
	SX4347			33	採土遺構		SD4330→SX4347	
落 込	SX528	29		—	不整形落込			新
	SX539			—	不整形落込		SD538と重複	新
	SX2781	95		32	不整形土坑		SX2781→SD2790	新
	SX3919	133		2	不整形落込		SB3925,SD3921・3922,SK3924と重複	
	SX4204	166		—	落込		SD4202・4215と重複	新
	SX4205			15	浅い落込		SD4206と重複	
	SX4213			9	浅い落込		SD4210と重複	
	SX4617	193		1	落込			
	SX5010	224		1	落込			
鋳造関連	SX3917	133		29	鋳造関連？		SB3925と重複	
	SX3918			30	鋳造関連？		SB3925と重複	
p i t	SP2926	96-2		88	地鎮遺構？			新

Administrative structures surrounding Kyushu's government headquarters in the *Dazaifu*（大宰府）complex X

- the *Hiromaru*（広丸）area -

Contents

Chapter Ⅰ　Preface

(1)　A special historic site,the *Dazaifu* conplex

(2)　Excavation progress

(3)　Excavation organisation

Chapter Ⅱ　Excavation outline

(1)　Excavation outline

(2)　Fundamental stratification

Chapter Ⅲ　Features discovered

(1)　Introduction

(2)　Post-built structures

(3)　Palisades

(4)　Pit dwellings

(5)　Ditches and gullies

(6)　Holes

(7)　Burial holes

(8)　Other remnants

Chapter Ⅳ　Summary

(1)　Introduction

(2)　The range of the *Hiromaru* area

(3)　Features discovered

(4)　Conclusion

Summary

This volume is the official excavation report of the ancient government offices in the *Hiromaru*(広丸) area in the west front of the main ancient government offices of *Dazaifu*(大宰府) complex. This includes 23 trenches excavated by the **Kyushu Historical Museum**,which has undertaken work since 1973 .

The excavation in this area unveiled 30 post-built structures, 23 palisades, 1 Pit dwellings, 14 boundary ditches, 49 compartment gullies, 23 burial holes, 3 wells, and many earthen pits and hollows. Those most part dated from the 8th century to the 10th century, it's parallel with continuation time of the main ancient government offices of Dazaifu for the 2nd period. But,the phenomenon in which a building increases rapidly after the middle in the 8th century shows that maintenance of a real government office is behind schedule than other areas.

The characteristic remains found in this area is the Burial Holes. These are positioned after roughly the 10th century. At the 3rd period of Dazaifu, it is known that the official zone which had been spread to the the front of the Dazaifu government agency area had shrunk greatry. These Bureal holes were made in response to the shrink of the area front of the Dazaifu government agency area, which had used as the supplementary official area. It shows that land usage had changed significantly.

In terms of finds, vast amounts of pottery and ceramics, roof tiles, wooden object, metal objects, stone objects, clay objects, finds related to written characters and production were recoverd from a variety of features.

Much of the roof tiles are regarded as mixture from Fuchô(不丁), Kuratsukasa(蔵司) and Raiki(米木) areas, because there were few building using a roof tiles in Hiromaru area. But the important material which decides about the age of each remains. Finds related to forging and casting show that maintenance and management in the buildings of this area were performed periodically.

PLATES

大宰府政庁地区と広丸地区（上が北）

政庁周辺官衙跡遠景（西から）

大楠・広丸地区から南を望む

第 29 次調査区 A トレンチ
全景（北から）

第 29 次調査区 A トレンチ
SD531（北から）

第 29 次調査区 A トレンチ
SX528（南から）

第 29 次調査区 B トレンチ
全景（東から）

第 29 次調査区 B トレンチ
全景（西から）

第 29 次調査区 B トレンチ
SD540 西端部（西から）

第 29 次調査区 C トレンチ
全景（南から）

第 29 次調査区 C トレンチ
全景（北から）

第 29 次調査区 C トレンチ
SK533（南から）

第 95 次調査区全景（南から）

第 95 次調査区
西半部遺構群（上が北）

第 95 次調査区
SD2760（西から）

第 95 次調査区
土壙墓群（南から）

第 95 次調査区南東部の
土壙墓群（西から）

第 95 次調査区
SX2764（西から）

第 95 次調査区
SX2773（右が北）

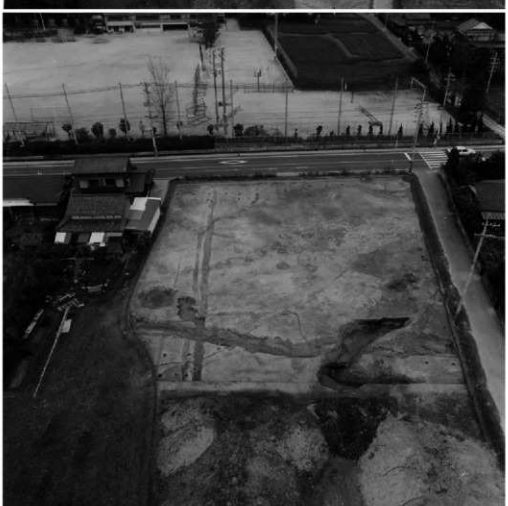
第 95 次調査区
SX2774（右が北）

第 95 次調査区
SX2775（東から）

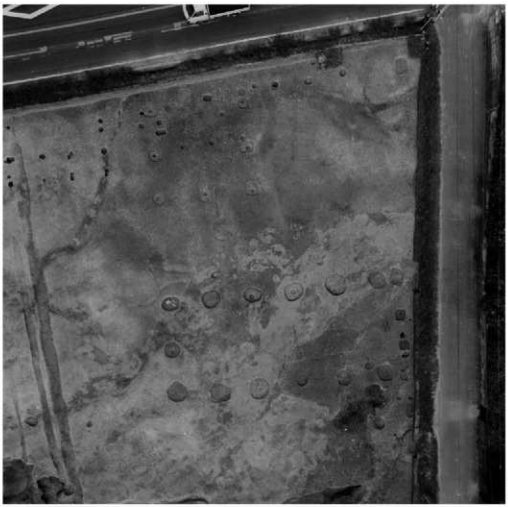
第 95 次調査区
SX2776（東から）

第 95 次調査区
SX2794（南から）

第 96 次調査
北区全景（上が北）

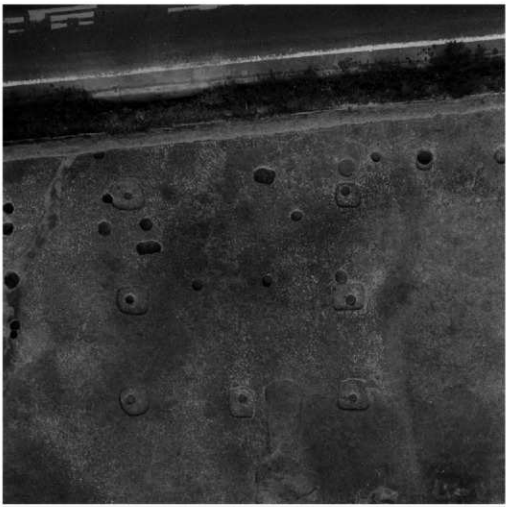


第 96 次調査
北区全景（南から）

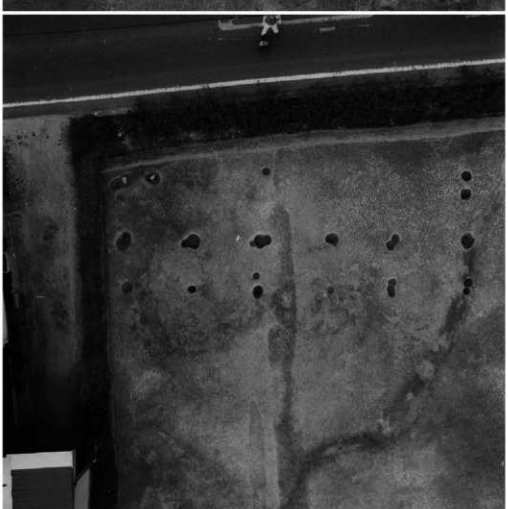


第 96 次調査北区
SB2825・2830（上が北）

第 96 次調査北区
SB2825・SD2760（上が北）



第 96 次調査北区
SB2830（上が北）



第 96 次調査北区
SB2835（上が北）

第 96 次調査北区
全景（南から）

第 96 次調査北区
SB2825（西から）

第 96 次調査北区
SB2825（北から）

第 96 次調査北区
SB2830（南から）

第 96 次調査北区
SD2833･2840 南端部（南から）

第 96 次調査南区
全景（南から）

第 96 次調査南区
SD2760（東から）

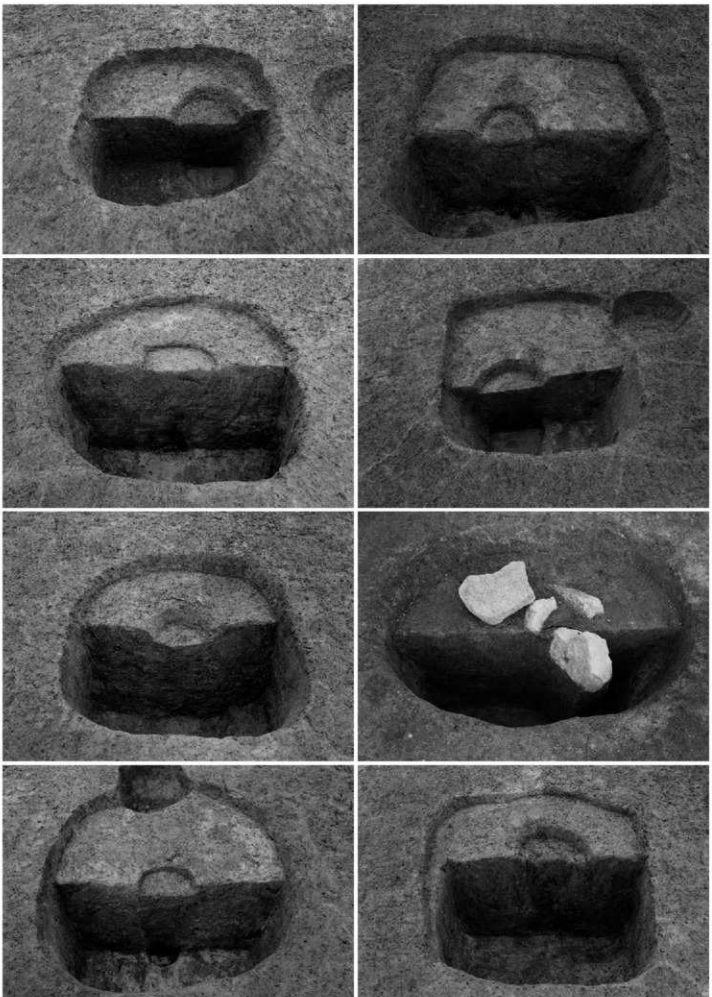
第 96 次調査南区
SX2815 全景（東から）

第 96 次調査南区
SX2815（北から）

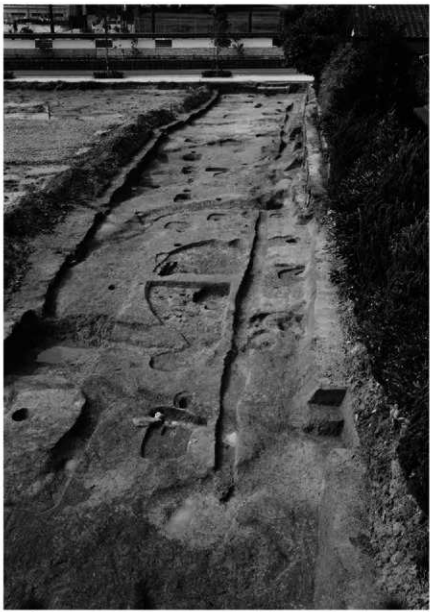
第 96 次調査南区
SX2816（南から）

第 96 次調査北区
SE2845（北から）

第 96 次調査北区
SE2845 井戸枠（北から）



第 96 次調査 SB2825・2830 柱穴半裁状況



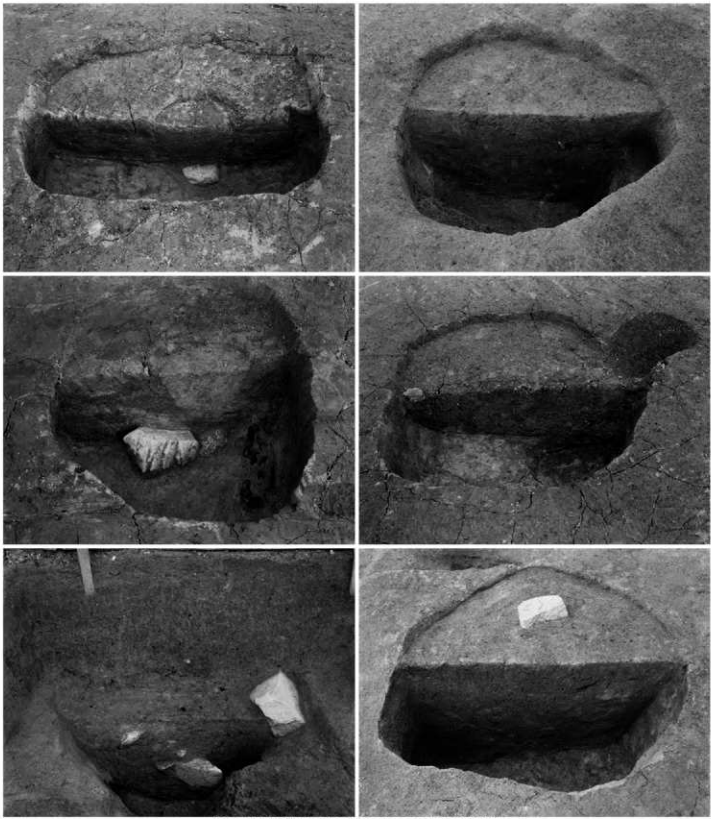
第 96 次補足調査区
全景（南から）

第 96 次補足調査区全景（南から）

第 96 次補足調査区
SB2825 東半部（西から）

第 96 次補足調査区
SA2822（北から）

第 96 次補足調査区
SK2841（西から）



第 96 次補足調査区 SB2825・SA2833 柱穴半裁状況

第 133 次調査区
全景（南から）

第 133 次調査区
SE3910 検出状況（南から）

第 133 次調査区
SE3910 完掘状況（西から）

第 137 次調査区
全景（上が北）

第 137 次調査区
SB3940・3945・3950（上が西）

第 137 次調査区
全景（北から）

第 137 次調査区
全景（北東から）

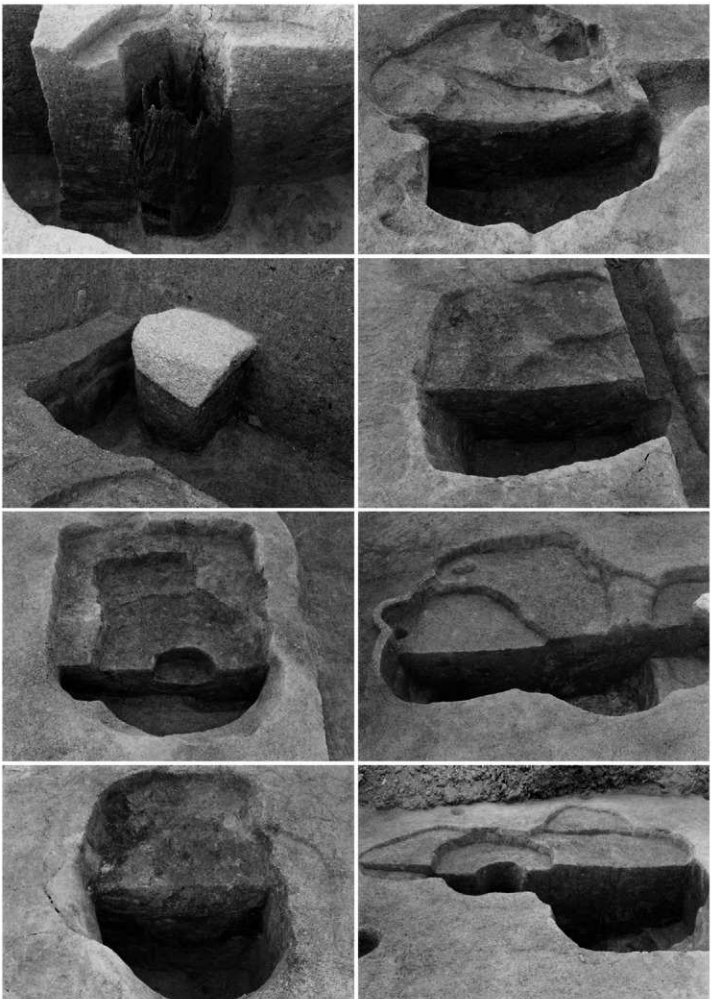
第 137 次調査区
掘立柱建物群（東から）

第 137 次調査区
SB3940・3945・3950（北から）

第 137 次調査区
SB3945・3950（北から）

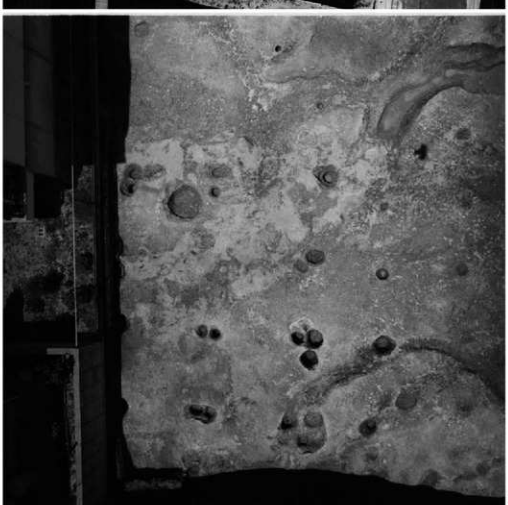
第 137 次調査区
SE3955（北から）

第 137 次調査区 SB3940・3945・3950 柱穴半裁状況



第 137 次調査区 SB3940・3945・3950 柱穴半截状況

第 142 次調査区
全景（上が北）



第 142 次調査区
SB3995 ～ 3997（上が北）

第 142 次調査区
南半（北から）

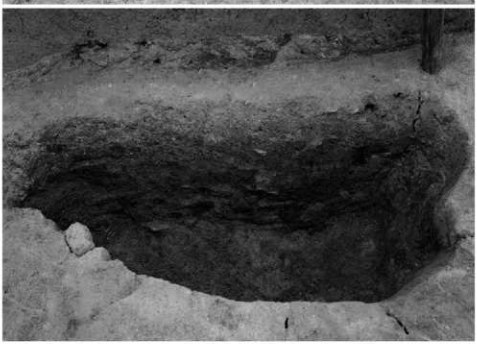
第 142 次調査区
南半（東から）

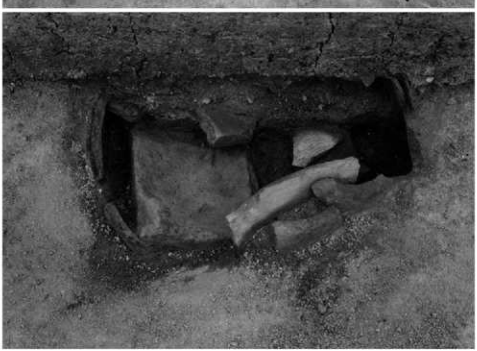
第 137 次調査区
SB3995 ～ 3997（東から）

第 142 次調査区
SB3996・3997（東から）

第 142 次調査区
SB3998・3999（南から）

第 142 次調査区
SB4000（南から）





第 142 次調査区
SB4000 柱穴半裁状況（南から）

第 157 次調査区
全景（西から）

第 157 次調査区
北半部全景（東から）

第 157 次調査区
SX4122 出土状況（南から）

第 165 次調査区全景（左が西）

第 165 次調査区全景（左が東）

第 166 次調査区
全景（上が北）

第 166 次調査区
全景（南から）

第 166 次調査区全景（南から）

第 166 次調査区
SD4215（北から）

第 166 次調査区
SD4209（東から）

第 166 次調査区 SD4209（西から）

第 166 次調査区
全景（北から）

第 166 次調査区
SB4200（西から）

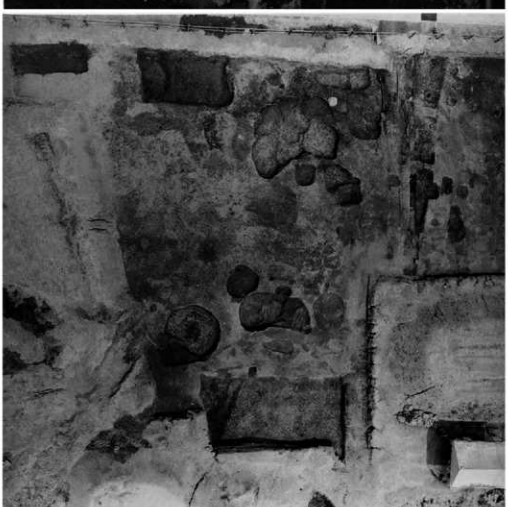
第 166 次調査区
SB4200（南から）

第 167 次調査区
全景（東から）

第 167 次調査区
SI4220（西から）

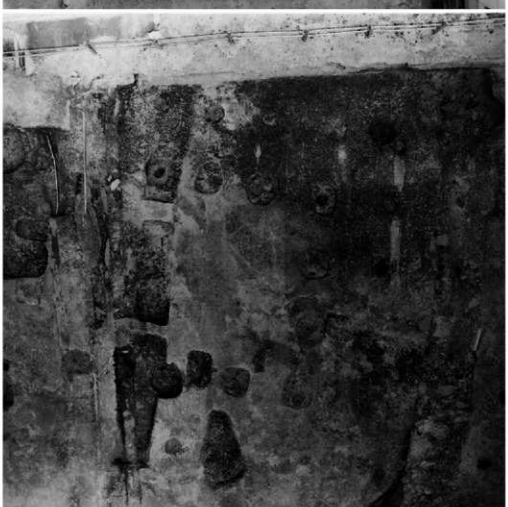
第 167 次調査区
SI4220 カマド（西から）

第 175 次調査区
全景（上が北）



第 175 次調査区
西半（上が北）

第 175 次調査区
東半（上が北）



第 175 次調査区
SB4340（上が北）

第 175 次調査区　SK4336，
SX4333･4334（上が北）

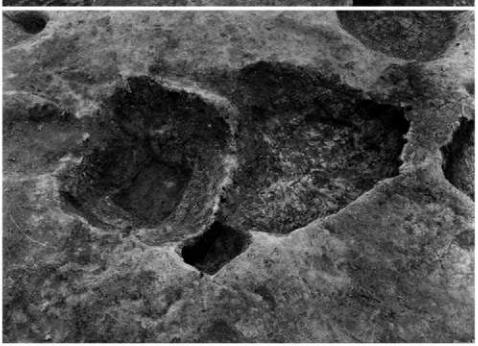
第 175 次調査区　SK4342･4343，
SX4344･4347，SD4345（上が北）

第 175 次調査区
北半（西から）

第 175 次調査区
SB4340（南から）

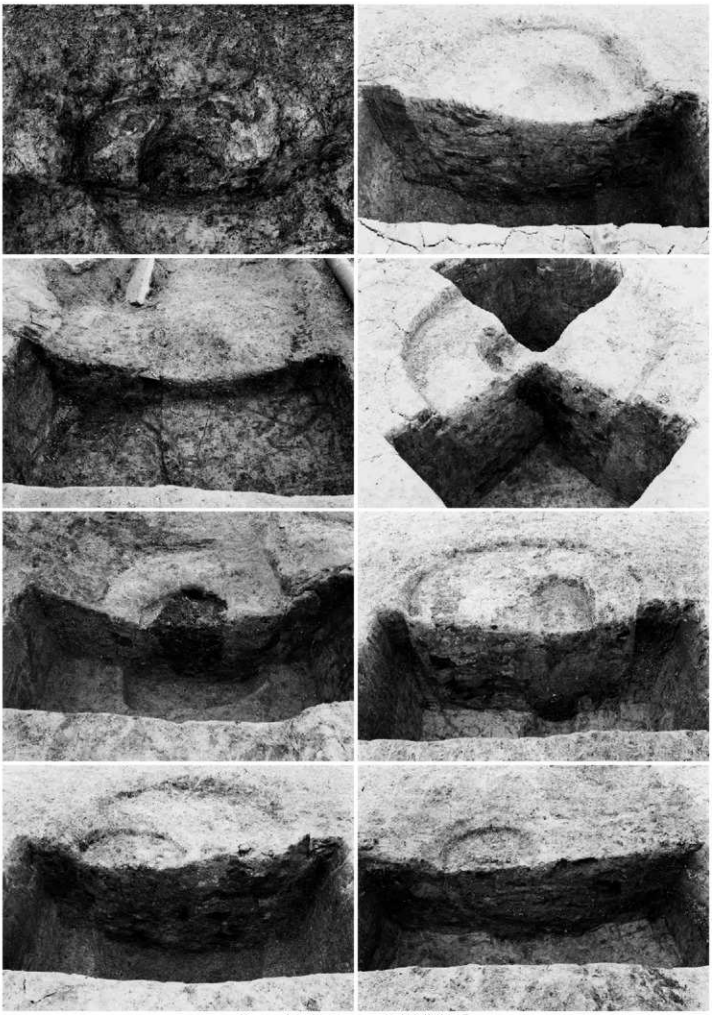
第 175 次調査区
南半（西から）

第 175 次調査区
SX4334（東から）

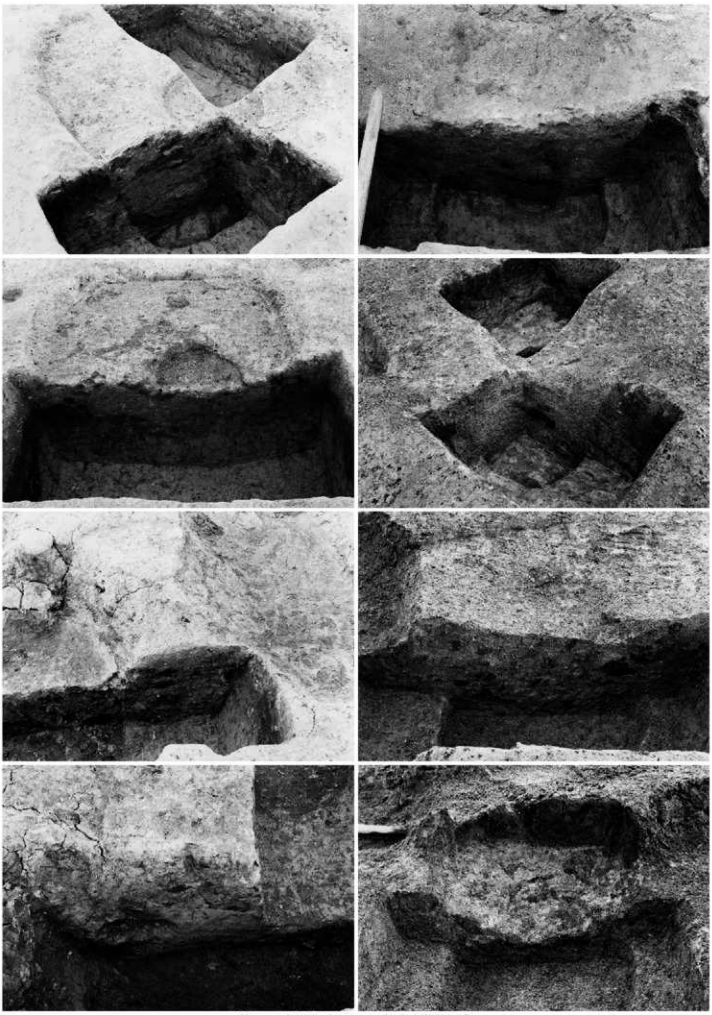


第 175 次調査区
SK4338･4339（東から）

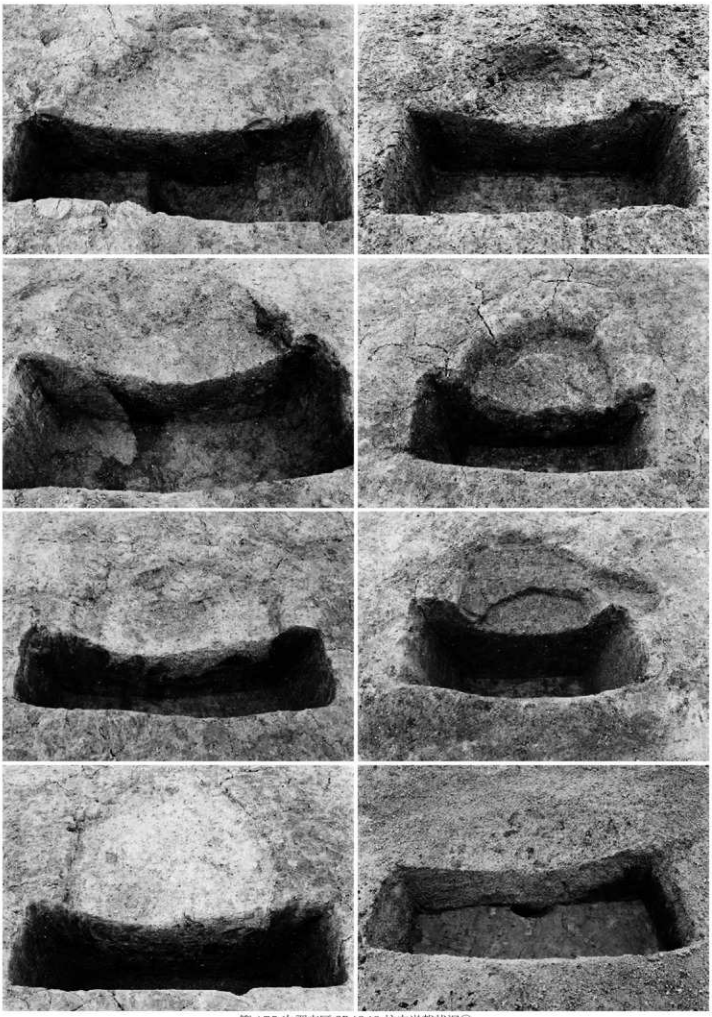
第 175 次調査区
SX4347（東から）



第 175 次調査区 SB4340 柱穴半裁状況①



第 175 次調査区 SB4340 柱穴半裁状況②



第 175 次調査区 SB4340 柱穴半裁状況③

第 186 次調査区
北半全景（東から）

第 186 次調査区
北半全景（南から）

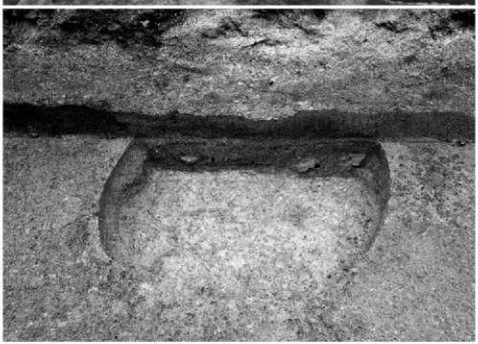
第 186 次調査区
SB4550 ～ 4552 柱穴半裁(南から)

第 186 次調査区
SB4550A・B 柱穴切合（南東から）

第 186 次調査区
SB4550B 柱根（北西から）

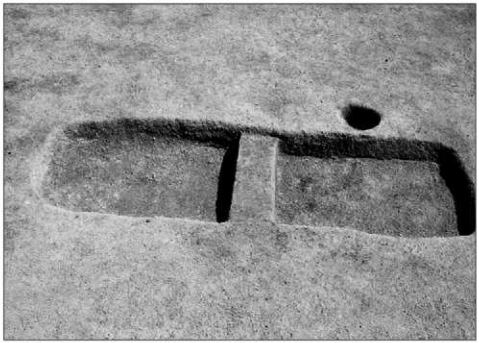
第 186 次調査区
SB4550B 柱根（西から）

第 186 次調査区
南半全景（北から）



第 186 次調査区
SK4545（南から）

第 186 次調査区
SK4546（東から）



第 186 次調査区
SX4548（西から）

第 186 次調査区
SX4549（西から）

第 186 次調査区
SD4542 東端土層（西から）

第 193 次調査区
全景（西から）

第 193 次調査区
SK4615（南から）

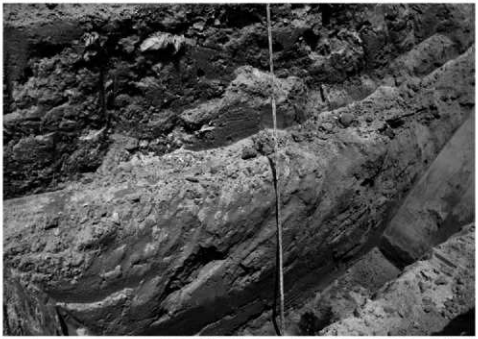
第 193 次調査区
SK4616（南から）

第 202 次調査区
A トレンチ（南から）

第 202 次調査区
B トレンチ（北から）

第 202 次調査区
D トレンチ（西から）

第 202-2 次調査区
E トレンチ（南から）



第 202-2 次調査区
E トレンチ土層（東から）

第 202-2 次調査区
F トレンチ（西から）

第 202-2 次調査区
F トレンチ土層（南から）

第 202-2 次調査区
G トレンチ（北から）

第 202-2 次調査区
H トレンチ（東から）

第 211 次調査区
トレンチ全景（南から）

第 211 次調査区
トレンチ全景（北東から）

第 211 次調査区
トレンチ土層（西から）

第 214 次調査区
A トレンチ全景（北西から）

第 214 次調査区
A トレンチ土層（北から）

第 214 次調査区
B トレンチ土層（東から）

第 223 次調査区
トレンチ全景（南東から）

第 223 次調査区
トレンチ全景（南から）

第 223 次調査区
トレンチ土層（南西から）

第 224 次調査区
2 トレンチ全景（東から）

第 224 次調査区
2 トレンチ土層（南東から）

第 224 次調査区
2 トレンチ土層（南から）

報告書抄録

ふりがな	だざいふせいちょうしゅうへんかんがあと
書　名	大宰府政庁周辺官衙跡
副書名	広丸地区　遺構編
巻　次	X
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小田和利・大庭孝夫・下原幸裕・小澤佳憲（編集）
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3　Tel.0942-75-9575
発行年月日	平成 29（2017）年 3 月 31 日

ふりがな	ふりがな	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		(㎡)	
だざいふせいちょうしゅうへんかんがあと（ひろまるちく）	ふくおかけんだざいふしかんぜおんじ	40221	210316	33° 30′ 45″	130° 30′ 45″	19730620 ～ 20140626	7093	学術調査 住宅建設 他
大宰府政庁周辺官衙跡（広丸地区）	福岡県太宰府市観世音寺 2 丁目 216 番地他							

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大宰府政庁周辺官衙跡（広丸地区）	官　衙	奈良～平安時代	掘立柱建物・柵・溝・井戸・土坑・土壙墓・鋳造関連・整地層	土器・陶磁器・瓦塼類・木製品・金属製品・土製品・石製品・生産関連遺物	多数の建物 条坊に対応する区画

概　要

本報告書は，昭和 46 年度から九州歴史資料館が進めてきた大宰府史跡の発掘調査の中で，大宰府政庁の周辺に広がる官衙地区のうち，広丸地区に関する正式報告書の第 1 冊目にあたる。

広丸地区には，多くの掘立柱建物が確認できるが，ほとんどは 8 世紀後半～ 10 世紀前半に収まるもので，井戸などの他の遺構についても同様の傾向にあることが判明した。また，10 世紀前半以降は建物群に代わり土壙墓群が営まれるようになるなど，土地利用形態の大きな変化を捉えることができた。こうした状況は，大宰府政庁 Ⅲ 期の段階に官衙としての機能を失っていることを示すが，東側の不丁地区や日吉地区などでも同様の状況が読み取れることから，少なくとも前面官衙域に共通した変化と捉えることができる。

既刊報告書一覧

『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅰ－政庁前面広場地区－』2009年3月
『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅱ－日吉地区－』2010年3月
『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅲ－不丁地区　遺構編－』2011年3月
『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅳ－不丁地区　遺物編－』2012年3月
『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅴ－不丁地区　遺物編２－』2013年3月
『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅵ－不丁地区　図版編－』2014年3月
『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅶ－大楠地区　遺構編－』2015年3月
『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅷ－大楠地区　遺物編－』2016年3月
『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅸ－大楠地区　総括・図版編－』2017年3月
『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅹ－広丸地区　遺構編－』（本書）

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 28	登録番号 8

大宰府政庁周辺官衙跡Ⅹ
－広丸地区　遺構編－
平成29（2017）年3月31日

発　行　九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢5208－3
印　刷　福岡印刷株式会社
〒812-0892
福岡市博多区東那珂1-10-15

付　図　広丸地区遺構配置図(1/400)